

兵庫県立大学 環境人間学部

エコ・ヒューマン地域連携センター
活動・研究報告集(通巻9号)

学生が動けば
地域も変わる!



特別フィールドワーク「ため池アクション」
実施の様子



CONTENTS

| | | |
|----|---|----|
| 01 | はじめに | 01 |
| 02 | エコ・ヒューマン地域連携センターについて 1. エコ・ヒューマン地域連携センターと運営体制 2. 地域連携プロジェクトの概要 3. 特別フィールドワーク 4. 情報発信 | 02 |
| 03 | 地域連携プロジェクト - 教員プロジェクト - 1. 東部六地区活性化ラボ Go EAST！（杉山武志） 2. 学生国際協力団体 CHISE（乾美紀） 3. 播磨プランニングラボ（太田尚孝） 4. 学生島活プロジェクト（太田尚孝） 5. ため池みらいプロジェクト（柴崎浩平） 6. 草刈りエクササイズ（森寿仁、柴崎浩平） 7. こどもみどりプロジェクト（柴崎浩平） *（ ）は担当教員 | 21 |
| 04 | 地域連携プロジェクト - 学生プロジェクト - 1. 兵庫商品開発プロジェクト DEN（坂本薫） 2. 学生団体 Change（三宅康成） 3. Campus tree（柴崎浩平） 4. 農楽部 畑っこ（坂本薫、柴崎浩平） 5. conneko- コネコ-（保坂裕子） 6. Jyoto's（乾美紀） 7. + art プロジェクト（柴崎浩平） 8. 地域連携 café ルリアン（柴崎浩平） 9. 山採りみらいグループ（柴崎浩平） 10. 広尾東ファンクラブ（柴崎浩平） *（ ）は顧問 | 37 |
| 05 | リサーチペーパー 1. 藤原颯太・北梨緒乃・永井結季子・山鳥実咲・太田尚孝 「ループリックを用いた兵庫県内の将来都市構造図の評価」 2. 久保田薫葉・池本和奏・伊澤友美・樽角咲希・太田尚孝 「学生主体のPBLと教科書の利活用 —2025年度のイーグレひめじでの活動を通して—」 3. 柴崎浩平・佐々木太一 「ため池の利活用に向けた計画づくり —地域と学生の連携プログラム「ため池アクション」を通して—」 | 61 |





01 はじめに

『活動・研究報告集』第9号の編集にあたって

2025年度も無事に、エコ・ヒューマン地域連携センター（EHC）の一年の記録と成果を記した『活動・研究報告集』を発行することができました。早いもので、今号で通巻9号です。これもひとえに、日頃からEHCを支えてくださっている地域の皆様、本学の関係各位のご尽力によるものです。本報告集の巻頭を記すにあたり、EHCに関わる全ての皆様に感謝を申し上げます。

さて、EHCには、教員がイニシアチブをとる「教員プロジェクト」の活動と、学生が主体となって動かす「学生プロジェクト」の活動があります。教員プロジェクトは新規プロジェクトも含めて10件、学生プロジェクトは11件、計21件のプロジェクトが元気に活動を展開しています。

地域連携には質の高い活動内容が希求されますので、必ずしもプロジェクト数が大事な訳ではないのですが、私たちEHCとしては環境人間学部で学ぶ学生たちの様々なニーズに応えられるよう、ここ数年にわたってプロジェクトを増やしてきました。各プロジェクトに参加する学生数も増加傾向にあります。「地域連携活動に参加してみたい」「地域の人たちに寄り添って一緒に地域課題解決に臨んでみたい」と学生たちが思える環境を創造しておくことは、地域連携活動の第一歩となります。学生たちの参加意欲を育むことは、本センターが目指している「学生が動けば、地域も変わる」実践につながっていくものと考えています。

ところで、今年度のEHCでは、地域連携活動の質的向上をはかる一環として、各プロジェクトの外部資金獲得の支援にも力を注ぎました。その成果として、今年度は5件の外部資金を得ています。支援にあたっては、コーディネーター教員を務めてくださっている柴崎浩平助教の果たした役割が大きかったと感じています。学生たちが外部資金の申請に挑むのは何かとハードルもあるものです。そうしたなか、学生たちからの相談に丁寧に応対して、申請から採択への道を拓いてくれました。

EHCには、巻頭で紹介しきれない魅力にあふれるプロジェクトが多数あります。ぜひ本報告集を開いていただき、各プロジェクトの活動に触れてもらえればと願っています。

また、本報告集では各プロジェクトの報告以外にも、EHC兼務教員や学生から寄稿を受けた貴重な研究成果も掲載しています。ぜひご覧いただき、実践と研究が連動するダイナミックなEHCの躍動を感じていただければ幸いです。

2026年3月

エコ・ヒューマン地域連携センター長
杉山 武志

02 エコ・ヒューマン地域連携センターについて

1 エコ・ヒューマン地域連携センターと運営体制

「学生が動けば地域も変わる」

エコ・ヒューマン地域連携センター（略称：EHC）は、兵庫県立大学環境人間学部によって、2011年3月23日開設されました。「学生が動けば地域も変わる」というキャッチコピーを掲げ、様々な地域連携活動を創出・支援しています。

EHCの目的

学部の専門知を地域との交流や連携活動に活用し、学生の実践力の養成とともに地域の人材の育成を図り、地域の発展に貢献することにあります。

そのために、環境人間学部の学生・教員による地域連携活動を推進しています。地域連携活動とは、地域に関わるさまざまなアクター（住民、行政、NPO、企業、専門家など）と学生・教員が連携し、地域課題解決の新しいかたちを生み出すこと。大学の資源（知識・技術・マンパワー）をいかし、地域の課題解決や価値の創造に挑戦することで、大学と地域の相互発展をめざしています。



運営委員

環境人間学部は、文系・理系の枠を超えて人間の本質を見つめ、豊かな環境や暮らしを探究します。学部は、5つの系・課程で構成され、そのうち、3つの系に所属する教員が兼務教員を務めています。毎月1回程度の頻度で、運営委員会を開催し、情報共有をおこなうとともに、EHCが進む方向性などについて議論を重ねています。

| | |
|------------|---|
| センター長 | 杉山 武志 |
| 副センター長 | 太田 尚孝 |
| コーディネーター教員 | 柴崎 浩平 |
| 兼務教員 | 乾 美紀、荘所 直哉、竹端 寛、保坂 裕子、三田村 哲哉、 三宅 康成、森 寿仁、安枝 英俊 |
| 連携教員 | 坂本 薫（先端食科学研究センター長） |

（五十音順）



杉山 武志



太田 尚孝



柴崎 浩平

取組の内容

以下の3つの活動を通して、地域連携活動を促しております。

地域連携プロジェクト

多様な主体と連携した実践・研究プロジェクトの実施・支援を通して、学生が主体的に取り組みやすい環境づくりをおこない、地域人材を育成しています。

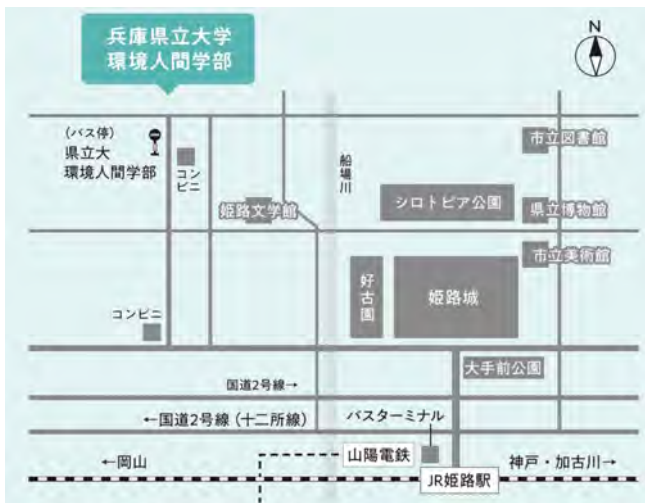
相談受付・対応

学内外からの様々な相談に応じることで、ニーズや課題を発掘するとともに、大学の資源（知識、技術、マンパワーなど）とのマッチングを図ります。

情報発信

EHCのホームページおよび各種SNSの運用をベースに、主には各種地域連携プロジェクトの活動内容や成果を発信しています。

アクセス



交通アクセス
JR・山陽電鉄

姫路駅北口より神姫バス：220円／乗車時間：約10分
9番のりば：11、12、13系統
10番のりば：7、10系統
「県立大環境人間学部」下車



〒670-0092

兵庫県姫路市新在家本町1-1-12
姫路環境人間キャンパス内 いちよう南館P104

2 地域連携プロジェクト

地域連携
プロジェクト

= 教員
プロジェクト

+ 学生
プロジェクト

参加学生総数

289
(昨年度 255)

地域連携プロジェクトには大きく、教員が主導する「教員プロジェクト」と学生団体が主導する「学生プロジェクト」があります。両プロジェクト合わせて、289名の学生が地域連携活動に従事しています。

右図にあるように、多くは学生プロジェクトに所属しており（65%）、両プロジェクトに参加する学生も存在します（7%）。また、地域連携プロジェクトに参画する学生の学年をみると、1回生（40%）、2回生（26%）、3回生（24%）、4回生（10%）の順に多くみられます。

教員プロジェクト

プロジェクト数

10
(昨年度 9)

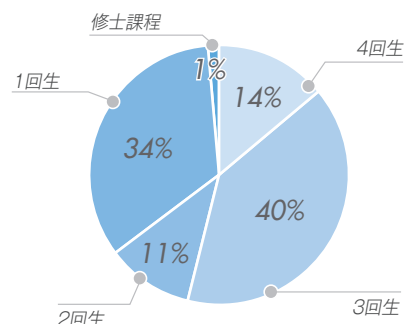
活動のキーワードとしては、建築や地域創生、高齢者、ラオス、里山などがみられ、環境人間学部の多様さが確認されます。主なフィールドは、姫路市近辺の他、淡路島や丹波篠山市といった兵庫県下の他、海外もみられます。

参加学生数

100
(昨年度 81)

参加学生は100名であり、右図にあるように入学年度ごとにみると、3回生（40%）や1回生（34%）が多い傾向がみられます。

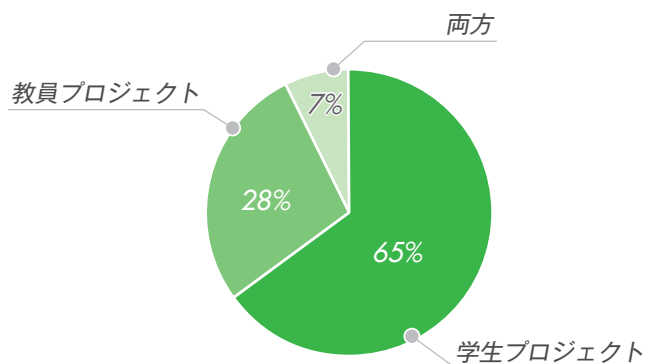
教員プロジェクトにおける
入学年度ごとの学生数 (n=100)



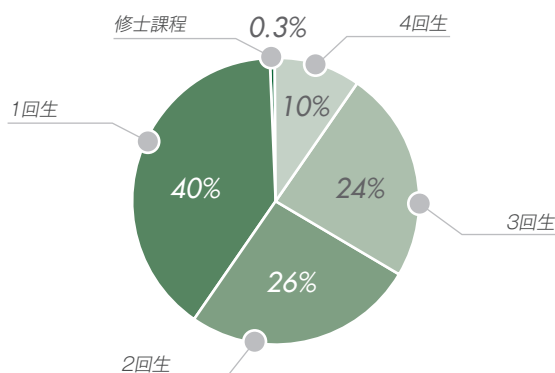
教員プロジェクト一覧

| プロジェクト名 | 教員 | キーワード | フィールド | メンバー数 |
|----------------------|----------|-------------------------|------------------|-------|
| 淡路島プロジェクト | 三田村哲哉 | 建築、都市、地域 | 淡路島 | - |
| 播磨プランニングラボ | 太田尚孝 | 都市計画、計画演習、自治体連携 | 高砂市 | 8 |
| 東部六地区活性化ラボ Go EAST ! | 杉山武志 | コミュニティ経済、地域コミュニティ、大学間連携 | 丹波篠山市 (東部6地区) | 20 |
| お太子活性化ラボ | 杉山武志 | まちづくり、ものづくり、居場所づくり | 太子町 | 2 |
| 北八代プロジェクト | 安枝英俊 | 集会所、半屋外空間、居場所づくり | 姫路市 | 9 |
| 学生島活プロジェクト@家島 | 太田尚孝 | 空き家再生、DIY、離島 | 姫路市 (家島諸島) | 12 |
| 学生国際協力団体 CHISE | 乾美紀 | 教育支援、洪水対策支援、ラオス山岳地帯 | ラオス | 22 |
| ため池みらいプロジェクト | 柴崎浩平 | 水・農業、里山、コミュニティ・ビジネス | 東播磨 | 19 |
| 草刈りエクササイズ | 森寿仁、柴崎浩平 | 草刈り、エクササイズ、農村 | 加古川市他 | 5 |
| こどもみどりプロジェクト | 柴崎浩平 | 小学校、農業体験、食育 | 姫路市 | 8 |

所属プロジェクトごとの学生数（人）（n=289）



地域連携プロジェクトにおける入学年度ごとの学生数（人）（n=289）



学生プロジェクト

プロジェクト数
(学生団体数)

11

(昨年度 11)

活動内容のキーワードとしては、農業、食、栄養、里山、国内外の子どもなどみられ、環境人間学部の多様さが確認されます。主なフィールドとしては、姫路市その他、明石市や加古川市、高砂市など姫路市から東のエリアが中心となっています。

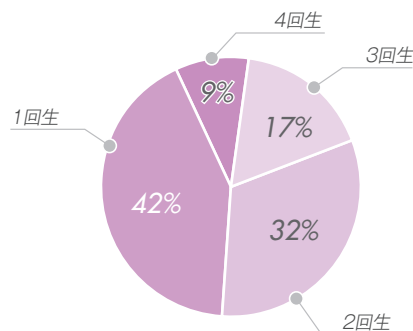
参加学生数

208

(昨年度 190)

参加学生は 208 名であり、右図にあるように入学年度ごとにみると、1回生（42%）、2回生（32%）、3回生（17%）の順に多くみられます。

学生プロジェクトにおける入学年度ごとの学生数（n=208）



学生プロジェクト一覧

| 団体名 | 顧問教員 | キーワード | フィールド | メンバー数 |
|------------------|-------------|-------------------------|-------------------|-------|
| 農楽部 畑っこ | 坂本薫 柴崎浩平 | 農業、多世代交流、地域交流 | 姫路市（環境人間キャンパス内の畑） | 21 |
| campustree | 柴崎浩平 | キャンドル、地域交流、コミュニケーション | 高砂市など | 31 |
| Change | 三宅康成 | 子ども、地域交流、イベント企画 | 姫路市、明石市、高砂市 | 32 |
| 木くらげ | 荘所直哉 | 里山、地域、学生 | 里山（姫路市香寺町須加院） | 28 |
| 兵庫商品開発プロジェクト DEN | 坂本薫 | 食、農、栄養 | 学内、姫路市 | 35 |
| conneko- コネコ- | 保坂裕子 | 子ども食堂、学習支援、ボランティア | 明石市、高砂市、加古川市 | 25 |
| Jyoto's | 乾美紀 | 外国ルーツの子ども、学習支援、地域ネットワーク | 姫路市城東町 | 11 |
| + art プロジェクト | 柴崎浩平 | アート、デザイン、地域交流 | 姫路市、加古川市 | 23 |
| 地域連携 café ルリアン | 柴崎浩平 | 場づくり、学生間交流、インキュベート | 学内 | 3 |
| 広尾東ファンクラブ | 柴崎浩平 | 農村、地域活性化、コミュニティ | 加古川市 | 8 |
| 山採りみらいグループ | 柴崎浩平 | 里山活用、コミュニティ・ビジネス、山採り | 加古川市 | 7 |

地域連携プロジェクトへのサポート

学生が集う場づくり

学生団体間および学内外のネットワークを確保・強化すべく、新入生歓迎会やEHC交流会、EHCランチを学生と企画・実施するとともに、オープンキャンパス等の各種イベントにEHCとして出展しました。

独自保険制度

多様な地域活動を安全・安心に実施するため、保険体制をみなおし、新たな保険に加入する仕組みを構築しました。

学生が集う場づくり

春フェスの開催

新入生を歓迎するため、「春フェス」を開催しました。本「春フェス」は、学生が春フェス実行委員を立ち上げ、企画・実施いたしました。当日は、食に関する学生団体による軽食の提供などをおこない、100名以上の学生が参加しました。



**地域!学生!
!新歓!
春フェス**

2025 5.8 (木) 12:10~12:50

EHC (エコ・ヒューマン地域連携センター) には、地域連携活動に関わる学生団体が多く存在しており、今回は9つの団体が参加します! 各団体の学生と交流ができる機会なので、ぜひ、地域連携活動に興味のある学生は気軽にきてみてください。先輩とランチしながら、地域連携活動だけでなく学生生活についても楽しくお話しできる機会です!

参加団体: DEN, campustree, 木くらげ, ぽっこ, changes, コネコ, Jyoto's, *art プロジェクト, 地域連携cafe ルリアン, 広尾葉ファンクラブ, 山探りみらいグループ, CHSE, ため池みらいプロジェクト, こどもみらいプロジェクト, Go EAST!, 華野りエクササイズ

場所: 環状人権キャンパス3階特別教室

QRコードを
QRコードを
EHCのインスタ
のQRコードを
のQRコードを

主催: フェス実行委員会 (地域連携cafeルリアン等)
共催: 立大環境系人権学部エコ・ヒューマン地域連携センター



先述のプロジェクトを遂行するとともに、活動しやすい環境を整えるべく、各種サポートをおこないました。

活動資金の獲得支援

地域連携プロジェクトの活動を拡充させるため、コンペティション形式にて活動助成をおこないました。また、外部資金の獲得に向けた支援をおこないました。

EHC の開放

EHC を開放し、学生が打ち合わせ等に使用できるよう、開放するようにしました（予約制）。

学生資金の獲得支援

コンペの開催

活動助成の対象として、大きく2つの部門を設けました。① EHC 教員プロジェクト部門、② EHC 学生プロジェクト部門。採択された地域連携プロジェクトは以下の通りです。各プロジェクトの詳細な内容は、本報告書に記載しております。なお、（ ）内は顧問ないし担当教員を意味します。

① EHC 教員プロジェクト部門

学生国際協力団体 CHISE（乾）
学生島活プロジェクト@家島（太田）

② EHC 学生プロジェクト部門

conneko- コネコ -（保坂）、Change（三宅）、DEN（坂本）、
+ art プロジェクト（柴崎）、山採りみらいグループ（柴崎）
Jyoto's（乾美紀）、畑っこ（坂本、柴崎）

外部資金の獲得支援

2025 年度に獲得した外部資金 一覧

| 事業名 | 事業主体 | 金額 | プロジェクト |
|----------------------|----------------|---------------------------|--|
| 地域×大学×企業のひょうご絆プロジェクト | 兵庫県企画部地域振興課 | 計 110 万円 (3 プロジェクトの合計) | ・特別フィールドワーク「ため池アクション」 ・ため池みらいプロジェクト |
| SDGs HYOGO 青年チャレンジ | 公益財団法人兵庫県青少年本部 | 20 万円 | ・学生団体広尾東ファンクラブ |
| 加古川市協働のまちづくり推進事業 | 加古川市市民活動推進課 | 20 万円 | ・学生団体山採りみらいプロジェクト |

3 【授業】 特別フィールドワークの実施

授業としての「特別フィールドワーク」をEHCとして企画・運営いたしました。
今年度は、以下の2つをおこないました。

① 「空き家再生実践演習」

本授業の目的は、空き家が社会問題化している家島をフィールドに、空き家改修の実体験を通して、空き家の再生の実情を知るとともに、必要な技術や知識を実践的に学ぶことにあります。



受講生（8名）は、3年生以上の学生であれば、系やゼミに関係なく履修できるようにしました。

なお、本授業は、教員プロジェクト「学生島活プロジェクト」の一環として行われました。詳細は「学生島活プロジェクト」の報告をご覧ください。

② 「ため池アクション」

農業・農村が抱える課題に関して、学生3人程のチームを組み、地域住民、専門家、ファシリテーターと共に、6ヶ月間で1つのテーマに取り組みました。

参加学生数は13名、1,2回生の参加がみられました。また、サポーターとして昨年度の実験生が2名参加。

実施時期は、2024.5～10、実践フィールドは加古川市、稲美町。地域課題の多くは、一朝一夕に解決できるものではなく、厳しい現実もあります。そういったなかでの、「新しいこと」や「楽しいこと」を生み出していき、そういったムードを作っていくことを大事にして実施してきました。

ため池みらい研究所

4/30*まで
参加学生 9名募集中!
説明会実施中!

参加費無料!
農村とため池が教室だ!

ため池アクション!
2025.5月-10月

ため池アクションとは?
「ため池」「農業」「農村」の課題に、
地域と協働で取り組む
学生向けプログラム

ACTION
取り組むこと

1 地域の夏祭りやプロデュースしよう!

2 みんなでお米を作る「お米クラブ」を作ろう!

※100% 地域・農村に貢献する活動に限定
※2025年5月～10月の実施予定

この活動を通じて、地域の活性化や持続可能な社会の実現を目指します。

お米づくりは農家一丸の行事でした。高校生が農家を訪問して、お米づくりの現場が体験できる貴重な機会です。お米づくりを通じて、お米づくりの現場を知り、お米づくりの現場を知り、お米づくりの現場を知ります。

お米づくりは農家一丸の行事でした。高校生が農家を訪問して、お米づくりの現場が体験できる貴重な機会です。お米づくりを通じて、お米づくりの現場を知り、お米づくりの現場を知ります。

ACTION 1 地域の夏祭りをプロデュースしよう！

地域にとってどんな夏祭りが求められているか。学生企画の実施

夏祭りを故郷に帰るきっかけにしてもらい、交流を促す2つの企画を考案・実施しました。

1つ目は大声大会で、大人12人、子ども2人が参加しました。2つ目は盆踊り練習会で、これまで参加していない人への参加を呼びかけました。学生が企画した盆踊りの練習会を通じて当日の会場の一体感を生み出すなど、確かな成果がありました！

参加者へのアンケート調査を実施したところ「今年の夏祭りは活気があった」「今後も夏祭りが開催されることを望む」「温かい歓迎と継続希望」の声をいただき、学生も地域活動の楽しさと運営の難しさを肌で感じることができました。



ACTION 2 みんなでお米を作る「お米クラブ」を作ろう！

学生視点で、「お米」が抱える問題解決策を提案

昨今、社会的にも関心の高い「お米」が抱える問題に対する解決策を学生視点で提案いたしました。

2チーム7人が苗を作る種まきから稲刈りまで関わり、それぞれの「お米クラブ」を提案しました。1つ目は、大学生を対象にした「自然とつながる居場所づくり」で、人手が足りない農作業を手伝うとともに、写真を中心に交流サイトで農家の米をPRするというもの。2つ目は、農業に関心のある高校生・大学生が「ガチの農作業」に携わる。SNSで農家とのマッチングを行い、作業の合間での交流を通じて仲良くなったり、農業の知識を得たりするものです。



プログラムの行程

① 開校式

本プログラムに関わるメンバーの顔合わせの場。学生だけでなく、受け入れ側の地域住民や専門家、ファシリテーターや行政職員など、さまざまな立場の方と、目的を共有するとともに、メンバー間の関係性を構築しました。



② フィールドワーク

2つのテーマ、それぞれがそれぞれの地域、課題に向き合って、フィールドワークを行いました。短い期間のなかで、各チーム共に地域の現状や課題を知ろうとする姿勢や、何か貢献したい、という思いを持ってフィールドワークに取り組む姿が印象的でした。フィールドワークは計4回をベースとして、その他の日もメンバーが集まり、成果発表に向けた準備を進めました。



③ 成果発表会

活動を通して得られたアウトプットや成果を関係者の前で発表しました（10/4）。発表会では、発表だけでなく、学生や学生を受け入れた地域住民、またそれをサポートしたファシリテーターや行政関係者、それぞれの視点からみた感想や気づきを共有しました。地域の方々からも、写真や発信で地域の魅力を可視化すること、継続的な仕組みづくりの重要性について貴重なフィードバックをいただきました。地域に宿る魅力を伝え続けるために、学生と地域が一体となった「ため池アクション」の火を絶やさぬよう、これからも関わっていきます!引き続き、私たちの活動にご注目ください。



来年度に向けて

「ため池アクション」は、地域で活動していくにあたっての「入り口」として位置づけています。そのため、実施期間が終わった後も、継続して地域に訪れ、活動をおこなう、そういった関係性を構築できればという思いを持って企画・実施してきました。

その結果、昨年度に引き続き半数以上の学生が継続的に地域に関わっており、学生団体を立ち上げた事例も見られます。それらの活動を継続的に支援するとともに、来年度も「ため池アクション」を実施し、地域と学生の新たな出会いの場を創出していければと考えています。

4 情報の発信

地域連携プロジェクトの成果や活動状況を、シンポジウムやフォーラム、SNS、メディアへの掲載などを通して、広く発信しました。

HP の更新

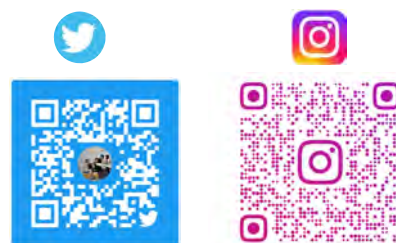
新規プロジェクトや学生の声などを新しく掲載するなど、HP の情報を更新しました。「学生の声」では、1 回生が、地域連携活動に参加する先輩学生と地域プレイヤーに対してインタビューを実施・記事化に取り組みました。



エコ・ヒューマン地域連携センター HP

SNS の活用

各種 SNS を活用し、EHC に関する情報や大学での地域貢献活動に関する発信をおこなっています。学生団体による投稿をシェアするなどして、広報活動のサポートもおこないました。



環境人間学フォーラムでの発表

2025.12.4@ 環境人間学部

環境人間学部が開催する研究・実践活動に関するフォーラムにて、EHCの地域連携プロジェクトが、ポスター・口頭発表をおこないました。具体的には、以下のプロジェクトの発表がなされました。また、「畑っこ」がポスター賞を受賞することができました。

① EHC 教員プロジェクト部門

- 学生国際協力団体 CHISE (乾)
- 学生島活プロジェクト (太田)
- 草刈りエクササイズ (森・柴崎)

② EHC 学生プロジェクト部門

- conneko- コネコ - (保坂)
- Change (三宅)
- DEN (坂本)
- + art プロジェクト (柴崎)
- 山採りみらいグループ (柴崎)
- Jyoto's (乾)
- 畑っこ (坂本、柴崎)
- 広尾東ファンクラブ (柴崎)

* () 内は顧問ないし担当教員を意味します。



ポスター賞を受賞した畑っこのポスター
(次ページ詳細)



当日の様子

メディア掲載実績

掲載実績
(主要なもの)

7件

主要メディアの掲載実績としては、7件あります。本年度に初めて開催した「特別フィールドワーク」に関連する記事が多く掲載されました。

| 日付 | メディア | 内容 | 関連するプロジェクト等 | 備考 |
|------------|-----------|--|-----------------------|---|
| 2025.4.18 | 神戸新聞 | ため池中心に農村の課題解決へ5～10月加古川と稲美で活動、学生募集 | ため池アクション | https://www.kobe-np.co.jp/news/paper/regional/202504/0018882348.shtml |
| 2025.7.15 | 神戸新聞 | 農村活性化へ学生奮闘 課題解決目指し住民と交流 | ため池アクション 広尾東ファンクラブ | https://www.kobe-np.co.jp/news/touban/202507/0019228110.shtml |
| 2025.10.9 | 神戸新聞 NEXT | コスモスの季節到来 | ため池アクション + art プロジェクト | https://www.kobe-np.co.jp/news/odekake-plus/news/detail.shtml?url=news/odekake-plus/news/pickup/202510/19566551 |
| 2025.10.17 | 神戸新聞 | ため池を中心とした農村課題の解決へ学生が住民と交流し 解決策稲美の2地区で | ため池アクション | https://www.kobe-np.co.jp/news/touban/202510/0019597861.shtml |
| 2025.11.21 | 神戸新聞 | 雑草管理の大切さ伝えるフェスチームで連携草刈りレース | ため池みらいプロジェクト | https://www.kobe-np.co.jp/news/touban/202511/0019720656.shtml |
| 2026.1.13 | 神戸新聞 | 濃厚で豊かな香り特徴 100% 地元産菜種油完成 | ため池みらいプロジェクト | https://www.kobe-np.co.jp/news/touban/202601/0019905651.shtml |
| 2026.2.26 | 神戸新聞 | 「ため池みらい研究所」設立5年、次世代が地域に戻りたくなる農業とは 住民が学生と模索 | ため池みらいプロジェクト | https://www.kobe-np.co.jp/news/touban/202602/0020062039.shtml |

ため池を中心とした農村課題の解決へ

学生、住民交流し解決策

ため池を中心とした農村地域の課題に学生が住民らと取り組む「ため池アクション」の発表会が、J.A.兵庫南神野支店（加古川市神野町神野）であった。ため池みらい研究所（同）が2023年から主催。今年は、県立大や神戸大の学生12人がチームを作って二つの農村に入り、住民らと交流する中でそれぞれの課題や解決策を探った。加古川市志方町の広尾東地区では夏祭りのプロデュース、稲美町の草谷地区では農家と学生をつなぐ「お米クラブ」をPRした。

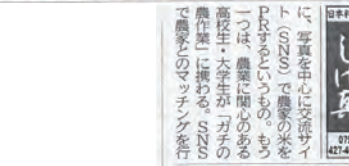
加古川・広尾東、稲美・草谷

夏祭り、米栽培で活性化

広尾東の人口は380人で、高齢化率は38%。夏祭りに参加する人は、夏祭り実行会には約12人が参加し、本郷では約30人が踊った。雨のため公民館内での開催となったが、予想以上に盛り上がり、参加者アンケートでは、85%を超える人が、今後も夏祭りが開催されることを望んだ。草谷地区には、2チームの「お米クラブ」をPRした。



①大東大会で発表会を行った。学生らの活動の様子も盛り込まれた。加古川市志方町神野町神野にあるため池みらい研究所（同）が主催する「ため池アクション」の発表会が、J.A.兵庫南神野支店（同）で開かれた。左から、ため池みらい研究所の代表、学生ら、発表者。



②稲美町草谷地区で、学生らと住民らと交流する中で課題や解決策を探った。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

稲刈りまで関わり、それ以外の「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。一つは大学生を対象にした「お米クラブ」をPRした。

2025.4.18 神戸新聞

2025年(令和7年)4月18日 金曜日

昨年の「コスモまつり」を手伝い、住民と交流する学生ら＝加古川市志方町広尾

ため池中心に農村の課題解決へ



5～10月 加古川と稲美で活動、学生募集
夏祭りプロデュースや米作り

ため池を中心とした農村の課題に学生が住民らとともに取り組む「ため池アクション」について、ため池みらい研究所（加古川市神野町神野）が2025年度参加者を募集している。23年度から続く取り組みで、今回は加古川市と稲美町の3地区で活動予定している。

東播磨民局が神戸大や県立大、京と連携し、ため池利用研究の拠点「東播磨フィールドステーション」を18日に設置した。活動の幅を広げようと11年、農業関係者や研究者らと共同して、

「お米の山石」を手伝い、住民と交流した。23年度は同地区で栽培されている稲花を広く知ってほしいと、地元産稲米油のマイネース「稲米油」をクラウドファンディングで商品化。24年度は、学生らがもつ地区に入るきっかけにと「公民館泊」を実現した。

このほか、下草谷では、ため池や水路に関する現状を把握し、将来的な発展を道筋を提案。志方西では、地域の魅力をアピールするマップの作成やウォーキングイベントを開催するなど、25年度は広尾東と下草谷での活動とした。広尾東では、学生らの協力もあって昨年、夏祭りが復活した。さらに盛り上げようと一地域の夏祭りをプロデュースしようと題して、学生らが住民とともに取り組む。下草谷では米作り挑戦。繁忙期に親戚が米作りを手伝う見返りに米を分けてもらう慣習を、学生が担えないかを探る。

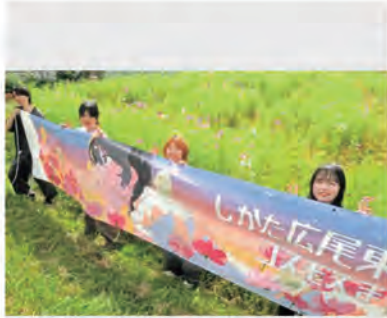
募集するのは大学生9人。5月17日に開校式があり、フィールドワークなどを重ねる。7月26日に活動の進捗よくについての中間発表。10月4日に最終発表がある。22日午後6時と25日午後0時半にオンラインで30分程度の説明会がある。詳しくは「ため池アクション」の公式ウェブサイトで。

（増井哲夫）

TOP > おでかけトピック > トピック情報

TOPICS コスモスの季節到来 中旬に見頃、各所で催し 加古川や稲美などの畑

更新日：2025年10月09日



しかた広尾東コスモスマつりを盛り上げようと横断幕を制作した県立大「+artプロジェクト」のメンバー＝加古川市志方町広尾



写真

秋の風情を感じさせるコスモスが東播各地で咲き始めた。例年10月中旬ごろには、各地でピンクや赤、白などの花が広がる光景が見られる。加古川市や稲美町などでは「コスモスマつり」と銘打った五つのイベントが開かれる。これらを含めた6カ所を巡る企画「収穫体験スタンプラリー」も催される。

同企画は東播磨交流体験農業連絡会（事務局・加古川農業改良普及センター）が主催。コスモスマつりは加古川市志方町の広尾東地区、同市西神吉町の2カ所、稲美町の2カ所である。

うち広尾東地区では7月に休耕田約2・5ヘクタールに種をまき、10月上旬から徐々に開花している。同地区のコスモスマつりには昨年、県立大の「+art（プラスアート）プロジェクト」のメンバーが協力。今年は学生が縦1メートル、横5メートルの横断幕2枚を制作した。志方東営農



2025.10.9 神戸新聞 NEXT

2025.11.21 神戸新聞

戸 業 新 聞 (第3種郵便物認可)

加古川 高齢化が進む農村で課題になっている草刈りの大切さを知らせようと、「草刈りフェス」が16日、加古川市志方町原で開かれた。リレー形式の草刈りレース「草刈りチャンピオンシップ」では、県内外の経験者・初心者混成の4チームが熱戦を繰り広げ、地域住民からも拍手や歓声が上がった。(増井哲夫)

雑草処理の大切さ伝える「フェス」

チームで連携 草刈りレース

草刈り集団「播磨畦師」や地域住民らの実行委員会が主催し、3回目。レースはコスモス畑に整えられた幅約3メートル、長さ40メートル程度のコースで行われた。笛が鳴ると、祖父の草刈りをよく見たり、1本目はAチームが15秒でトップ、2本目は丹波篠山市で「丹波畦師」として取り組むメンバーらのDチームが17分48秒で1位に。審査の結果、Dチームが優勝した。代表の吉良佳晃さん(41)は「地域の人も一緒に楽しんでもらえたのが何より」と汗を拭いた。

雑草処理は努力がかかるため、農地荒廃の一因になっている。「播磨畦師」は東播磨を中心に有志が2021年に結成し、10〜70代の約40人が登録。農地所有者やため池管理者の依頼を受けて活動している。

リレー形式の草刈りレースに挑戦した参加者＝加古川市志方町原

草刈り集団「播磨畦師」や地域住民らの実行委員会が主催し、3回目。レースはコスモス畑に整えられた幅約3メートル、長さ40メートル程度のコースで行われた。笛が鳴ると、祖父の草刈りをよく見たり、1本目はAチームが15秒でトップ、2本目は丹波篠山市で「丹波畦師」として取り組むメンバーらのDチームが17分48秒で1位に。審査の結果、Dチームが優勝した。代表の吉良佳晃さん(41)は「地域の人も一緒に楽しんでもらえたのが何より」と汗を拭いた。

雑草処理は努力がかかるため、農地荒廃の一因になっている。「播磨畦師」は東播磨を中心に有志が2021年に結成し、10〜70代の約40人が登録。農地所有者やため池管理者の依頼を受けて活動している。

県立大1年の後藤大生さん(18)は福崎町はAチーム2番手で参加。1番手の経験者がぐんぐん進み、あつという間に半分以上を刈った。「始める前は不安だったけど心強くなった」と後藤さん。その刈り跡をきれいに整えるチームプレーを見せた。

1本目はAチームが15秒でトップ、2本目は丹波篠山市で「丹波畦師」として取り組むメンバーらのDチームが17分48秒で1位に。審査の結果、Dチームが優勝した。代表の吉良佳晃さん(41)は「地域の人も一緒に楽しんでもらえたのが何より」と汗を拭いた。

雑草処理は努力がかかるため、農地荒廃の一因になっている。「播磨畦師」は東播磨を中心に有志が2021年に結成し、10〜70代の約40人が登録。農地所有者やため池管理者の依頼を受けて活動している。





03 地域連携プロジェクト - 教員プロジェクト -

1. 東部六地区活性化ラボ Go EAST ! (杉山武志) ……22
2. 学生国際協力団体 CHISE (乾美紀) ……………24
3. 播磨プランニングラボ (太田尚孝) ……………26
4. 学生島活プロジェクト (太田尚孝) ……………28
5. ため池みらいプロジェクト (柴崎浩平) ……………30
6. 草刈りエクササイズ (森寿仁、柴崎浩平) ……………32
7. こどもみどりプロジェクト (柴崎浩平) ……………34

東部六地区活性化ラボ Go EAST !

杉山 武志・Go EAST !メンバー一同

キーワード：地域コミュニティ，コミュニティ経済，大学間連携，丹波篠山市東部 6 地区

1. Go EAST ! の経緯と概要

「東部六地区活性化ラボ Go EAST !」は、本学の EHC プロジェクトとしてはくもべラボの後継プロジェクトにあたる。丹波篠山市東部 6 地区（日置、後川、雲部、福住、村雲、大芋各地区）の関係者と連携し、丹波篠山市内の中でも人口減少が進む 6 つの地区の地域課題解決に寄与する活動を目的としている。新規プロジェクトとして参加メンバーを募集したこともあり、初年度の参加学生は全員が学部 1 回生（計 21 名）で構成された。

東部 6 地区では、人口減少のもと、地元アクターたちは、地区単位で地域課題解決に臨むだけでなく、旧町時代のおよしみである 6 地区のゆるやかなつながりで地域コミュニティを再構築し、地区間連携の発想で 2022 年 4 月に受けた一部過疎指定からの卒業を目指している。

一方、地域側が地区間連携でスクラムを組んだことに対して、東部 6 地区の地域づくりに携わる兵庫県内の大学は幾つかあったものの、相互に交流する機会は少なかった。そうしたなか「Go EAST ! (篠山の東へ行け!）」という共通の合言葉のもと、関西国際大学、関西学院大学、神戸学院大学、武庫川女子大学、そして兵庫県立大学の 5 大学（研究室あるいは地域連携センター等）が、丹波篠山市東部六地区協議会、（地元の若手で起業した）東風吹かば、丹波篠山市役所など東部 6 地区の諸アクターと実践活動を試みてきた。活動にあたっては、大学間連携も視野に入った総務省「ふるさとミライカレッジ」に丹波篠山市を申請主体として、東部六地区協議会、東風吹かば、上述 5 大学が連携して応募、2025 年 5 月に一次募集で採択を受けた事業も活用された。

各大学がそれぞれ特徴を活かした活動を展開しているが、兵庫県立大学からは、①伝統的祭礼の保全と継承、②連携拠点づくり（居場所づくり班）、③東部 6 地区に関する取材と情報発信（情報発信プロジェクト班）、④マルシェ運営・新商品開発班という 4 つのプロジェクトに携わった。

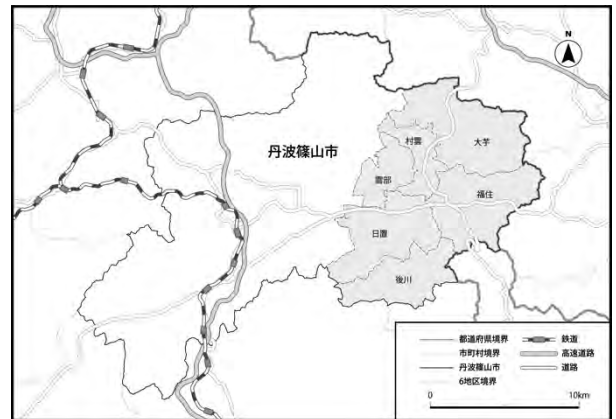


図 1 丹波篠山市東部 6 地区の位置

資料：杉山（2022）より

2. 各プロジェクトの成果

さて、具体的に各プロジェクトの成果を紹介してみることにしよう。

はじめに、チームビルディングと他大学との交流促進を目的に、2025 年 6 月 29 日に丹波篠山市東部 6 地区の主要箇所を訪問して現地の状況を把握したのち、2025 年 8 月 2 日～3 日の 2 日間にわたって、日置地区にある波々伯部神社の祭礼に合宿形式で参加した。祭礼への参加を通じて、東部 6 地区の歴史・文化を学ぶとともに、参加メンバー相互の距離感を縮めることができたように捉えている。



写真 1 祭礼当日の様子

資料：杉山撮影

祭礼後、各個別プロジェクトが本格的に動き出した。まず、居場所づくりに関しては、すでに地元や学生たちの拠点になっている日置地区「中立舎」に加えて、6地区の結節点に位置する細工所「ハートピアセンター（A コープ跡地）」の利活用に挑もうとしている。利活用にあたって学生たちは「心休まる場所を創る」試みを行おうとしている。

そのハートピアセンターにおいて、2025年12月7日にクリスマスマーケットをコンセプトとした「第3回さとやマルシェ」が開催された。本学のGo EAST!メンバーは、ほぼ全員が参加して、さとやマルシェの広報活動および運営に携わった。

さとやマルシェでは、旧福住小学校 SHUKUBA の食品加工所で販売されている既存の商品を学生たちがアレンジレシピを考案した「山鹿のオイル煮」、地元名産の黒豆を使用した「農家のおすそわけスープ」が披露された。披露にあたっては東風吹かばの指導を受けながら、事前に都市部の人々へのマーケティング活動も経験した。2025年11月28日～29日にかけて品川で開催された「カルチャースナック」への参加は、「さとやマルシェ」でのお披露目に向けて弾みをつける機会となった。

情報発信プロジェクトについては、東部6地区の魅力を大学生の視点から発信する活動が行われた。現地での取材を通じて撮影した写真や動画をメンバーそれぞれが編集し、リール動画として公式Instagramから発信している。今後の活動としては、あえて手書きの文字やイラストを用いて学生の視点で取りまとめる冊子を作成する構想もある。手作り感のある情報発信は、くもべラボにおいて培った発想と似通っており、筆者（杉山）としては馴染みやすく親近感を覚える。



写真2 ハートピアセンター「A コープ跡」

資料：杉山撮影



写真3 「さとやマルシェ」で本学 Go EAST!メンバーの学生たちが作成したプロジェクト紹介の掲示資料：杉山撮影。なお、本稿「2」の文章は、当該写真に映っている学生たちの説明文も参照してある。

3. 次年度に向けて

連携先の皆さんから聞いた限り、参加学生の頑張りもあり、初年度の取り組みは成功裡に終わることができたように思われる。本プロジェクトにおいて本学としては、地域コミュニティを育むこととコミュニティ経済循環の生成を想定して活動を進めているのだが、手前味噌ながら一定程度の成果を得られたものと自負している。

ただ、Go EAST!の試みは、ここから先が肝要になるとも理解している。すなわち、各プロジェクトの継続性である。昨今「関係人口」論が何かともてはやされているが、一時的な関わりでは、持続可能な地域づくりには限界が生じてくるし、「地域コミュニティを育む主役は誰なのか」、地元の皆さんと改めて検討しておくことも求められる。

最後に、もう一つ課題を挙げておくならば、実感として、参加する各大学の意識に温度差があった。各大学により地域づくりや地域連携への向き合い方が異なるのは致し方ないことだが、せつかく5つの大学がそれぞれの特色を活かしながらスクラムを組もうとしたわけだから、一度くらい5大学が一堂に会する機会があればよかったと感じている（本稿を執筆している2026年2月時点で2026年3月に報告会が予定されているが、残念ながら5つの大学の教員が揃うことはないまま終わることが見込まれている）。次年度は大学間連携について、もう少し深く掘り下げることのできる一年にしたいところである。

学生国際協力団体 CHISE

大橋茜（3 回生）、野村彩（3 回生）、根上凜（1 回生）

キーワード：ラオス、国際協力、教育支援

1. 団体概要

学生国際協力団体 CHISE（チーズ）は、『「はいチーズ」の一言で世界に広がれピースの輪！』をコンセプトに、ラオスの子どもたちの教育環境改善を目的として 2009 年に設立された。現在のメンバーは 22 名で、環境人間学部以外にも国際商経学部、看護学部、工学部、理学部、また、関西学院大学や神戸市外国語大学の学生で構成されている。

CHISE は、ラオスの山岳地帯に位置するルアンパバーン県の郊外にある農村地域を拠点としている。これまでに 5 つの校舎建設と、幼稚園児を対象としたラオス語教室を開いてもらうプロジェクトを行った。現在は、今年度支援を開始した H 村の状況改善に向けて活動している。洪水被害に伴い傷んでしまった椅子や机などの学校備品を新たに寄付するために、クラウドファンディングを実施し、目標額の資金調達に成功した。また、ラオスでの支援に加えて、国内での活動にも力を入れているため、以下にその取り組みについて報告する。

2. 具体的な活動内容

2.1 支援先の選定

昨年度から CHISE は、新たな支援先や支援内容を検討していた。2025 年 3 月に現地訪問をした際には、新たな支援先の候補として、洪水の被害を受けているポンサイ郡の H 村を訪れ、洪水被害の実態や教育環境の現状について詳細な調査を行った。

その結果、H 村は毎年雨季である 9 月から 10 月にかけて校舎裏の川が氾濫し、洪水の被害を受けていること、被害が大きい年には、校舎が天井まで浸水し、教材や机・椅子・黒板・本棚などの備品が損傷していることが分かった。洪水時には村人所有の小屋を臨時の教室として使用しているものの、設備が整っておらず、学習環境としては不十分であった。このような状況が続くと、都市との格差だけではなく、農村間の格差も引きおこしてしまう。そのため、

継続的な教材支援や教育環境の改善に向けた支援が必要であると考えた。



写真1 H 村で学校の調査を行う様子

2.1 クラウドファンディングの実施

H 村での調査結果を受けて、洪水被害への対策として、高床式校舎の建設に向けた資金調達を検討した。しかし、現地コーディネーターによる見積もりの結果、想定を大幅に上回る費用が必要であること、また、H 村が将来的に廃校となる可能性があることが判明し、校舎建設は現実的ではないと判断した。これを踏まえ、廃校となった場合でも移動させることができる備品を対象とした物資支援を行う方針を決定した。従来の資金調達手段のみでは必要な資金を賄うことが困難であると判断し、他の手段としてクラウドファンディングを実施した。

クラウドファンディングは 2025 年 8 月 22 日から 9 月 30 日までの期間で行い、机・椅子・黒板・本棚などの学習備品の購入や、被害を受けた教室の修繕費用を主な支援内容として設定した。

資金調達にあたっては、SNS を中心に情報発信を行い、洪水被害によって教室が使用できなくなっている現状を、写真と文章で共有した。被害の中でも学習を続けようとする子どもたちの姿を伝えることで、支援の必要性がより具体的に伝わるよう工夫した。

その結果、クラウドファンディングでは目標金額である 40 万円を達成することができた。現在、集まった支援金を学習備品の購入に充てる準備が進

められており、今後このような整備が行われることで、子どもたちが安心して学習できる環境が整えられる見込みである。



写真2 クラウドファンディングの実施・達成

2.3 その他の支援・活動

2025年度に行ったその他の活動として、以下の3点を挙げたい。

1点目は、神戸三宮センター街で開催されたRE:CYCLE KOBE CITY FESでの物品販売である。この活動では、ラオスの小物や雑貨の販売に加え、写真の展示を通じて現地の状況を伝えたほか、募金活動およびクラウドファンディングの周知を行った。SDGsに取り組むさまざまな団体が集まり、たくさんの方が行き交う場所でのイベントに参加したことで、より多くの人々が、ラオスが抱える問題について知り、考えるきっかけを提供することができた。

2点目は、神戸市青少年会館主催のユースフェスへの参加である。この活動では、小中学生やその保護者を対象にラオスに関するクイズを実施し、参加者には景品としてお菓子を配布した。クイズ形式にすることで子どもたちが楽しみながらラオスについて学べる場を提供すると同時に、保護者の方々にも私たちの普段の活動内容や、ラオスにおける教育状況について知ってもらう機会となった。

3点目は、現地での支援に活用するための募金活動である。神戸の街頭での募金活動に加えて、学園祭でも募金活動を行った。学園祭では、ラオスの現状や私たちの活動について紹介しながら募金を呼びかけ、多くの人に関心を持ってもらうことができた。ここで集まった資金は、ラオスの子どもたちの

文房具購入や教育環境の整備など、教育支援を目的として活用する予定である。



写真3 地域の子どもたちと交流する様子

3. 地域との繋がり

2025年度も2024年度と同様、兵庫県立丹波篠山産業高等学校と交流し、高校生たちが教育支援について考えるきっかけ作りを行うことができた。その結果、篠山産業高校の学生たちが、文房具などの寄付物を集めてくれたり、私たちが週末に神戸で行っている街頭募金やミーティングにも一緒に参加してくれたりした。その他にも、2025年9月には姫路市立置塩中学校で講演会と交流会を行った。それにより、中学生がラオスについて自主的に調べるきっかけや、ラオスにおける教育の現状について考える機会を提供することができた。

4. 今後の展望

現在は、次回の現地訪問に向けて、新たな支援先の候補となる村の訪問準備を進めている。実際に現地を訪問し、村人や教員に直接インタビューすることでしか得られない情報、要望の調査を行う予定である。また、過去にCHISEが支援してきた村も訪問し、篠山産業高校などから寄付していただいた物資を直接村の子どもたちに渡す予定である。2026年度からも、村の自立を目標とした支援内容を考えていきたい。

さらに、中学校や高校への講演会や、募金活動、写真展、地域でのイベントへの出店など、私たちの活動内容を多くの人に知ってもらう活動を継続的に行い、ラオスの教育の現状を伝えていく予定である。また、そういった活動を通して、地域の学生が自発的に行動するきっかけ作りも行っていきたい。

播磨プランニングラボ

都市計画研究室(太田ゼミ)

キーワード：都市計画，計画演習，高砂市，将来都市構造図，包括連携協定

1. プロジェクトの概要

都市計画研究室(太田ゼミ)では3, 4年生協働で「播磨プランニングラボ(高砂PJ)」に取り組んでいる。当プロジェクトは兵庫県立大学と高砂市との包括連携協定(H29年)の1事業として、高砂市都市政策課の協力の下、高砂市の地域課題解決に向けた具体的な計画提案を学生主体で行うものである。

2025年度は「高砂市の特性を踏まえた将来都市構造図の作成と先導的プロジェクトの検討」をテーマとした。まず基礎調査として既往研究およびヒアリング調査を前提として、兵庫県内の自治体が策定している将来都市構造図を評価した。その上で、設定したテーマに基づき将来都市構造図を作成するとともに、その実現に向けた先導的プロジェクトを検討した。最終的には高砂市長も出席する形で高砂市役所職員の前で発表・提案を行った。活動期間は2025年5月から2026年1月である。

2. プロジェクトの進め方

2025年度のプロジェクトでは、参加した学生8名をA班(となりのタカサゴ)、B班(たかさGOースト)の2班に分け、班ごとに将来都市構造図・プロジェクトを作成した。作成にあたっては、都市計画研究室の学生として、行政・事業者・住民といった多様なステークホルダーの立場を意識しながら住みたい街の将来像を検討し、上位計画との整合性を確認した上で、現実的かつ具体的な提案としてまとめた。

本プロジェクトでは、まちあるきや基礎調査で地域の特性を把握した後、将来像のコンセプトを決定し、20年後の高砂市の生活を想定して将来都市構造図を作成した。図の構成要素である拠点・軸・面の3つの要素を整理し、市民・行政・民間事業者が方向性を共有し、計画や施策を総合的・継続的に進めるための戦略的かつ対話的なツールとして位置づけた。最後に、作成した将来都市構造図を踏まえ、その実現に向けた先導的プロジェクトを提案した。

3. 対象地における現状分析と20年後の将来予想

プロジェクトでは、文献調査と複数回のまちあるきを通じて高砂市の現状分析と将来予想を行った。文献調査では、高砂市の位置づけやまちづくり方針を確認するとともに、GISを用いて人口分布、土地利用、交通網を分析・可視化することで現状の都市構造を把握した。

将来都市構造を検討するにあたり、都市空間を駅まち/住居系/工業系/田園系の4タイプに分類し、空間ごとに現状の役割と将来の方向性を整理した。加えて、現状の取組が強化されなかった場合の将来像をシナリオプランニングで想定することで、現実的な都市構造の方向性を検討し、将来都市構造図が果たすべき役割および重点施策を明確化した。

分析の結果、高砂市の主要資源は「人」と「地域資源」であり、新たな資源の創出よりも既存資源の有効活用が重要であると考えた。これを踏まえ、高砂市の今後あるべき姿として、「人と地域資源を結び、にぎわいと安心が広がる持続可能なまち」を設定した。

4. 将来都市構造図の作成

高砂市の今後あるべき姿を踏まえ、班ごとにまちづくりのコンセプトを設定し、将来都市構造図を作成した。

A班では、「高砂の良好な交通利便性と、溢れ出す人のあたたかさで若者を呼び込むまち」をコンセプトとした。将来都市構造図の作成にあたっては、高砂市の掲げる「プライダル都市」や、幹線道路沿いや駅周辺に都市機能が集積し、生活利便性が確保されている点を考慮した。

現存する将来都市構造図を評価したうえで、拠点・軸・面の追加および削減を行い、図を作成した(図1)。特徴として、「プライダル都市」から着想を得た軸「円むすびん」を設定し、市内各駅を結ぶことで人・もの・場所をつなぎ、市全体の関係性の強化を図っている点が挙げられる。

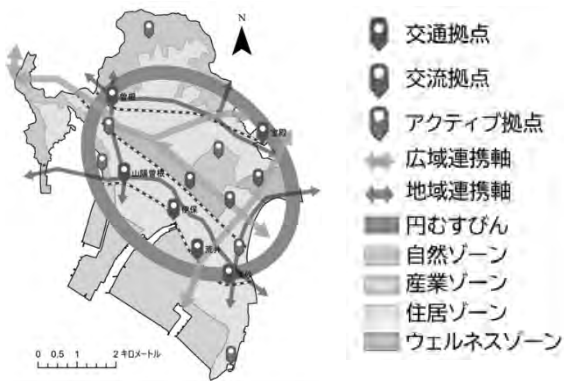


図1 将来都市構造図 (A班)

B班では「つながる・にぎわう・やすらぐまち」をコンセプトとした。その上で高砂市内でのデジタル活用やコミュニティをよくする活動の推進、質の高い緑に着目し、DX・コミュニティ・自然環境をキーワードとして捉え、将来都市構造図を作成した。(図2) このうちDXへの対応を担う拠点として「情報共創拠点」を設定している点が特徴である。情報共創拠点では、デジタル技術の活用を通じて、市民の生活利便性の向上を図るとともに、地域課題の解決を支援することを目的としている。



図2 将来都市構造図 (B班)

5. 先導的プロジェクトの提案

各班の将来都市構造図を踏まえ、これを先導するプロジェクトを検討した。

A班が提案するのは「えんむすび都市」構想である。従来の「縁結び＝結婚」という解釈に限定せず、人・もの・場所などのつながりを広義の縁と捉え、縁結びを促進するまちづくりを提案する。

具体的には、高砂市の交通利便性や人・モノの集積、地域住民の生活基盤としての機能を踏まえ、市内全6駅を拠点とし、人と自然・歴史・情報などを掛け合わせたテーマを設定する。各駅では、緑化や

定期市の開催、交流の場の形成を通じて回遊性と滞在性の向上を図る。これにより、世代を超えた交流や地域の歴史・文化との出会いが広がり、結婚に限らない多様なつながりを育む「えんむすび都市」としての価値あるまちづくりの実現を目指す。

B班が提案するのは「たかさごナビ」の若者への利用促進である。高砂市では、生活に役立つ情報を提供するアプリとして「たかさごナビ」が運用されているが、利用者は30～40代中心であり、若年層の利用は低い。

そこで「たかさごナビ」を核として各拠点を連動させ、意見箱やアンケート機能を通じて市民の意見を活動に反映する循環型の仕組みを提案する。運営には市・高校生、大学生が役割分担して関与し、市は制度設計と実現支援を担い、高校生・大学生は運営補助や情報発信を通じて参画する。この仕組みにより、行政と市民の継続的な関係構築と、双方のまちづくりの推進が期待される。

6. プロジェクトの成果と課題

本プロジェクトでは、週1回の全体会議による学生間の認識共有に加え、月1回の高砂市都市政策課への進捗報告を通じて行政職員から助言を得ながら検討を進めることで、実際の都市政策に近い形で計画立案を行うことができた。また、まちあるきや文献調査により現状を把握したうえで将来予測を行い、将来都市構造図を作成するとともに、先導的プロジェクトの検討を通じて実行段階を見据えた提案としてまとめることができた。

一方で、先導的プロジェクトの運営方法や持続可能性の確保、ならびに現在の施策が長期的にどのような都市像につながるかについて、十分に具体化できなかった点が課題として挙げられる。今後は、行政や住民など多様な主体からの受容性を踏まえ、事業の継続性や運営体制まで含めた検討を行う必要がある。

謝辞

本プロジェクトの実施にあたって、高砂市都市政策課の皆様には大変有益なご助言を頂戴しました。心より感謝申し上げます。また、最終発表会に際しましては、都倉市長をはじめ、多くの職員の皆様にご参加いただき、貴重なご意見やご感想を賜りました。ここに記して深く御礼申し上げます。

(文責：都市計画研究室3年生 樽角咲希)

学生島活プロジェクト

東育美，中村環，檜崎樹佳，福富日奈歩（安枝ゼミ），伊澤友美（太田ゼミ），
床鍋明日香，垣本彩織，矢内葵（木村敏文ゼミ），濱田育生（荘所ゼミ），
兵佐勇哉（山瀬ゼミ），松田晃（宇高ゼミ），山本直明（大橋ゼミ），太田尚孝

キーワード：空き家，改修，DIY，家島

1. プロジェクト概要

1.1 プロジェクトについて

本プロジェクトは2025年度特別FW「空き家再生実践演習」（1単位）の一環としておこなった。

本特別FWは，3年生以上の学生であれば，系やゼミに関係なく履修することができる。授業の目的は，空き家が社会問題化している家島をフィールドに，空き家改修の実体験を通して，空き家の再生の実情を知るとともに，必要な技術や知識を実践的に学ぶことである。今年度は，過去最多の12名が活動に参加した。

1.2 家島とは

家島は，瀬戸内海東部の播磨湾に浮かぶ44の島からなる諸島である。そのうち家島本島，男鹿(たなが)島，坊勢(ぼうぜ)島，西島の4つの島が友人島であり，人口は合わせて4500人ほど，このうち約2200人が家島本島に住んでいる。(いえしまコンシェルジュHP¹⁾より)

1.3 いえしまコンシェルジュとは

いえしまコンシェルジュは家島の暮らしと観光客をつなぐ案内人である。家島の総合的な観光コーディネーターを養成し，地域の空き家をゲストハウスとして活用している。

2. 活動内容・成果

2.1 家島での活動内容

家島では計4日間活動し，一度，事前のオンラインミーティングを行った。

まずは，2025年7月25日にオンラインミーティングを行った。自己紹介，大まかな活動の内容などの情報を共有し，不安点解消を行った。今年度はウッドデッキを作成し，地域に開かれた交流スペースとして利用することが決まった。



写真1 木材を切断する様子

9月3日は，事前作業準備として木材に防腐塗料を塗った。今回作成するウッドデッキは，建物の外部で利用され，普段は雨風にさらされるため，重要な作業の一つであった。

9月16日，9月17日は，自己紹介を兼ねた小ゲームから始まった。全員の名前を積み木のように重ねていっていくものであったが，見事に一発クリアすることができ，幸先のよいスタートであった。その後，チーム分けを行った。主に，寸法を測るチーム，木を切るチーム，塗料を塗るチームの三つに分かれた。まず作成したのは，束からであった。ウッドデッキの設置場所には勾配と，段差があり，束の長さによって水平をとらなければいけないことが難しかった。また，材木の量も限られていたことと，失敗してもどうにかできるように，長い寸法の材から作成した。また，束の底部には，ゴムの土台を貼り付け，束に固定した。次に作成したのが，梁である。木造住宅と同様に，大引き，根太と作っていく。また，一泊二日での泊りがけでの作業という事もあり，途中で，米を炊いたり，お皿を洗ったり，昼食の買い出しに行ったりと様々な役割があったが，うまく協力しあうことができた。そして，昼食には地元の魚さんで買った新鮮な魚の刺身をいただいた。新鮮な魚でとてもおいしかった。また，家島で作られて

いる塩をつける食べ方もおいしかった。コンサルジュの方はおいしい魚を食られるのが家島の魅力の一つとお話されていた。

そして、この日の作業は束を配置したところで、終わった。作業後は、男女に分かれて「晴れテラス」「ヨカテラス」という空き家をリノベーションした施設にて過ごした。内装はとてもきれいで、おしゃれなものであった。改修する前の構造体を活用しているということもあり、どこか時間がたっていることを感じさせるデザインでもあった。

二日目は、板材の作成をしながら、束の上に梁を乗せていった。梁は一つの材の長さが長い一発勝負の作業の連続であり、緊張感と、責任感を感じさせられる作業であった。図面通りには、なかなか作ることができず、その場その場で、話し合いながら、解決策を見つけていく事も面白かった。最後に板材を乗せた。敷地の形状に合わせるために、板材の端部を斜めにカットしないといけないところが非常に難しかったが、実際に合わせてみるとうまく木材と壁とがうまく合った。板材の10%程度をビス止めし、二日目の作業が終了した。

10月17日は、板材のビス止めを行い、ウッドデッキを完成させた。板材の微調整や貼り付けなど、細かい作業が続いたが、即席でスペーサーを作製し、等間隔で板を張るなど工夫した。



写真 2 ウッドデッキを組み立てる様子

2.2 フォーラム発表

これらの家島での活動について、12月4日に開催された環境人間学フォーラムにてポスター発表を行った(図1)。ポスター発表に加えて、活動についての質疑応答も行った。様々な方からの質問や意見などから、活動を伝えることと同時に活動への理解を深めることができた。



図 1 環境人間学フォーラムのポスター

3. 今後について

今回の空き家改修では、前年度に引き続き、改修後の空き家に学生が宿泊して現地調査などの拠点になることを目指した。そこで、お茶会を開くなど、地域住民も気軽に集まる交流をつくるため、道に面して縁側のようなウッドデッキを設置することにした。普段では体験できないことを体験しながら、空き家の実態や改修の大変さ、家島の魅力を知ることができた。

4. 謝辞

今回の授業を行うにあたり、多くの方々にご指導、ご協力いただきました。いえしまコンサルジュの中西さん、麻田さん、藤田さん、太田先生、木村敏文先生に心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

1)いえしまコンサルジュ HP:<https://ieshimacon.com>

ため池みらいプロジェクト

柴崎浩平（環境デザイン系）

キーワード：農村，ため池，草刈り，コミュニティビジネス，デザイン

1. はじめに

本プロジェクトでは、ため池のある暮らしのみらいを創造していくことを目的とし、水や緑に関する資源（ため池や里山，農業・農地，それらを管理する人材など）の管理・活用に向けた地域連携のあり方を探求している。連携先としては、著者が理事を務める「(一社)ため池みらい研究所」ならびに同研究所に関わるプレイヤーとなる^{注1)}。

本プロジェクトは、農山村で活動を展開していきたい学生にとってのプラットフォーム機能を持つ。また、具体のプロジェクトに強い意向を示す学生が複数いる場合は、プロジェクト推進能力を養うためにも組織化（学生団体化）を促している。

昨年度は、2つの学生団体化を促してきた。1つは、加古川市の広尾東集落にて、集落と学生を結ぶ活動をおこなう「広尾東ファンクラブ」、2つは後述する里山づくりに関連する「山採りプロジェクト」である。

本プロジェクトの活動内容として大きくは、「研究・実践活動」と「交流活動」をおこなっている。「研究・実践活動」としては、「草刈りグループの創造」がある。「交流活動」としては、フィールドに赴き、地域のイベントへの参加やフィールドワーク、学内の交流活動などがある。以下、順番に説明を加えていく。なお、2025年度のプロジェクトメンバーは3回生6名、2回生11名、1回生4名の計21名である。

2. 研究・実践活動

2.1 草刈りグループの創造

草刈りは、農村の資源を管理していくうえでの基礎的かつ必要不可欠な作業である。草刈りの実施主体は、畦やため池の堤体、共有地などの実施場所によって異なるが、集落コミュニティで実施されるケースが多い。しかし、少子高齢化や集落機能の低下にとともない、地域の草刈を継続して実施していくことが困難になっている。そこで、多様な立場の人々



写真1 播磨畦師の活動の様子



写真2 草刈りフェスの様子



写真3 草刈りフェスに関する記事（神戸新聞）

が参加する新しい草刈りグループが複数生まれやすい仕組みづくりをおこなっている。

これまでに、都市部の住民が有償で草刈りサービスを提供するグループ（名称：播磨畦師）の創造などに取り組んできた^{注2)}。今年度は、播磨畦師の活動に学生が参加し、草刈りをおこなった（写真1）。また、草刈りに関わる人材を発掘するために「草刈りフェス」というイベントの企画・実施支援もおこなった（2025.11.1@加古川市志方町原地区）（写真2）。本イベントは、播磨畦師や原地域づくり協議会のメンバー、学生らで構成される実行委員会が主催する形でおこない、新聞記事に掲載されるなど反響もみられた（写真3）

今後も、単に草を刈るだけでなく、草刈りを通して学びや気づきが得られる仕組みづくりを実施していく予定である。

2.1 つくる・伝える-地域デザインプロジェクト-

農産物の生産などに関連した商品のデザインに関する相談を受けることがある。連携先である「志方東営農組合（加古川市志方町）」から、「学生と共に菜種油のパッケージをデザインできないか」と相談を受けた。同組合では、景観維持のため菜種を生産しており2年前から本格的に栽培を開始してい



写真4 学生がパッケージをデザインした菜種油に関する新聞記事 (2026.1.13 神戸新聞)



写真5 菜種油の販売促進に向けて作成したチラシ

る。パッケージデザインに向け、学生有志を募り、プロジェクトチームを結成・作成支援をおこなった。参加した学生(3名)の動機は「これまでお世話になった広尾東に何かお返ししたい」や「就職先もデザイン系を検討しているのでチャレンジしたい」といった具合であった。作成にあたっては、営農組合へのヒアリングを重ね、菜種油の生産状況や販売方法、ターゲットとなる客層などの情報を整理した。そのうえで、類似商品のデザインや売れ行き情報などを整理し、イメージを擦り合わせた。

学生らは、製品に貼られたパッケージを見て、商品として販売されることにやりがいを感じていた。また、加古川市長への表敬訪問をおこない、加古川市の特産品として売り出されていく期待感も感じていた(写真4)。さらには、販売を促進していくにあたっては、PRを兼ねたチラシも作成した(写真5)。

3. 交流活動

大きくは、「ため池みらいフォーラム」の運営サポートおよび発表をおこなった(写真6)。本フォーラムは、ため池みらい研究所が主催するフォーラムであり、学生や研究員が本年度におこなった活動を



写真6 ため池みらいフォーラムの様子

報告する場となっている(兵庫県東播磨県民局加古川総合庁舎にて2月21日実施)。参加者は、ため池管理者・農業者の他、大学・教育関係者、行政職員、民間企業など180名ほどみられた。

運営にあたっては、当日の司会進行や参加者へのヒアリングをおこなった。また発表では、プレゼンおよびポスター発表をおこない、プロジェクト成果を共有した。

4. 今後の展望

地域から寄せられる相談のなかでも、「2.1 つくる・伝える-地域デザインプロジェクト-」で述べたようなデザインに関する相談は多くある。そこで、デザインに特化したプロジェクトを立ち上げたい。デザインは、依頼者が持つニーズやシーズを見える化する作業であり、WEB・HPやチラシ、商品パッケージ、パンフレット作成など、様々な媒体で求められる。活動を通じて構築してきた多様なデザイナーとのネットワークを活用し、実践的な学習機会を創出することで、学生のデザイン力を体系的に養成する。将来的には、学生が有償で地域や企業のデザイン支援に携わる仕組みを構築し、教育と社会貢献を両立するプロジェクトとして展開したい。そして、学生にとってコース選択やゼミ選択、さらには卒業論文のテーマ選定、キャリア選択において、有益な経験となるようにしたい。

注釈

- 注1) 「(一社)ため池みらい研究所」については、環境人間学部の情報サイト「かなび」を参照されたい。<https://shse-maga.com/study/913>
 注2) 「播磨畦師」については、2022年度のエコ・ヒューマン地域連携センター活動・研究報告集を参照されたい。

草刈リエクササイズ

森寿仁（人間形成系），久下潤（環境人間学研究科），柴崎浩平（環境デザイン系）

キーワード：農村，身体活動，疲労度，スポーツ

1. はじめに

草刈りは、農村の資源を管理していくうえでの基礎的かつ必要不可欠な作業である。草刈りの実施主体は、畦やため池の堤体、共有地などの実施場所によって異なるが、集落コミュニティで実施されるケースが多い。しかし、少子高齢化や集落機能の低下に伴い、地域の草刈りを継続して実施していくことが困難になっている。そこで、本プロジェクトは「草刈り」の新たな魅力および可能性を見出すことによる草刈り実施の付加価値の創出を目的に2023年度より開始した。今年度は実際の草刈り実施時の身体的負荷を予測最大心拍数に対する割合から評価し、昨年度の調査結果（調査①）に今年度の調査結果（調査②）を加え、さらなる検討を行った。

2. 調査方法

2.1 対象者

対象者は、日頃から草刈りを実施している高齢者14名であった。調査①は4名（年齢：68±2歳，身長：165±6cm，体重：63±4kg），調査②は10名（年齢：61±9歳，身長：170±6cm，体重：74±7kg）であった。測定に際して対象者から実施の承諾を得た上で実施した。

2.2 測定の概要

調査①：2025年2月16日，加古川市志方町広尾東地区において実施した草刈り時に測定を行った。草刈りは10時ごろから開始し，11時30分ごろには終了した。草刈り場所は2地点あり，1地点目は傾斜地を中心とした枯草の草刈りで約25分間，2地点目は裸木が合間にある傾斜地を中心とした枯草の草刈りを約35分間実施した。いずれの場所も刈り払い機を用いて草刈りを実施し，普段通りの草刈りを行ってもらうように特別な指示は行わなかった。

調査②：2026年1月18日，神戸市西区岩岡町12

号池周辺の草刈り作業において測定を行った。草刈りには地域の自治会員や手伝いを含め約40名が参加した。草刈りは8時ごろから開始し，9時45分ごろに終了した。その間，9時ごろから約15分間の休息を挟んだ。草刈りは刈り払い機を用いて実施し，普段通りの草刈りを行ってもらうように特別な指示は行わなかった。

2.3 測定方法・分析方法

対象者には草刈りを実施する前に心拍計（RC3 GPS，Polar社製）を装着させて測定を実施した。対象者の胸部に計測ベルトを装着し，1秒ごとに心拍数を記録し，60秒ごとの平均値で示した。各対象者の心肺への相対的な負荷（強度）を定量するため，年齢から推定される予測最大心拍数（ $206.9 - (0.67 \times \text{年齢})$ ）を用いて，その値に対する割合を示した（%HRmax）。

身体的負担度の評価として，アメリカスポーツ医学会（American College of Sports Medicine: ACSM）がガイドラインとして示している，予測最大心拍数に対する割合を用いた。すなわち，軽度（57～63%HRmax），中強度（64～76%HRmax），高強度（77～95%HRmax），最大強度（96%HRmax以上）に分類した。分析は各対象者の草刈り作業中（休息時間を除く）の平均値および作業中の各強度区分の時間割合を算出した。

3. 結果および考察

調査①の草刈り作業中の平均運動強度は83.0±13.3%HRmaxとなった。この強度はACSMのガイドラインにおける高強度の運動に分類される。したがって，運動習慣が少ない人にとっては心肺への負担度が高く，作業に身体的なリスクが伴う強度で実施している様子が窺える。調査②の草刈り作業中の平均運動強度は74.7±7.9%HRmaxとなった。この強度はACSMのガイドラインにおける中強度の運動に分類される。中強度の運動は，生活習慣病の改善などを目的とした有酸素性運動として適度な運

動強度であり、作業による身体的なリスクも少ない強度である。したがって、同じ高齢者の草刈りと言っても、調査によって強度が異なっていた。

図1は各調査の対象者における草刈り作業中の身体的負担度を区別の時間割合で示したものである。調査①では、高強度を超える最大強度の区分(96%HRmax以上)で作業をしている時間が全体の約25%を占めていた。加えて、高強度レベルの時間も約40%あり、草刈り作業中のおよそ2/3程度の時間で身体的な危険性が高い状態で作業を行っていたことがわかる。一方で、調査②では、最大強度レベルでの作業時間はほとんど見られず、半分以上の時間で中強度以下の適度な運動強度で作業を行っていた。ただし、調査②でも約40%の時間割合で身体的なリスクの危険性が高い高強度区分で作業を行っている現状には注意すべきである。

したがって、高齢者における草刈り中の身体的負担度は中～高強度で行われている時間が多い現状が明らかとなり、高強度での草刈り時間を減らすための休息方法や草刈りの方法について、今後は考えていく必要がある。

4. 今後の展望

本プロジェクトは、フィールドで測定を実施するため様々な限界点はあるものの、草刈りの身体的負担度を可視化することにより、安全な草刈り作業を実現するとともに、健康維持や運動(エクササイズ)としての利用可能性を模索する上で有益な知見が得られた。

本年度の活動では、草刈り作業が心肺に対して高い負荷を与え得ることが明らかとなり、草刈り活動が意図せずとも過剰な身体的負荷となっている時間が多い可能性が示された。今後は、身体的負荷が高くなりやすい高齢者の特徴を明らかにするとともに、活動量の定量やエネルギー消費量などの詳細な検討を行っていく予定である。そして、安全性を含めた草刈りがエクササイズとして機能しうるための条件整備やエクササイズ目的で草刈りに参画する人材の確保など、草刈りの新たな可能性について考究していきたい。

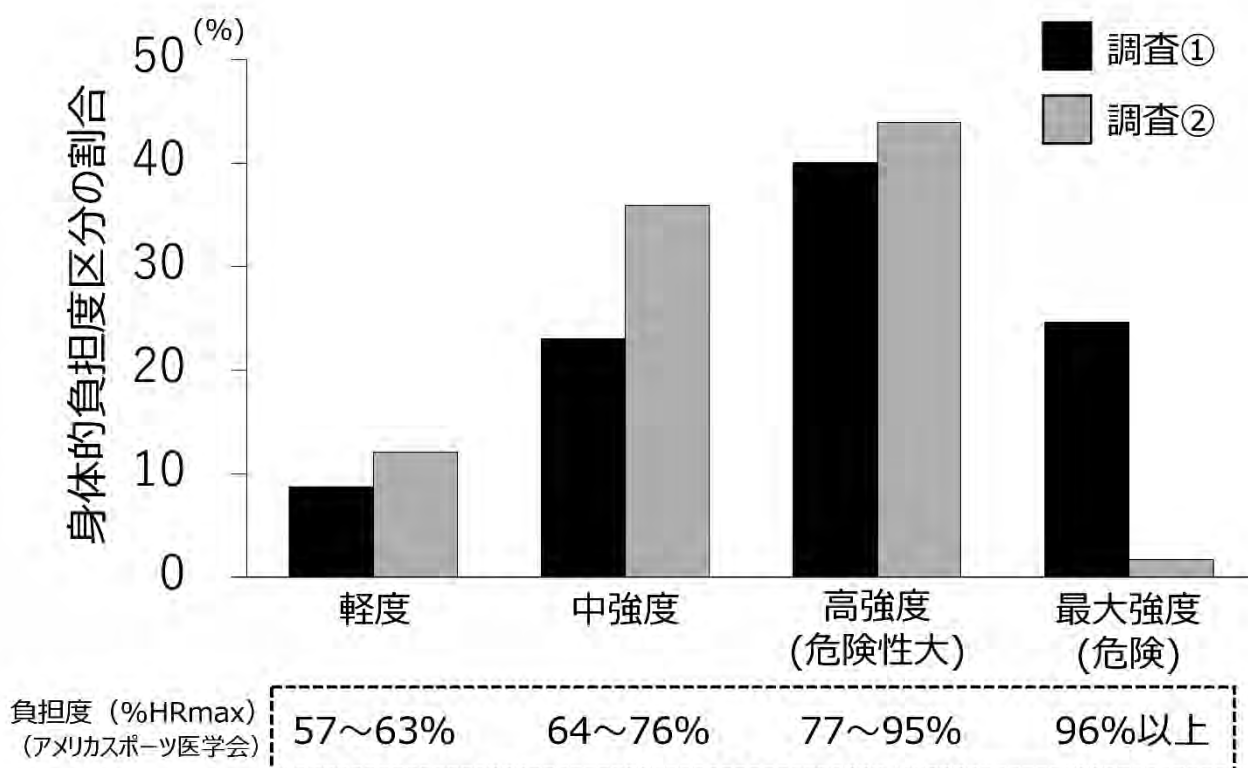


図1 各調査の対象者における草刈り作業中の身体的負担度区分の時間割合

こどもみどりプロジェクト

湯木 喜久 (3 回生), 柴崎 浩平

キーワード：小学校で農業，子ども，野菜を育てる経験

1. 団体概要

本プロジェクトでは、姫路市立白鷺小中学校にある使われていない花壇を借りて農作業を行なっている。同小学校の生徒や地域の住民と接しながら、種まきから収穫までを子どもたちと一緒にやり、雑草抜きや間引きなど地道な作業をしつつも、野菜を育てる大変さを学び、そして収穫時の達成感を感じていくことを目的としている。

本プロジェクトの発端は、1 年時の一般教養の授業がきっかけであり、継続的に活動を続けていきたいという思いから、本年度からプロジェクト化した。メンバー数は約 10 名であり (2,3 年生)、週 1 回の頻度で小中学校を訪れている。

2. 2025 年度の活動について

毎週水曜日の 14 時半頃から、1 時間ほどの活動を行っている。活動の流れとしては、まずその日の作業内容を説明し、子供たちと一緒に種まきや苗植え、雑草抜き、間引きといった農作業に取り組む。野菜を育てる過程で季節や天候に応じた注意点を学ぶ場面も多く、特に夏場には水やりの重要性を強調した。活動中は、地域の農家や住民からの指導を受けながら、実践的な農作業の知識を学んでいる。

表 1 は、2025 年度の活動スケジュールとして、植えた野菜や収穫した野菜の一覧を示している。春から初夏にかけてはさつまいもやトマト、夏には枝豆、秋から冬にかけて玉ねぎやそら豆、ジャガイモといった季節ごとの野菜を植えてきた。子供たちは四季折々の農作物の栽培方法を学び、作物の違いや季節に応じた農作業の工夫も体験している。

さらに、収穫した野菜は子供たちに持ち帰ってもらい、家庭で食べてもらうことによって、食育という観点からも学びを深めた。また、配り切れなかった野菜については、この活動に参加してもらっている地域の方が運営している子ども食堂に寄付する取り組みも行っており、地域貢献の一環として社会的なつながりを意識させる機会にもなっている。

表 1 2025 年度の活動スケジュール

| | |
|------|---------------------------|
| 4 月 | トマトの苗植え |
| 5 月 | そら豆, 玉ねぎの収穫 |
| 6 月 | 周辺の木を切り農地拡大 |
| 7 月 | トマト, ジャガイモ収穫 さつまいも植え付け |
| 9 月 | 枝豆収穫, 大根の根植え |
| 10 月 | 畝準備, 間引き |
| 11 月 | さつまいもの収穫 |
| 12 月 | そら豆の苗植え |
| 1 月 | 大根の収穫 |
| 2 月 | じゃがいも(種いも)植え(予定) |

(出所)執筆者作成



写真1 さつまいもの収穫
出所(執筆者)



写真2 ジャガイモの収穫
出所(執筆者)

3. 活動を通して学んだこと

2025 年度の「こどもみどりプロジェクト」を通じて、農業と自然環境について多くの学びを得た。普段は工学部で農業とは関係のない分野を学んでおり、最初は農作業に対する知識や経験が不足していると感じていた。しかし、このプロジェクトを通じて、自然と向き合いながら新たな視点を得ることができた。農業の現場に身を置くことで、計画通りにいかないことが多いことを実感し、柔軟に対応する大切さを学んだ。

特に印象に残ったのは、失敗から学ぶ経験だ。使

われなくなった花壇を活用しているため、小石や土が硬い部分がまだ残っている。しっかり石を取り除き、土を十分に柔らかくしておかなければ、根菜系は十分に育たず形が悪くなるなどの問題が起きやすくなる。この作業を疎かにしてしまったことがあり、野菜が想定通りに生育しなかった。これらの失敗を通じて、農業がいかに自然環境に依存するか、また予期しない事態に対してどのように適応するべきかを学んだ。一方で、トマトやキュウリが順調に育ち、収穫できたときには、子どもたちと共に大きな達成感を得ることができた。また、失敗と成功の両方を経験することで、農業の本質に触れることができとてもいい経験になった。

さらに、地域の農家や住民との協力を通じて、農業が一人で完結するものではなく、地域とのつながりや協力が重要であることを学んだ。収穫した野菜を子ども食堂に寄付し、食育や地域貢献の意義を実感した。自分達で育てた野菜を家庭に持ち帰り、食べることで、食べ物の大切さやその背後にある努力を子どもたちに伝えることができたと思う。

この活動を通じて、多様な分野での学びや地域とのつながりの重要性を深く理解し、分野が異なる領域に積極的に関わることの価値を改めて感じた。



写真3 雑草抜きの様子
出所(執筆)



写真4 収穫した玉ねぎ
出所(執筆)

4. これからの展望

今年度から本格的に始めた活動であることから、後輩への引き継ぎが不安視される。メンバー全員が2,3回生であり、後輩にどのように引き継ぎ、持続させていけるかが課題となっている。また、農作業に加え、作業後に子どもたちと鬼ごっこやブランコ、靴飛ばしなどで遊ぶことも重要な活動として行っている。親や先生より年齢の近い大学生と遊ぶ経験を通じて、子どもたちに楽しんでもらいたいと考えているが、大学生側が途中で体力的にバテてしまい、十分に遊びきれないことも課題の一つである。

これらを踏まえ、今後は、まず後継者の育成を目指し、1年生の新メンバーを募集・確保したい。また、栽培する野菜の種類を増やし、季節ごとに異なる作物を育てることで、子どもたちにより幅広い農業体験を提供し、その過程で農業の大変さや喜びを学んでもらいたいと考えている。さらに、地域住民や農業の専門家を招いて、高学年の生徒たちに農業への関心を深める機会を作りたいとも考えている。

加えて、運動遊びだけではなく、クリスマス会やハロウィンなどの季節行事に合わせたイベントを開催することで、より多様な活動を取り入れ、子どもたちとの交流を深めていく予定である。将来的には、本プロジェクトを他の学校や地域の子ども食堂にも広げ、姫路市全体で食育や農業教育の普及に貢献したい。また、収穫した野菜を子ども食堂で提供することで、子どもたちが「自分たちで育てた野菜を食べたい」という気持ちを持ち、子ども食堂に自然に足を運んでもらえるような活動を目指している。これにより、子ども食堂の認知度を高め、地域の支援拠点としての役割を強化できると考えている。子ども食堂は、地域で子どもたちが食事を楽しむだけでなく、コミュニティの一員としての意識を育む場所でもある。子どもたちに農業の楽しさを実感してもらおうとともに、子ども食堂にも親しみを持ち、今後も継続的に参加してもらえよう活動を続けていきたい。

04 地域連携プロジェクト - 学生プロジェクト -

1. 兵庫商品開発プロジェクト DEN (坂本薫) …… 38
2. 学生団体 Change (三宅康成) …………… 40
3. Campus tree (柴崎浩平) …………… 42
4. 農楽部 畑っこ (坂本薫、柴崎浩平) …………… 44
5. conneko- コネコ - (保坂裕子) …………… 47
6. Jyoto's (乾美紀) …………… 49
7. + art プロジェクト (柴崎浩平) …………… 51
8. 地域連携 café ルリアン (柴崎浩平) …………… 54
9. 山採りみらいグループ (柴崎浩平) …………… 56
10. 広尾東ファンクラブ (柴崎浩平) …………… 58

* () は顧問を意味する

商品開発プロジェクト DEN

加藤舞 朝間聖菜 (環境人間学部 食環境栄養課程 3 回生)

キーワード：食育， 地域交流， 多世帯交流

1. 団体概要

学生団体 DEN は、「田畑からの恵みを街へ」をコンセプトに、食を通じて地域と学生をつなぐことを目的として活動している。大学で栄養学を学ぶ学生が中心となり、地域の農産物や食文化に触れながら、健康や食の大切さを身近に感じてもらう取り組みを行ってきた。

近年、食への関心の低下や地域の食文化が継承されにくくなっていることが課題となる中、DEN では「作る・食べる・知る」という体験を重視し、幅広い世代が参加できる活動を展開してきた。

これまで、福崎町保健センターや城乾小学校等と連携した食育活動や、日本の食文化に触れるイベントへの参加など、さまざまな形で地域と関わってきた。その一つとして、学生と地域住民が継続的に関われる場づくりを目的に、健康志向スイーツを提供するカフェ活動「Sana Café」に取り組んでいる。

2. 2025 年の活動紹介

2.1 健康志向スイーツの販売 (Sana Café)

Sana Café は、地域のシェアカフェを活用し、学生が主体となって運営している期間限定のカフェ活動である。野菜や地元食材を取り入れたスイーツやドリンクを提供し、「おいしさ」と「健康」の両立を大切にメニューづくりを行っている。

「Sana」という名称には、ラテン語の「健やかさ」や「癒し」といった意味を込め、商品を通して地域の方々の健康に寄り添いたいという思いを表している。

提供するスイーツは、砂糖や油脂の使用量に配慮しつつ、素材本来の甘みや風味を生かすことを重視している。学生自身が試作を重ね、栄養バランスや食べやすさを考慮しながらメニューを検討してきた。また、販売時には商品の特徴や食材へのこだわりを直接伝えることで、食への関心を高めるきっかけづくりにも努めている Sana Café は、単に商品を販売する場ではなく、地域の方が気軽に立ち寄り、

学生と会話を交わせる交流の場としての役割も果たしている。来店者からは「学生と話せて楽しい」「健康を意識するきっかけになった」といった声が寄せられており、食を通じた双方向のコミュニケーションが生まれている。

今後は、地域団体や他プロジェクトとの連携を視野に入れながら、より多くの人にとって身近で価値のある活動へと発展させていきたいと考えている。



写真1 広報チラシ



写真2 キャロットケーキ・コンテリース

2.2 食育活動

近年、食の簡便化やライフスタイルの変化に伴い、家庭や学校生活において地域の伝統食や調理作法に触れる機会が失われつつある。この状況に対し、学生である我々が地域文化の「受け手」であると同時に「伝え手」となることで、次世代へ食文化をつなぐ架け橋となることを目指した。単に知識を学ぶ立場にとどまらず、地域の一員として学びを実践へとつなげることに本活動の意義があると考えた。地域住民や専門家から学ぶ「インプット」と、その知恵を次世代へ伝える「アウトプット」を活動の柱とし、学生の視点から播磨の食の魅力を再発見・発信する取り組みを行った。

活動の根幹となるのは、地域に深く根差した「食の知恵」の継承である。まず、私たちは「播磨の食文化を伝える会」に参画し、播磨地域に古くから伝わる伝統食の由来や、素材の持ち味を最大限に引き出す調理の作法、さらには食を通じたおもてなしの精神について、専門家や地域の方々から詳細な指導を仰いだ。これらの学びを通して、食文化が単なる食事行為ではなく、地域の歴史や暮らし、価値観と深く結びついていることを改めて認識した。

この貴重な学びを学内にとどめるのではなく、広く地域社会へ還元することを目的として、学生団体「畑っこ」との共同プロジェクトを立ち上げた。食文化に関する理論的な知見と、農業の現場における実践的なノウハウを融合させることで、多角的な視点からの食育プログラムの構築に注力した。学生同士が専門性の異なる立場から意見を出し合うことで、より実践的で伝わりやすい内容となるよう工夫を重ねた。

特に現代の子どもたちは、食材が食卓に届くまでの過程や、郷土料理に触れる機会が乏しい傾向にある。そこで私たちは、地域の伝統野菜である「宍粟三尺（しろうさんじゃく）」や、地元産の豆・麦を教材として選定した。知識を一方向的に伝える講義形式ではなく、収穫体験や伝統的な製法による麦茶作りなど、五感を活用した実践的な学びの場を創出することを重視した。体験を通じて、食材の背景や生産者の思いに目を向けてもらうことを意識した。

子どもたちが自らの手で食材に触れ、調理し、味わう体験を通して、地域の自然や人々の営みと食とのつながりを実感できるよう工夫した。これらの活動により、食文化を「知識」として学ぶだけでなく、「体験」として心に残す学びにつながったと考えている。また、参加した学生自身にとっても、地域との関わりの中で学ぶ姿勢や、伝える力を養う機会となった。今後も、地域との連携を大切にしながら、学生ならではの視点を生かした食文化継承の取り組みを継続し、地域と次世代をつなぐ活動として発展させていきたい。



写真3 チラシ



写真4 麦茶炒り体験



写真5 播磨の食文化の会での料理

3. 対外的に紹介したい取り組み

2025年度は、特に「地域住民との交流」および「学生間の連携」を重視し、以下の二つの活動を軸に展開した。これらは今後のプロジェクトの核となる重要な取り組みである。

地域コミュニティの場としての「カフェ活動」、伝統を次世代へ繋ぐ「小学生への食育活動」上記二点の活動は、いずれも「人とのつながり」を活動の源泉としている。地域住民との密な交流や、学生団体間のシナジーを活かした取り組みは、次年度以降の活動においても根幹を成すものである。今後も、播磨の豊かな資源を活かしながら、地域社会と大学を繋ぐハブとしての機能を強化し、より多角的な社会貢献活動を展開していく所存である。

学生団体 Change

藤岡陽菜（人間形成系3回生）

キーワード：子ども，地域交流，イベント企画

1. 団体概要

学生団体 Change は地域課題を発見し、地域の課題を解決することや地域の輪を広げることを目的としており、人と人とのつながりを重視して活動している。主に小学生以下を対象としたイベントを企画・運営しており、学生が主体となって活動することで世代間交流の場となることを目指している。発足は2019年6月であり、2026年度のメンバー数は2回生4人、1回生11人の計15人である。

2. 2025年度の活動について

2025年度の学生団体 Change の活動は、大きく3つある。

1つ目は、公益財団法人子ども財団の協力のもと、明石おさいライオンズ子ども食堂、はなぞのサポーティングランチ、駅前子ども食堂などでボランティア活動を行った。前年度に引き続き、調理補助や配膳、片付けだけでなく、子どもたちと一緒に遊んだり会話をしたりする時間を大切に活動を通して、子ども一人ひとりに寄り添った関わりの重要性を実感し、安心して過ごせる雰囲気づくりを意識するようになった。

2つ目は、コープこうべ第7地区本部が主催する様々なイベントにボランティアとして参加した。これらの活動を通して、地域活動に関する知識を深めるとともに、今後の団体活動に活かすことのできる多くの経験を積むことができた。大きく以下の2つの活動をおこなった。

① 坊勢島漁業体験（姫路・家島）

「坊勢漁業協同組合」の方々のご協力のもと、船上での底引き網漁の見学や魚の選別体験、坊勢島での中間育成施設や冷蔵施設などの見学を行った。学生は、子どもたちの安全確保の補助や配布資料の配付を担当し、イベントが円滑に進むよう努めた。学習会で得た知識や気づきは、3つ目の活動である学生主体のイベント企画にも活かすことができた。

② 買い物クッキング教室（コープ姫路砥堀）

コープこうべの調理室にて、クッキングサポーターの皆さんと協力しながら、「はじめてのお買い物&クッキング」が実施された。子どもたちは、買い物リストに書かれた4つの商品を店内で探し、自分で会計にも挑戦した。その後、購入した食材を使っておにぎりや味噌汁などを調理した。子どもたちの「できた!」という喜びの声や、真剣に取り組む表情が印象的で、成功体験を支える活動の大切さを感じた。



写真1 子どもたちが買い物する様子

3つ目は、学生団体 Change とコープこうべ第7地区本部が共催し、12月13日に兵庫県立大学環境人間学部にてイベントを実施した。「～自然のかけらを使って～世界に一つの木の壁掛けプレートづくり」と題し、海や森林などの自然について楽しく学んだ後、親子で協力して木の壁掛けプレート作りを行った。イベント開催にあたっては、事前に兵庫県立国見の森公園や森林組合の方々にお話を伺った。国見の森公園では、壁掛けプレートの作り方や子どもへの教え方を学び、森林組合では、兵庫県の森林について詳しく教えていただき、その内容をイベント内のクイズに活用した。多くの方々の協力のもと開催された本イベントでは、子どもたちがそれぞれ個性あふれる作品を完成させ、学生や保護者と一緒にアイデアを出し合いながら楽しむ姿が見られた。また、イベント終了後も、キャンパス内のイチヨウの葉を使って団体メンバーと子どもたちが遊ぶ様子が見られ、イベントを通して自然な交流が生まれたことを実感した。保護者の方から、「こん

なに遊んでもらえるのは大学生だからこそですね」とのお言葉をいただいたことが特に印象に残っている。アンケートでは、「クイズが楽しかった」、「また学生団体 Change のイベントがあれば参加したい」といった喜びの声を多くいただくことができた。



写真2 子ども達と壁掛けプレートを作っている様子

3. 活動を通して学んだこと

今年度の活動を通して、地域活動においては、単に支援を行うだけでなく、相手の立場に立って関わる姿勢が重要であることを学んだ。子ども食堂での活動では、食事の提供を手伝うことだけが目的ではなく、子どもたちが安心して過ごせる空間をつくるのが大切であると実感した。子ども一人ひとりの様子に目を向けながら声をかけたり、一緒に遊んだりすることで、子どもたちが心を開いてくれる場面

も多く見られ、関わり方一つで場の雰囲気が大きく変わることを学んだ。

また、コープこうべ第7地区本部が主催する地域イベントへの参加を通して、地域活動は多くの関係者の協力や入念な準備によって成り立っていることを実感した。イベント当日は目立たない役割であっても、安全面への配慮や円滑な進行を支える重要な役割であることを理解した。学生として参加する立場であっても、自分の行動一つが全体に影響を与える可能性があるため、責任感を持って行動することの大切さを学んだ。

さらに、学生団体 Change が主体となって企画・運営したイベントでは、参加者の反応を見ながら進行を調整することや、その場の雰囲気に合わせて柔軟に対応することの難しさも感じたが、イベント終了後に参加者から「楽しかった」「また参加したい」といった声をいただけたことで、学生だからこそできる地域への関わり方があると感じた。

これらの経験を通して、地域活動における学生の役割は、支援する側として活動するだけでなく、人と人をつなぎ、場を和らげる存在であることだと考えるようになった。今年度で得た学びを今後の活動にも活かし、より多くの人々が安心して参加できる地域交流の場づくりに主体的に取り組んでいきたいと考えている。

Campus tree

森本恵(社会デザイン系2回生)

キーワード：地域交流，地域活性化，つながり，灯り

1. 団体概要

Campus tree は、「灯り」をキーワードに地域の方々との「つながり」を大切にしながら、一緒に空間をデザインする活動を主に行っている。「灯り」を軸にしたキャンドルナイトの実施の他、プロの講師の方々にご指導して頂きながら古民家内の土壁を修繕する土壁ワークショップの開催を通して、地域の方々と交流活動をする、兵庫県立大学の学生による学生団体である。現在は2年生13人、1年生8人の計21人で活動している。

2. 2025年度の活動

2025年度の主な活動を表1にまとめた。昨年度と同様、エコフェスや土壁ワークショップ、あぼしまちカフェクリスマスに加えて、新たなイベントにも参加させて頂いた。

表1 2025年度の活動

| | |
|-----|----------------------------|
| 3月 | さくらキャンドルナイト |
| 4月 | 土壁ワークショップ |
| 5月 | 春フェス 新入生歓迎会 |
| 7月 | エコフェス オープンキャンパス |
| 11月 | 工大祭 |
| 12月 | 土壁ワークショップ あぼしまちカフェクリスマス |

2.1 土壁ワークショップ

土壁ワークショップには、2025年度は4月と12月の2回参加させて頂いた(写真1)。兵庫県福崎町にある国登録有形文化財である旧小國家内の土壁の修復をお手伝いする活動であり、お世話になっている福崎町の旧小國家の所有者や左官の方のご指導の下、泥団子を作って土壁の基礎を作る作業から瓦をのせる作業まで、4月のワークショップでは

地域の方々とも共に活動し、コミュニケーションを取りながら作業することができた。ワークショップを通して、講師の方々や地域の方々とはもちろんのこと Campus tree のメンバーとも仲を深める機会になり、楽しく交流することができ、大変良い経験になった。



写真1 土壁ワークショップ

2.2 あぼしまちカフェクリスマス

例年通り、あぼしまちカフェクリスマスにも参加させて頂いた(写真2)。昨年と同様ワークショップとキャンドルナイトを行い、1日を通して地域の方々と交流した。ワークショップでは、昨年と同様アロマキャンドルストラップづくりを行った。当日までに試作をした上で、子供たちにも安全に楽しく体験できるように行った。キャンドルナイトでは、クリスマスコンセプトにLEDキャンドルと色付き瓶の配置、デザインを事前に考え、昼頃から準備を始め、平面的なクリスマスデザインの他に木製の椅子や箱を使用し立体的な飾りも作成した。イベントの終盤には、寒い中ではあったが、LEDキャンドルの点灯を地域の方々にもお手伝い頂き、その後はクリスマスモチーフのキャンドルと共に写真撮影をして頂き、多くの方々に楽しんでもらうことができた。



写真2 あぼしまちカフェクリスマス

2.3 さくらキャンドルナイト

昨年度末の活動にはなるが、コロナ禍により中止が続いていたイベントに参加させて頂いた(写真3・4)。参加したメンバーは全員このイベントに参加経験はなかったが、これまでの活動の経験をもとに地域の方々と交流をすることができた。こちらのイベントでもキャンドルナイトとワークショップを行った。ワークショップでは、メンバーが持ち寄った牛乳パックを使ってキャンドルホルダー作りを行った。また、さくらキャンドルナイトの主催の方々のワークショップのお手伝いもさせて頂き、多くの方々と交流する機会を得ることができた。キャンドルナイトでは、イベントに来てくださった方々と共にキャンドルに灯りをともし、ワークショップの中で出会った子供たちが話しかけてくれることもあり、活動の中でしっかりとコミュニケーションを取ることができていると感じた場面であった。

3. 活動を通して学んだこと

私たちは Campus tree の活動を通して、コミュニケーションを取ることの大切さを学んだ。イベントの連携先の方々との話し合いもそのひとつであるが、メンバーとのコミュニケーションをあまりとることができていなかったと振り返って考えた。その要因として、活動の回数が少ないことであったり、活動に参加するメンバーが限られていたりすることが挙げられる。そのため、コミュニケーションを取って、Campus tree 内の考えの共有を行うことが必要であると考えた。イベントの連携先の方々とは、相手側と Campus tree 側の現在の状況を伝えること



写真3 さくらキャンドルナイト



写真4 さくらキャンドルナイトワークショップ

やイベント前に下見に行き、直接話すことで円滑に物事を進めることができたと感じる。

4. 今後の展望

今後の展望としては、2つのことが挙げられる。

1つ目は、新たなイベントへの参加である。これまでの活動は先輩方が繋いできて下さった連携先の方々と継続した活動や、その方々が新たなイベントへの参加依頼をしてくださって行っているものである。けれど、夏の時期に活動がなく、メンバーとの交流も希薄になってしまうため、今までの活動にもより一層力を入れながら、新たなイベントに参加して挑戦していきたい。

2つ目は、広報の活発化である。SNSを中心に Campus tree の活動を発信していくことで多くの方々の目に留まれば、今よりも多くの活動を行うこと、地域を活性化することにつながるのではないかと考えている。

農楽部 畑っこ

廣山真菜 原睦子（環境人間学部 食環境栄養課程 2 回生）

キーワード：農業，在来種，無農薬，多世代交流，地域交流

1. 団体概要

農楽部 畑っこ（以下、畑っこ）は、姫路環境人間キャンパス内にある畑で毎週水曜日に活動している学生団体である。

「農を楽しむ」をコンセプトに、地域の方々の協力を得ながら、単に野菜を栽培・収穫することを目的とするのではなく、採種して次年度につながるサイクルを通じて「在来種を守る」ことを目的としている。また、伝統的な農法も活動を通して継承しており、昔ながらの農具を使った種まき、収穫・採種、そして調理して食べるまで、食の一連の流れを体験している。その過程で、「鎌と鍬さえあれば食べていける」という知恵を学んでいる。

本年度は、2回生9名，1回生12名で活動した。以上に記したような例年の活動に加え，本年度は地域の多世代の方との繋がりを重視した活動を行った。近年の都市化に伴い，農業ができる環境が身近にない人が多い。そのため，小学生や学生が農業に触れ，知識を付けることのできる場の提供や普段目にするのが少ない在来種の農作物ならではの良さや魅力の発信を行った。

2. 2025 年度の活動事例

本年度の主な活動内容を表 1 に示した。毎週水曜日の活動では、畝づくり，種まき，草引き，水やり，収穫・採種を主に行った。

また，本年度は学祭（エコフェス・工大祭）で模擬店の出店や食育ひろば，農家の方との交流，餅つきなど地域との繋がりを意識した活動を行った。

2.1 学祭（エコフェス・工大祭）

姫路環境人間キャンパスで行われたエコフェスで，模擬店を出店した。私たちが栽培したじゃがいもを用いたハッシュドポテトを調理し販売した。

姫路工学キャンパスで行われた工大祭でおさつチップと麦茶ラテを販売した。サツマイモは私たち

表 1 2025 年度の活動事例

| | 収穫した農作物 | イベント |
|---|---|--------------------------------------|
| 春 | ソラマメ， サヤエンドウ， ニンニクの芽， 大麦 | 新入生歓迎会 |
| 夏 | トマト， キュウリ， ナス， ピーマン， トウモロコシ， ブドウ， じゃがいも， ミョウガ | 学祭（エコフェス）， 梅ジャム・梅シロップ・梅ジュース作り， 食育ひろば |
| 秋 | イチジク， サツマイモ， もち米， 鶴首カボチャ | 農家の方との交流， 学祭（工大祭） |
| 冬 | キクラゲ， 大根， 人参， 小松菜， 水菜， みかん， 鶴首カボチャ | 環境人間学フォーラム， 餅つき |

（出所）執筆者作成

が栽培したものとひょうごの在来種保存会の農家の方に頂いたもの、大麦は私たちが栽培したものを用了。



写真 1 (左) エコフェスの様子



写真 2 (右) 工大祭の様子

2.2 食育ひろば

兵庫商品開発プロジェクト DEN と共同で 2025 年 8 月 4 日，5 日の二日間で「食育ひろば」を開催した。当日は 4 名（4 日），7 名（5 日）の計 11 名の小学生が参加してくださった。当日の内容を以下に記す。

- ①大麦と宍粟三尺についての紹介・説明
- ②脱穀体験，宍粟三尺の収穫
- ③大麦焙煎体験
- ④豆についての紹介・説明
- ⑤麦茶飲み比べ（六条大麦，二条大麦，市販の麦茶パック），豆ご飯と宍粟三尺の試食

これらの活動を通して，小学生に普段スーパーマーケットなどで目にしない麦の脱穀前の状態や在来種である宍粟三尺・豆に触れてもらい，在来種について知ってもらうことを目的とした。



写真6（左） 竹林伐採体験の様子
写真7（右） ゆず収穫体験の様子



写真3（左） 宍粟三尺収穫の様子
写真4（右） 脱穀体験の様子



写真5 食育の様子

2.3 農家の方との交流

学生団体おにぎりひろばと共同で2025年11月30日に太市の竹林見学と安富町のゆず収穫体験を行った。

竹林見学では実際に伐採体験をさせていただいた。竹を切るだけではなく、竹の葉を切り落とし、運ぶまでが1サイクルとなっており、葉を落とす作業が最も大変であると気づいた。

ゆず収穫体験ではゆずの木についているトゲに気をつけながら作業を行った。ただ収穫するだけではなく、他のゆずを傷つけないような工夫や見た目による仕分けなども行い、商品を扱うということを実感した。

2.4 環境人間学フォーラム

2025年12月3日に姫路環境人間キャンパスで開催された環境人間学フォーラムのポスター発表部門にて発表を行った。多くの方に本団体の活動や在来種について周知することができた。また，環境人間学フォーラムにおいて，奨励賞（ポスター発表部門）を頂き，今後の活動の励みとなる機会となった。



写真8 環境人間学フォーラムで発表したポスター

3. 活動を通して学んだこと

本年度は活動を通して、身近な感動に気づくことができた。私達は1年間あるいは2年間、本団体に所属することで、当たり前のように、畑を利用させていただき、農作物が種の状態から食べられる状態になるまでを日々見ることができている。

しかし、食育ひろばを開催した際に、小学生が普段見ないものに純粋な気持ちで驚き、感動し、楽しむ姿は私たちが身近な感動を当たり前のこととして感じてしまっている事実や私たちの活動の意義を感じることが出来た。特に、宍粟三尺を両手いっぱいを持つ姿、普段見ない田んぼや虫、麦を見た時の姿はとても印象的だった。



写真9 (左) 宍粟三尺を手に持ち、田を見る小学生の様子

写真10 (右) 田を整備する様子

4. 今後の展望

本年度2回生が幹部を行ったこともあり、来年度も同体制を軸に活動する予定である。しかし、現状に満足するのではなく、初心に戻り、「なぜ」や「どうして」の部分地域の方と考えを深めながら活動を行いたい。また、多様な意見を積極的に取り入れ、これまでの型にはまらない活動を行ってきたい。

様々な活動を通して、自らの知識・技術部分の未熟さや在来種に関する周知不足を実感した。まずは、自らの知見を深めつつ、さらなる在来種の周知・保全に向け努力していきたい。そのために、来年度も小学生やその他の年代の方を対象としたイベントの計画・実施を行い、地域に根差した学生団体だからこそできる五感を通じて学ぶ体験型の魅力発信を行いたい。また、本年度も行ったように本団体に留まらず、学内のあらゆる団体を巻き込んだ取り組みも積極的に行うことで、学内への在来種の周知や各学生団体の活性化を期待したい。

この学生団体から学内、兵庫県内、そして日本全国に在来種の良さが広まることを願っている。

conneko-コネコ-

高尾芽依（環境人間学部3年）

キーワード：子ども，地域，ボランティア

1. 団体概要

conneko-コネコ-は、地域の子どもの対象としたボランティア団体と学生をつなぐことで、支援者不足の解消を図るとともに、学生の観点から、地域の居場所支援の課題を探り、現代の子どもたちが直面している課題を明らかにし、学生として可能な解決策を探ることを目的としている団体である。現在は4年生1名、3年生1名、2年生10名、1年生13名の計25名が所属している。また、本団体は、兵庫県立大学令和7年度学生生活活動支援事業”県大生チャレンジサポート”にSDGs推進部門として採択され、支援金の交付を受けることで、活動の充実および継続的な活動実施を可能とした。

2. 2025年度の活動について

現在 conneko-コネコ-は、高砂市で毎月1回、地域の子ども食堂として運営されている「きつずきっちゃん曾根」，「阿弥陀おかげ村子ども食堂」，「地域・子ども食堂よねだ」，大阪府豊中市で子どもたちを支援するイベントを開いている「ごはん処おかえり」を主な活動拠点としている。

「きつずきっちゃん曾根」では、子どもたちと一緒にUNOや鬼ごっこで遊んだり、食事をしたりした。とりわけ、子どもたちとの身体を使った外遊びについては、学生ボランティアの存在が有効に機能していると言える。また、地域のボランティアスタッフへのインタビュー調査を通じて、地域の課題について、またその対応策などについて聞くことができた。一方で、子どもたちの遊びが携帯やゲーム機による個別の遊びに閉じていることが問題となることもあり、今後、遊びの在り方について検討していく必要を感じている。

「阿弥陀おかげ村子ども食堂」では、ハロウィンパーティーの司会や、調理・後片付けの手伝いを通して、大規模支援の場での課題を捉えることができた。

「地域・子ども食堂よねだ」では、子どもや大人



写真1 きつずきっちゃん曾根



写真2 阿弥陀おかげ村子ども食



写真3 地域・子ども食堂よねだ



写真4 ごはん処おかえり

※写真3のみ学生ボランティアは写っていない。

やボランティアが全員で一緒に遊びをすることを通して、地域のニーズや地域の特徴について知ることができた。

「ごはん処おかえり」では、未成年の子どもは営業時間中に無料でごはんを食べることができ、大人であっても、困窮時には無料提供される仕組み(お福分け)があり、地域の「食」を支えている。いわゆる多世代の地域食堂として、誰もが受け入れられる場所として機能しており、地域の課題を受け止め、みんなで支え合って生きていく居場所づくりを目指している。クリスマス会の運営補助を通して、地域活動として子どもの居場所を運営することの困難について知ることができた。

3. 活動実施による影響・成果

毎月活動に参加することで、子どもたちにあだ名をつけられたり「ありがとう」「また絶対来てね」と言ってもらえたりと、とても喜んでもらえる。運営者の方からも、「子どもたちと遊んでもらえてありがたい」「手伝ってもらえて助かっている」との声聞くことができた。子ども食堂は運営の多くを高齢者ボランティアが担っているため、大学生が介入することで、子どもと大人の間にある世代間ギャ

ップを埋めることができた。

本活動を通して、子どもに関心をもつ大学生と地域で「居場所」づくりの支援を行っているボランティアをつなぐことができた。地域ボランティアに関心があったとしても、大学生ひとりで参加することは難しいが、学生団体としての参加だと、スムーズだった。ボランティアとしての活動参加を通して、座学では学ぶことのできない子どもたちの生活実践について知る機会を得たことで、具体的なイメージと共に学生ボランティアとしての関わりの在り方を検討する資料を得ることができた。これらをもとに、地域支援の現状と、子どもたちが経験している課題について考えることができ、子どもの「居場所」づくりの取り組みにみられる課題について、今後も引き続き検討を続ける。

4. 活動を通して学んだこと

ボランティア活動に継続して参加することの重要性を学んだ。地域の方々には、私たち大学生ボランティアと積極的に関わろうとしてくれた。子どもたちも、私たちが話しかけてみると、自分からたくさん話をしてくれる。このように、地域側は私たちを歓迎してくれているので、課題発見という意味でも、せっかくコミュニケーションを取って構築した関係を一度きりで終わらせるのはもったいない。何度も対面することで、地域・子どもたちから信頼できる学生と認識され、地域コミュニティの一員として受け入れられ、子どもたちの成長の後押しをすることができたと感じられた。人と接するのが苦手だった子どもも、継続して子ども食堂に参加することで、たくさんの異世代の人と関わることができ、明るくなった。参加したボランティア学生も、多くの多世代の人と関わることができ、今後社会で必要とされるコミュニケーション・スキルを高めることができる。

地域でみえてくる子どもたちの課題についても、具体的に学ぶことができた。例えば、靴底がめくれていたり、土日でも体操服を着ていたり、特に身なりから気になる子はたくさん見つけられるが、通告をすると親が警戒して子ども食堂に来なくなるため、深いところまで関わることはできない。市役所などに情報提供をするまでに留まるなど、支援の手を差し伸べる手段に課題が残る。子ども食堂は本当に困っている子が来るというイメージがあったが、特に家庭などに問題もなく遊び感覚で来ている子どもも多い。運営者によると、「困難を抱える子ども」だけを対象にすると、次第に参加しなくなる可能性があるうえ、子どもに対するレッテル貼りにつながりかねないという。そのため、誰でも参加できる場とすることで、多様な子どもたちが集まり、その中で支援が必要な子どもに自然と気づき、地域で支えていくという形が最も望ましいとされていた。現在のニーズの有無にかかわらず、隠れた社会的不安を抱えた子どもの早期発見の必要性も感じた。

5. 今後の展望

活動場所について、大学からなるべく近い姫路市内でボランティア活動ができるような拠点を増やし、メンバーが活動に参加しやすくなればより良いと考えている。

大学生ボランティアとしての参加形態について、ただの遊び相手にとどまらず、conneko-コネコ-の目指す「子どもひとりひとりに沿った支援」を可能にするために、気になる子どもについての情報をどのように共有していくことができるか、どのように連携していくことができるかなど、課題も見えてきた。そこで、ミーティングや記録の共有など団体内交流の機会を増やす。そして地域団体と話す機会を持ち、地域の子どものためのセーフティネットとして機能するための工夫や具体策について考えていきたい。

学生団体 Jyoto's

榊井瑞稀（社会デザイン系3回生）

キーワード：SDGs, グローカル, 学習支援

1. 団体概要

学生団体 Jyoto's は、外国にルーツを持つ子どもたちを対象として、学習支援のボランティア活動を行う団体である。2022年に発足し、現在11人の学生が所属している。

主な活動内容としては、①学習教室への参加、②イベントの参加・新規企画の二つである。毎週土曜日の13時半から15時半まで、城東町補習教室にボランティアとして参加し、外国にルーツを持つ小学生から中学生までの子どもたちを対象とした学習支援を行っている。また、イベントの企画開催にも携わっており、去年はキッズニアでの就業体験研修、環境人間キャンパスで行われるエコフェスへの教室の子どもたちの招待等を行った。

2. 活動を通して学んだこと

今回の活動を通して、補習教室における私たち Jyoto's の取り組み持つ意義と役割の重要性を深く学ぶことができた。

「外国にルーツを持つ子どもたち」と一括りに言っても、その国籍や背景は様々である。そのような多様なアイデンティティを持つ子どもたちが補習教室を通してつながり、活動を重ねる中で日本社会の制度や文化に触れられる場があることの重要性を実感した。

また、日々の学習支援やイベントの企画・実施に関わる中で、単に知識を教えるだけではなく、子どもたちが安心して参加し、楽しみながら学べる環境づくりが不可欠であることを学んだ。特に自らイベントを考え実行する過程では、子どもたちが笑顔になれる工夫とは何かを考えると同時に、日本の文化や社会体制を自然に学べる経験となるよう意識することの大切さに気づいた。

これからも普段の補習教室やイベントが子どもたちにとって楽しく、かつ有意義なものとなるよう努めていきたいと考える。

3. 活動事例

活動事例としては、例年に引き続き行われたキッズニアでの就業体験研修が挙げられる。これは日本でのキャリア形成に関する知識や情報が充分ではない子どもたちに職業の幅やその面白さを感じてもらい、将来について考えるきっかけとなることを目的としたもので、補習教室からは21名の小中学生が参加した。

子どもたちは二名一組となり、Jyoto's を主とするボランティアの学生が各グループを誘導し様々な職業を体験してもらった。消防士や放送局、アイスクリーム屋など職業の幅は多岐にわたり、その就労に応じて「キッズ」というキッズニア独自の通貨を手に入れることができる。キッズはキッズニア内で商品を購入する際に利用できたり、銀行に預けたりすることができ、実践的に通貨の使い方について学ぶ機会になった。参加した子どもたちからは「楽しかった」「また参加したい」といった声を聞くことができ、楽しみながらも職業の幅に触れてもらうという当初の目的を達成できたのではないかと考える。



写真1 キッズニアでの様子（2025年3月）

また新たに取り組んだ内容としては、環境人間キャンパスで開催されたエコフェスへの招待がある。将来の進路選択の一つである「大学」に気軽に訪れてその雰囲気を感じてもらいたいという思いから、

城東町補習教室に通う中高生 25 名を招待した。参加した子どもたちからは「大学生と実際に直接話すことができた。」「大学が楽しいところだと感じた」という大学に対する前向きな感想を聞くことができた。

そして冬には毎年補習教室で開催されるクリスマス会に参加し、クイズの出し物を行った。クリスマスにちなんだ問題や、教室の先生に関する問題を三択形式で出題し、正答率に応じて景品をプレゼントするという形態をとった。

この準備を進める中でクイズの難易度の調整や問題文の取捨選択を行い、言語力や知識量に差がある幅広い年齢の子どもたちでも無理なく参加して楽しめるよう工夫を行った。



写真 2 クリスマス会の様子 (2025 年 12 月)

これらの活動を通して、私たちが企画したイベントが子どもたちにとっての将来の選択肢を広げることや、楽しみながらも知識を広げる機会となる可能性を秘めていることに気づき、今後の活動意欲の向上へとつながった。

4. 今後の展望

今後の活動においても、今回学んだこととこれまでの経験を活かし、補習教室での学習支援やイベントが子どもたちにとって楽しく、かつ学びの多いものとなるよう活動を行いたい。

イベントとしては、これまで取り組んできた活動以外にも新しいことにも挑戦していきたいと考えている。例えば節分イベントや春分日のイベントなど、楽しみながらも日本の文化に触れることができるような季節のイベントを増やしていけたらと考えている。

また、引き続き活動メンバーの拡大にも力を入れていきたい。現在 Jyoto's は 3 学年合わせて 11 名という少人数で活動しているため、活動の幅を広げるためにも広報活動に力を入れるなど、人員募集に努めていきたいと考える。

今後も学生ならではの柔軟な視点や発想を用いながら、子どもたちの学習支援と楽しみながら学べる環境を継続的に提供できるよう取り組んでいきたいと考える。

+art プロジェクト

船津菜々子（環境人間学部環境人間学科社会デザイン系2回生）

キーワード：アート，デザイン，地域交流

1. 団体概要

「+art プロジェクト」とは総合美術同好会から派生した地域の活性化を目標に活動を行うプロジェクトである。地域イベントにアートに関連し様々な企画を提供し、来場者の経験価値を高め地域の魅力をより多くの人に知ってもらうことを目的としている。

2. 活動紹介

表1 2025年度の活動概略

| | |
|-----|---------------------|
| 6月～ | しかた広尾東コスモスまつり準備 |
| 10月 | しかた広尾東コスモスまつり参加 |
| 11月 | 姫路城マラソン2026 横断幕制作 |
| 1月 | 姫路城マラソン2026 横断幕掲出予定 |

(出所)執筆者作成

2.1 しかた広尾東コスモスまつり

「しかた広尾東コスモスまつり」とは兵庫県加古川市志方町広尾東地区で毎年10月中旬ごろに行われる地域住民主体で行われるイベントである。休耕田を利用したコスモス畑を目当てに町内外から多くの人々が志方広尾東を訪れる。

当団体の志方町コスモスまつりでの活動は昨年度から始まった。昨年度では地域住民の方との協働のなかで参加型・鑑賞型の2種類のアート企画を実施した。参加型の企画では、コスモス畑の道路を活用した「らくがきロード」「トリックアート」の企画を、コスモス畑の中には「額縁型フォトスポット」を設置し、それぞれ参加者の方に写真を撮り楽しんでいただくような取り組みを行った。また、鑑賞型の作品では、会場目印となる立て看板や「額縁型フォトスポット」もコスモス畑のインスタレーション作品として設置した。

昨年度の活動の反省をもとに、今年度の活動では、1. アート作品満足度向上、2. 志方町への宣伝、3. 地域住民との交流機会の向上、4. 地域住民の負担軽減、5. 当団体の知名度上昇、5つの目標を立て企

表2 今年度新たに行ったアート企画

| |
|-------------------|
| 1.会場の横断幕制作 |
| 2.会場物販コーナーでの値段カード |
| 3.こしひかりラベルシール |

(出所)執筆者作成

画を立案した。

そして、6月に実際に志方町現地を訪れ地域住民の方との話し合いを経て、以下の企画を実施することとなった。

今年度新たに行ったアート企画は3つある(表2)。1つ目が会場の横断幕制作、2つ目が会場物販コーナーでの値段カード、3つ目がまつりで販売しているこしひかりのラベルシールである。また、更に昨年度行った企画(らくがきロード、額縁型フォトスポット)についても新たに案内板を設置・積極的に声掛けを行うなどして参加者の満足度向上につながる工夫を凝らした。

会場の横断幕は、昨年度までの木の立て看板に絵を描くのではなく、持ち運びが容易な横断幕に書くことで志方町だけではなく、学祭など外部のフィールドにも展示することが可能な仕様にした(写真1)。実際に、工学部の学祭(工大祭)にて展示を行った際には来場者の方から多くの反応が寄せられた。

次に会場物販コーナーの値段カードでは、まつりの運営メンバーである地域住民の負担を軽減する目的で制作を行った(写真2)。毎年コスモスまつりでは志方町で採れた野菜などを販売しているのだが、値段カードについて地域住民が毎回その場で



写真1 当日会場に掲示された横断幕



写真2 物販所での値段カード



写真3 こしひかりラベルシール

簡単に作りシンプルなものとなっているため、可愛くデザインしてみたかどうかとの意見のもと新たに作成を行った。値段を記載する欄のほか手書きのイラストを取り入れ、またラミネート加工を施すことにより記載した文字を何度も書き直すことのできる仕様にした。

最後にこしひかりのラベルシールとは、会場で販売している志方産こしひかりのパッケージに当団体がデザインしたラベルシールを施したものである(写真3)。これによりまつり当日に物販コーナーのお手伝いをするなかでのまつりの参加者もとい運営メンバーである地域住民との交流の話題の種が生まれた。

さらにコスモスまつりの当日には提供するアート企画2種(らくがきロードと額縁型フォトスポット)の参加者への対応にあたり、その他志方町の地域住民(運営メンバー含む)や地域外のまつり参加者とも積極的に交流を行った。地域住民の方の紹介で志方町在住の画家の方とアートにまつわる対話を行ったり、同じくコスモスまつりに参加している他の学生団体のメンバーと交流を行ったり、まつりの運営メンバーの方々と食事を共にしさらに交流を深めたりなど、どれも地域の温かみを感じる経

表3. ヒアリング内容

- | |
|-----------------|
| 1. アート作品の準備について |
| 2. まつり開催期間中について |
| 3. アート作品について |

(出所)執筆著作成

験であった。

そして、コスモスまつり開催終了後、11月12日に志方町地域住民かつまつりの運営メンバーの方1名と当団体のメンバー2名とともに今年度の取り組みについて、振り返りのインタビュー調査を行った。調査内容は表3の通りである。

上記の内容を基とした質問項目をまとめ、事前にそれらを先方へお伝えした。当日には質問シートに沿って所々自由に話を深堀しながらインタビューを続けた。

1.アート作品の準備についての質問項目では、昨年度当団体から連携してくださる地域住民の方への連絡頻度が少なく度々混乱を招いてしまっていたという反省から今年度からは連絡手段・頻度について見直しを行い、改善を図ったことについて伺った。それについて十分適切な連絡手段・頻度であったとの評価をいただいた。

2.まつり開催期間中についての質問項目では、当団体が行ったまつり当日の動きに対する評価とコスモスまつりの来場者層についてを伺った。まず、当団体の動きに関してまつり当日の運営にあたる当団体メンバーの数が多いと指摘があった。これについて、来年度では適切な派遣数の見直しをしていきたい。次にコスモスまつりの来場者層について、主な来場者の出身地域や時間ごとの年齢層について把握はできているが正確なデータは取れておらず、また今後正確に分析できる手段があれば嬉しい、との意見をいただいた。よって今後当団体では来場者層に正確にデータ取得が行える企画を実施したいと考える。

3.アート作品について、今年度制作したアート作品についての実際の効果について評価を伺った。結果として、横断幕は細かいディテールまで描きこまれていて見ごたえがあった、値段カードについては良いデザインであったが現場には少し不向きで期待するほどの負担軽減とまではいかなかったこと、そしてこしひかりラベルシールについてはシールの効果であるか不明ではあるがまつり期間内でのこしひかりの販売売上が増加したことがわかった。

総括して、今年度の取り組みでは昨年度よりも多

くのアート企画を実施制作し、志方町との交流が盛んになった。その一方で運営にあたるメンバー数が過剰になっていたことや制作したアート企画がまつりの実態・ニーズに沿えていないこともわかった。来年度はこれらの反省点を改善しより志方町の方々に寄り添った活動を続けていきたい。

2.2 姫路城マラソン 2026 横断幕制作

姫路城マラソン(正式名称:「世界遺産姫路城マラソン」)は2026年2月22日に開催される姫路市及び兵庫陸上競技協会主催のマラソンイベントである。姫路城前の大手前通りをスタートし、姫路城三の丸広場をゴールとしたコースで、2025年は約9000人のランナーが参加する。それに先立ち、当団体ではマラソンに参加するランナーを応援するため、縦1m×横5mの巨大な横断幕を制作し、姫路市に提供した。

当団体の参加は今年で3年目にあたる。今年度は新たに新入生が9名加入したことにより昨年度とはまた新たな視点から、我々は横断幕のスローガンを“Run with passion”と掲げ制作を行った(写真4)。スローガンを日本語以外で表現することは初めての試みであった。構図は水色を基調とした背景に疾走感のある風のモチーフと画面右側には姫路城のシルエットを加えた。そして中央には大胆に情熱に満ちたオレンジ色のスニーカーを配置した構図となっている。

これほど大きな作品を制作する機会はめったになく、容易ではなかった。そのため学年の垣根を超え各々の美術スキルを適材適所で活かすことができる機会となった。そしてこのイベントでは地域イベントにも還元されている。今回制作した横断幕がマラソンを走り己と戦うランナーの目に留まり励みとなることを祈るばかりである。



写真4 姫路城マラソン 2026 制作した横断幕

3. 活動を通して学んだこと

活動を通し、地域とつながるきっかけづくりにアートあるいは個人の得意分野が十分に活かすことができる学んだ。当団体は今年度で発足して2年目となる。まだまだ学生団体としては駆け出しの団体で入部動機は様々だと察する。私は入学当初は地域との連携活動に特別なスキルや動機が必要ではないのだろうかと考えていた。特に、当団体の所属メンバーは必ずしもコミュニケーションに自信があるメンバーではなかった。しかし実際に活動を通し、私たちの団体のできる分野(アート制作)は地域の皆さんに暖かく迎え入れてくださり、今年度も無事活動を終えることができた。

環境人間学部には“地域”に関連した講義が多く、地域に関心を持つ学生も少なくない。その中には“地域と連携した活動がしたいがどのように自分が役にたてるのか”と悩む学生がいるかもしれない。そのような学生がいればこう伝えたい。あなたの趣味や特技が十分地域とつながるきっかけづくりになりうると。特別なスキルはなくとも地域に寄り添った熱意があれば美術であろうとどのような分野でも地域の役に立てる可能性があることが活動を通して学んだことである。

4. 今後の展望

今年度の取り組みでは、しかた広尾東コスモスまつりにおいて、昨年度よりも多くの企画を実施した一方で我々の提供するアート企画の一部が地域の実態的なニーズに寄り添えていないという反省があった。来年度は実施する企画を地域との話し合いをより密にし、精査することで解決していきたい。

そして来年度では志方町のコスモスまつりだけではなく様々な地域イベントに参加していきたい。地域イベントの参加者と共にアートを制作する参加型企画は短い準備期間で高い満足度が臨めた。また地域の方との交流が盛んに行えるというメリットもある。そのため来年度はそのようなアート企画を他の地域でも実施していきたい。

地域連携 café ルリアン

岩本咲希（環境人間学部3年）

キーワード：地域、学生間交流、場づくり

1. 団体概要

地域連携 café ルリアンは、2024 年度に発足された学生団体である。ボランティアや地域連携活動に興味を持っている学生とボランティア団体や地域の方とをつなげることを目的として活動している。また、学生と地域の方、学生同士が交流するための場づくり・企画を行う。現在のメンバーは、3 回生 3 名である。

2. 活動内容

2025 年度の活動は、春フェスの開催、工大祭の出店、の 2 つである。

5 月 8 日に実施した春フェスは、「新入生の歓迎・学年をこえた学生同士の交流の促進、交流の機会を通して団体下の理解が深まり新メンバーの獲得に努める」ことを目的として、エコヒューマン・地域連携センターに所属する計 16 団体が参加した。開催にあたって、写真 1 のポスターを作成し、チラシの設置や 1 年生の必修講義「環境と人間」にて配布するなど広報活動を行った。地域連携 café ルリアンでは、レモネードとかき氷を販売し、ルリアンの活

動を多くの新入生に知っていただけた機会となった。

10 月 31 日~11 月 2 日の 3 日間にわたって開催された工大祭に出店し、ドリンク(コーヒー、レモネード、チャイティー、コーンスープ)、お菓子、編み物雑貨の販売を行った。ドリンクの提供時に、ご注文いただいたお客様とお話をする中で地域連携 café ルリアンのことを知っていただける機会になった。近くにお住まいの方から大阪や京都など遠くからお越しの方まで交流を深めることができた。工大祭を通じて学生と地域の人たちが自然に交流できる場をつくることができた。

また、2024 年度に実施した「地域プレイヤープレゼン大会」において、活動に興味を持った学生と地域プレイヤーのマッチングが図れた。2025 年度は、地域プレイヤーが運営する組織（就労支援 B 型事業所）のインターン生として受け入れていただき、1 年間活動に参加させていただいた。主に、就労支援 B 型事業所の利用者さんへ支援を行った。具体的には、ゴム製品のバリ（成形課程で発生する残留物）をとる作業や紙リサイクル機器にて紙のリサイクル作業、除草作業に参加し、実践的に福祉について学習した。利用者の自立とは何かといった疑問を持つようになり、支援者と被支援者の関係性や意志決定支援に関心をもち、卒業論文のテーマにつながる学びを得ることができた。ここでもまた、学生と



写真 1 春フェスで使用したポスター



写真 2 工大祭出店の様子

地域との繋がりを深め、地域に貢献することもできた。

3. 今後の展望

2025年度は多くの方に地域連携 café ルリアンの活動を知っていただく機会をもったが、新規メンバーの獲得には至らなかった。また、ルリアンとしてのイベントの実施にも至らなかった。これらを踏まえて、2026年度は「1年を通したイベントの実施と活動継続に向けて新規メンバーを獲得する」ことを目標とする。

2024年度に実施した「地域プレイヤープレゼン大会」では学生と地域プレイヤーのマッチングが実現し、2025年度も継続して活動に参加するという大きな実績を得られたことから、2026年度は第2回地域プレイヤープレゼン大会の実施を目指す。

目的は、学生と地域の連携による地域課題解決を目指し、学生の『やりたい』と地域の悩みのマッチングを図ることであり、前回の課題点である告知の不足・EHCの他の団体への呼びかけの不足を改善する。学生の声をすくいあげるべく、5～7月にEHC所属団体が集まるイベントを2回程実施するとともに、EHCに関わる先生方にお話を伺いたい。その後、夏休み期間を利用してプレゼン大会に協力していただける地域プレイヤー探しを行い、10月上旬に「地域プレイヤープレゼン大会 vol.2」を実施したい。

現在、団体に所属するメンバーは3回生3名のみであり、来年度には4回生になるので現メンバーだけでは今後の活動継続が難しくなる。また、4回生は通学する回数が減ってしまうため、イベント実施に向けてより具体的な活動計画を練る必要がある。来年度は、具体的な活動計画の策定と新メンバー獲得したい。

山採りみらいグループ

山田善一（兵庫県立大学環境人間学部）

キーワード：里山活用, 山採り, コミュニティビジネス

1. プロジェクトの概要

1.1 背景

かつて里山は、農村でのライフスタイルに欠かせないものであったが、今日の暮らしにおいては、次第に利用されなくなり、多くの里山では荒廃が進んでいる。このことにより、倒木の危険のある樹木の増加や、本来里山が持つ貯水機能や土砂流出抑止機能の低下など、さまざまな問題が生じているが、管理活用まで手が行き届かない状況にある。

私たちが活動する広尾東でも同じ状況にある。広尾東は、加古川市北部に位置する総戸数 82 戸の農業集落である。広尾東にも里山が存在するが、管理が放棄されており、地域住民だけでなく、里山の所有者も里山に対する関心が薄い状況にある。

1.2 目的

里山管理は全国的な課題であり、各地でさまざまな取り組みが進められているものの、播磨の里山に適した管理・活用方法は十分に定着していない。その背景には、里山資源の活用には手間がかかり、管理によって利益を得にくいという構造的な問題がある。

そのため、里山資源に価値を付けるという経済的な視点から、現代にあった里山資源の管理・活用の形を見出し、里山の持続的な管理に繋げることを目的としている。また、私たちの活動を通じて、里山の持続的な管理に寄与するとともに、地域全体における里山管理のロールモデルとなることを目指す。

2. 活動内容

2.1 山採り活動について

「山採り」とは、里山に自生している樹木や幼木、下草を掘り取り、別の場所に活着させることを意味する。月に 1 度程度の頻度で、広尾東の里山で山採り活動をしている（写真 1）。山採りした木々は、根の部分に麻布や麻紐にて包み、ストックヤードに



写真 1 山採りした木々



写真 2 スtockヤードへの植え替え作業

保管する（写真 2）。保管した木は樹種や採取日、サイズと合わせてデータベースに保管し、そのデータを庭師の方と共有していて、提携している庭師の方が、このデータの中から必要な木を購入するというシステムになっている。

この山採り活動を継続していくことで、活動資金の確保に繋げていけたらと考えている。

2.2 大木の伐採について

山採りみらいプロジェクトでは通常の活動に加え、様々な計画を同時進行している。その中で、今年度行った活動のひとつが倒木の危険性がある木の伐採である。

大木伐採後の土地では、子どもの遊び場や憩いの

場を作り,人と里山との関わり場の場を創出していくことを計画している。具体的には,場づくりのなかで,伐採した木材を里山整備の一環に活用する他,ブランコやベンチ等も作成し,里山に設置する。

また,伐採によって得られた木材を利用し,手道具で小物や家具を作る体験イベントを開催する。柔軟に加工しやすい生木を使うこと,手軽に木工を楽しめることに加えて,自然とのつながりを深く感じられる。

そして,志方東の地元住民への薪やその他の木材の需要調査を行い,整備の中で出た木材を活用してもらう場を設ける。他にも地域外の家具職人の方に木材を提供する等,伐採するだけでなく,実際に活用まで行うことで,本来あった里山の活用に近い形での,里山資源の地域内循環を促進する。

2.3 外部資金の確保

地域住民の倒木を危険視する声や,さらなる里山資源の可能性を探るべく,大木の伐採に着手するため,外部資金の確保に挑戦した。具体的には「加古川市協働のまちづくり推進事業」に申請を行った。

申請にあたっては,数カ月をわたって加古川市の市民活動推進課の方と連絡をとり,最終的にはプレゼンテーションを行った(写真3)。無事に採択されたことは,山採りの活動の意義を再認識する機会となった。

2.4 広報活動について

より多くの人に里山に関わってもらいたいと考えているため,様々な方法で広報活動を行っている。今年度はSNSを活用したインターネット上での広報や,「環境人間学フォーラム」(2025年12月4日)での発表を通し,学内に向けてPRした(写真4)。



写真3 「加古川市協働のまちづくり推進事業」プレゼンテーションの様子

3. これからの活動について

これからの活動では,山採りの活動を広めるための広報活動に力を入れていく。

広報活動の一環として,広尾東にあるカシオふれあい館にて,山採りで得た木を植樹し,毎年行われる広尾東コスモス祭りで地域内外の人に見てもらおう試みを行っている。こちらは身近に里山がある人達に向けてより里山の価値を知ってもらうことが目的である。

今年度案が出た新たな広報活動として,山採り活動で得た植物やグリーンウッドワークで得た飾りなどを環境人間学キャンパス内で販売することを計画している。同時にパンフレットなどを配布し,さらに多くの学生に山採りの活動を学生に知ってもらうことで,里山の現状を知ってもらうほか,山採りみらいプロジェクトのメンバーを増やすことを目的としている。

山採りみらいプロジェクトでは地域の里山を活用するこれらの活動を持続的に進めていくことを目的としているため,この活動の有用性を知ってもらい,さらにたくさんの人と地域の里山活動を行いたいと考えている。

山採りみらいプロジェクト

1回生:秋庭優陽 小坂凌生 2回生:山田香一
3回生:松本直也 4回生:大塚希美 小坂桜花 高杉優里

山採りの現状

- ・里山に関わる人口の減少
- ・里山資源利用の縮小

↓
多くの里山で荒廃が進行

山採りの流れ

①里山植物の採集・里山整備
開催フィールド: 加古川市志方町広尾東の里山

採取植物: アオダモ・ツツジ・ツゲ など

採取後の里山の整備も取り含む
 ②ストックヤードでの保管
ストックヤード =採取植物の保管場所
 兵庫県立大学環境人間学キャンパス
 ・その他数カ所の庭や畑

③販売・植樹
販売: 産直関係の方と取引 植木として利用
植樹: 山採り植物を使った庭の植樹を自分たちで行う

目的

里山の植物を様々な形で暮らしの中に取り入れてもらえるよう活動して行くことで,里山と暮らしをつなげ,里山の保全に役立てる

※山採りとは
 山に自生している自然木を採取し,他の場所に活着させること

活動内容

2022年度~2024年度の実績

- 植樹実績** 山採り植物を活用し,庭や空きスペースに緑空間を施工
- 販売実績** 採集した植物を10以上活用 採集の一般家庭に里山を感じられる緑空間を製作

本年度の事業

- ①大木伐採事業
 - ・危険木を計画的に伐採
 - ・伐採後の木を遊び場のブランコ・ベンチづくりや薪として地域で活用
 - 里山資源の循環
- ②昨年度までの山採り事業を継続
- ・月1回の山採り活動と植物販売
- 里山の資金確保と市民の関心の保全への関わり
- 仕組づくりの継続**
- ・里山の場での里山植物を用いた庭づくり
- ③情報発信
- ・図鑑・パンフレット配布, SNS発信 → 里山の魅力を広く伝える

今後の展望

- 財源の確保** 山採り事業の継続 収益を管理や増につりに活用
- 里山整備** 大木伐採事業の継続 伐採後の木材の活用

暮らしと交わり,持続可能な里山づくりの仕組みをつくる

場の活用 子どもの遊び場や憩いの場づくり
 里山を知る「グリーンウッドワークツアー」の開催

連携先
 西田隆三
 西山雄太(1) (ピシグソイル研究所)
 ためみらい研究所

この活動は, 兵庫県立大学助成金 協働のまちづくり推進事業(加古川市)の助成金により運営しています。

写真4 環境人間学フォーラムで掲載したポスター

広尾東ファンクラブ活動報告書

山本春香（社会デザイン系3回生）

キーワード：農村，伝統行事，地域活性化

1. 団体概要

広尾東ファンクラブは、愛する加古川市広尾東地区の農村を舞台に「地域活性化」とは何かを考え、地域が抱える課題解決に向けて、実践活動を行う学生団体である。2024年12月にメンバー3名で発足した。その後広尾東の地域の方々や自治会、志方東営農組合との連携のもと活動を進める。2025年6月には兵庫青少年本部活動支援部の「令和7年度SDGsHYOGO 青年チャレンジ事業」に参加し、頂いた助成金や兵庫県立内外の学生団体との交流から得た知見を生かしながら活動を躍進している。2026年1月現在13名のメンバーに加え、よりワクワクする広尾東づくりを目的に活動中である。

2. 2025年度の活動テーマと実績

2.1 活動テーマ

広尾東地区も現代の多くの農村が抱えるように、高齢化や過疎化が進んでいる。その現状で、地域内外の交流の減少が地域課題の一つに挙げられる。2025年度はこの課題に解決すべく、交流が生まれやすいイベントの場である地域の「祭り」に焦点を当て活動に取り組んできた。広尾東私たちが関わったのは4月の菜の花祭り、8月の夏祭り、10月のコスモス祭りの3つの祭りである（写真1，2）。

私たちは、まず地域の方を対象に「お祭り」に対するヒアリングを行った。今まで各構成メンバーが築いてきたコミュニケーション能力を活かし、祭りに対する思いや悩みを言語化してもらった。高齢化が進む中で祭りに運営に負担を感じていること、毎年同じことの繰り返しでマンネリ化を感じていること、地域内外の交流の場としてより対話が生まれる場にしたい、などの悩みや課題が聞かれた。

それと同時に、地域の魅力を発信してきた誇り、他出子弟（広尾東地区から離れて暮らしているご家族の方）が帰省し、地域に目を向けてくれる機会として大切にしていきたい。協力して祭りを運

営することで、地域内の一体感を高めてきたといった祭りへの思いも受け取ることができた。

そこで私たち学生が、これらの祭りをより持続的で画期的なものにするためには何ができるのかを検討し、地域の役員会や婦人会、営農組合と話し合いながら学生企画として新たなアプローチを試みた。

2.2 活動の実績

ここからは3つの大きな取り組みを紹介する

1つ目は、夏祭りにおける学生企画である。具体的には「盆踊りの練習会（写真3）」「大声大会（写真4）」「綿あめクイズ」を実施した。「綿あめクイズ」では、他出子弟の方々、他地域から祭りに訪れた方々を対象に、より広尾東について知ってもらうための地域クイズを作成した。「広尾東地



写真1 コスモス祭りの様子



写真2 夏祭りの様子



写真3 盆踊りの練習会の様子



写真5 地域住民と学生の交流の様子



写真4 大声大会の様子

区にはいくつのため池があるか?」「広尾東の特産米や特産はちみつの名前は何か?」と地域の自然や農業をテーマにクイズを実施。地域の方々に聞き込み可能という形で、自然に交流と地域理解を深められる流れをつくった。夏祭り、コスモス祭りともにクイズを行い、150名ほどの方に回答してもらうことができた。

2つ目は公民館での宿泊である。公民館の多様な活用方法を模索すること、一晚仲間と過ごすことで学生自身が地域に愛着を持つこと、祭り翌日早朝からの片付け作業を行うことを目的に15名の学生で公民館に宿泊した。

3つ目は写真展の実施である。一年間の活動、学生と地域住民との交流の写真を地域の憩いの場に展示した。地域内外の交流の促進を地域の方々に実感していただくことができた。写真の前で生まれた会話を来年の活動の発展につなげたい。

3. 活動を通して学んだこと

活動を通して学んだことは、交流づくりの難しさと達成感である。

今回力を入れたお祭りの学生企画では意図的に人の交流を生み出す意図があった。しかし、事前の告知不足で参加者が集まらない。クイズは対象としている年齢には難しすぎる。“学生の視点で“とうたっているのに、新規性のない提案で地域住民に却下されるなどたくさんのうまくいかない場面があった。ターゲットの行動を想定したうえで、企画を立て、遂行していくことの難しさを感じた。

一方で、私たち学生の寄与によって、より素晴らしい盛り上がりを感じる祭りになったことも実感できてとてもやりがいを感じた(写真5)。成功失敗に関係なく、私たちが広尾東を思い、準備してきたことを受け止めて、評価し、感謝してくれた地域の方々の顔を見た時に一番の高揚感を感じた。祭りの最後にたくさんの住民の方々と他出子弟の方々と仲間の学生の笑顔に囲まれたあの時間は私にとって忘れがたい宝物である。

4. 今後の展望

ここまで、「祭り、祭り」と言ってきたが、お祭りは広尾東の方々が過ごす日々のごく一部に過ぎない。また、そのお祭りは地域住民の方々の日常の延長線上にあるものである。そこでお祭りというイベントごとをきっかけに、もっと地域の方々の日常と普段の農業に近づいていきたいと考えている。

例えば、菜の花祭りやコスモス祭りの前後の種まきや祭りに肥料として花を畑にすき込んで行く場面、夏祭り前後の他出子弟の方々はどのように過ごされているのかなどに少しずつ知っていくことで、より本質的な過疎化する広尾東が抱える課題へのアプローチに近づいていきたい。

05 リサーチペーパー

1. 藤原颯太・北梨緒乃・永井結季子・山鳥実咲・太田尚孝 …………… 62
「ループリックを用いた兵庫県内の将来都市構造図の評価」
2. 久保田薫葉・池本和奏・伊澤友美・樽角咲希・太田尚孝 …………… 68
「学生主体のPBLと教科書の利活用
—2025年度のイーグレひめじでの活動を通して—」
3. 柴崎浩平・佐々木太一 …………… 76
「ため池の利活用に向けた計画づくり
—地域と学生の連携プログラム「ため池アクション」を通して—」

ルーブリックを用いた兵庫県内の将来都市構造図の評価

藤原颯太・北梨緒乃・永井結季子・山鳥実咲・太田尚孝（都市計画研究室）

キーワード：都市計画，兵庫県，将来都市構造図，都市計画マスタープラン，ルーブリック

1. 調査の背景・目的

都市計画研究室(太田ゼミ)では学部3，4年生が参加し，兵庫県立大学と包括連携協定を締結する高砂市と都市計画の計画演習を毎年行っている。本稿は，2025年度のテーマである「高砂市の特性を踏まえた将来都市構造図の作成と先導的プロジェクトの検討」に関する基盤的調査報告である。

本稿の調査対象である将来都市構造図とは、『都市計画運用指針』¹⁾では，「市町村の住民に基本方針の内容を視覚的に理解が容易なもので周知することが望ましく，このために，例えば，総括図に加え，地域別の整備構想に対応する図面を地域別に作成し，これに土地利用，施設，事業等の各構想について，おおむねの配置又は規模を極力図示すること，必要に応じて，土地利用，交通，緑，環境の保全等特定の分野について編集した図面を作成すること，これらについて適宜模型，イメージ図等によって補うこと等が望ましい」とされている。また同書では将来都市構造図の時間軸や対象期間について明確な規定はないが，市町村マスタープランとの整合性を踏まえ，概ね20年程度を対象期間とすることが妥当とされている²⁾。加えて，実務では一般に，都市活動を支える各機能が集積した拠点（拠点/核），拠点間を結ぶ都市の交通や緑地等の主要ネットワーク（軸），都市全体に関わる土地利用（面/ゾーン）の3要素から構成され，政策的意図が含まれる場合も多い（図1）。

このように将来都市構造図は，都市計画の基本方針や将来像を，市民や利害関係者に対して視覚的に分かりやすく伝える役割を担う重要なツールといえる。しかしながら，立地適正化計画と都市計画マスタープランの計画内容の関係性²⁾や広域的視点からみた市町村マスタープラン間の不整合さに関する研究³⁾はあるものの，最も基本的な将来都市構造図のあり方に関する調査は乏しい。そのため，市民にも理解されるためには，どのような将来都市構造図が望ましいかの知見が十分になく，策定側が作図の際に気を付けるポイントがわ

からないままである。

そこで，本稿では，都市計画を学ぶ大学生が既往文献レビューや高砂市へのヒアリング調査等を前提に，評価軸を設定した上で，兵庫県内の自治体の将来都市構造図を評価し，市民目線でより良い将来都市構造図のあり方を提案することを目的とする。



図1. 将来都市構造図の一例（滋賀県草津市）
（出典：草津市⁴⁾）

2. 調査スケジュール・方法

調査期間は2025年5月下旬から8月中旬であった。都市計画を講義や演習等を通して一定程度学んでいる4年生4名が主体的に関わった。5月下旬～6月にかけては，将来都市構造図そのものについて理解を深めるため，前述の都市計画運用指

針や『都市計画マニュアル』等を活用した文献調査や、高砂市都市政策課へのヒアリング調査から将来都市構造図の役割や位置づけについて学習した。7月～8月中旬にかけては事例分析として、兵庫県内の各自治体が作成している将来都市構造図の評価を教育分野で頻繁に用いられるルーブリックによって行った。この際に、調査を実施する前提として、将来都市構造図のあるべき姿として、「都市づくりの方向性を市民・行政・民間事業者が共有し、計画や施策を総合的かつ継続的に進めるための戦略的・対話的なツール」と設定し、事例調査や将来都市構造図の作成にむけた考察を行った。ルーブリックは各種文献を参考にしながら独自の評価指標を作成し（表1）、将来都市構造図の図としての役割を果たすために特に重要と考えられる視認性及び充実性の高さを評価した。これらを経て、最後に今後の将来都市構造図のあり方を考察した。

3. 将来都市構造図が果たす役割・位置づけ

将来都市構造図が実務でどのように位置づけられ、どのような役割を果たしているのかを明らかにするため、文献調査に加え、2025年8月18日に高砂市都市政策課にヒアリング調査を実施した。

まず将来都市構造図を作成する意義について確認したところ、「市民に対して市の考えや都市の構造を分かりやすく伝えるためのツールとして作成している」とのことだった。都市計画マスタープランは専門用語が多く、かつ文章中心で構成されているため、一般の市民にとっては内容把握のハードルが大きい側面があることが考えられる。そのため図を通じて都市構造を視覚的に示す将来都市構造図は、分かりやすく都市の情報を伝達するツールとして機能することが期待されていることが分かった。

次に将来都市構造図の計画上の位置づけについて伺った。その結果、将来都市構造図単体として制度的な位置づけが明確に定められているわけでは

表1. 事例調査の分析に用いた評価表（出典：筆者作成）

| 評価分野 | 評価軸 | 評価点数 | | | | |
|---------|--|--|--|--|--|---|
| | | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 見やすさ・体裁 | 将来都市構造図が都市計画MPに記載されているか | 主要資料として掲載され、活用方針や位置づけ等まで明記されている | 主要資料として掲載されているが、本文での記載内容は限定的 | 参考資料として掲載されているが、本文では言及されていない | 図としては未掲載だが、文章でやや言及されている | 記載が一切ない |
| | 縮尺や方位、凡例などの基本情報が記載されているか | 縮尺・方位・凡例等すべてが記載されており、誰でも理解しやすい図となっている | ほとんどの基本情報が記載されているが、一部抜けがある | 一部の情報のみが記載されている(方位のみなど) | 基本情報が不足しており、図の意味が理解しにくい | 一切記載がなく、理解不能 |
| | 将来都市構造図の時間軸が分かるか(今の状況を示しているのか、将来のあるべき姿を提示しているのか) | 将来像と現況の違いが分かりやすく記述されており、図面と文脈両方から時点が読み取れる | 将来像と現況の違いが記述されており、図面と文脈いずれから時点が読み取れる | 時点がある程度読み取れるが、図に対する説明が不十分である | 現況との違いが不明瞭で、どの時点の構造か曖昧 | 時間軸に関する記述はなく、現在か将来かも不明 |
| | 図としての解像度が高いか(色使い等) | 細部まで明確で非常に見やすく、全体的に理解しやすい図となっている | 色分けや記号を使いこなし、おむね理解しやすい図となっている | 一部読み取りにくい要素もあるが、ある程度明確な図となっている | 色や記号の使い方に統一感がなく、やや読み取りにくい | 解像度が低く、内容を把握しづらい |
| | 社会問題(少子高齢化社会やSDGs等)に関する対応や解決の方向性を文章として記述しているか | 複数の社会課題に関わる対応方針等が明確に記述されている | 1～2の社会課題に対して明確に対応方針等が記述されている | 社会課題に言及はあるが、抽象的で対応方針が読み取りにくい | 単語として触れているだけで、対応の方向性は示されていない | 社会課題への言及が一切ない |
| その他 | 将来都市構造図の可視性 | 将来の都市像が非常に明確に視覚化され、誰が見ても見やすい | 将来の都市像がおおむね明確で、視覚的に理解しやすい | 将来像はある程度読み取れるが、部分的に不明瞭な箇所がある | 将来像があいまいで、読み取りにくい箇所が多い | 将来像がほとんど視覚化されておらず、意図が伝わらない |
| | オリジナリティがあるか | 非常に独創的で、他にはない新しい視点や工夫が取り入れられている | 独自性のある視点や工夫が明確に見られる | 一部に独自性が見られるが、全体としては一般的である | 独自性はほとんど見られず、既存のアイデアの寄せ集めである | 独自性が全くなく、他の模倣に終始している |
| | 市のコンセプトとの整合性 | 市が設定した将来を見据えたコンセプトを十分に理解し、その上で作成した図に十分に反映できている | 市が設定した将来を見据えたコンセプトを理解し、その上で作成した図に反映できている | 市が設定した将来を見据えたコンセプトを確認し、その上で作成した図に反映できている | 市が設定した将来を見据えたコンセプトを確認したものの、うまく反映されていない図を作成している | 市が設定した将来を見据えたコンセプトを確認せず、全く考慮していない図を作成している |

ないものの、その基となる高砂市都市計画マスタープランは①立地適正化計画との統合の検討、②ひょうご都市計画基本方針や高砂市総合計画、地域防災計画等との整合、③姫路市や加古川市等の近隣市町の都市計画との連携といった観点から、上位計画及び関連計画と空間的・制度的な連携がとられていることが明らかとなった。

最後に将来都市構造図をどのような場面で活用しているのか、活用を想定しているのかについて伺った。その結果、「現状は市民に対して都市計画の内容を説明する際に使用している」との回答を得た。

以上から、将来都市構造図は、市民と行政の間で都市計画の方向性を共有するための媒介役として機能しており、都市計画を分かりやすく伝える「橋渡し」としての役割を果たしていると理解できた。

4. 兵庫県内の将来都市構造図の事例調査

4.1 事例調査の概要

事例調査は、①将来都市構造図が都市計画のツールとして果たしている役割を理解すること、そして②筆者らが考える「将来都市構造図のあるべき姿」の現状の達成度合いを評価すること、を目的とした。具体的には、兵庫県内で将来都市構造図を作成している自治体を抽出し、ループリックによる評価を行った。この際に、複数自治体の将来都市構造図を、同一の視点から定量的に評価する必要があると考え、ループリックを用いた評価手法を採用した。

ループリックの評価項目は①図としての評価、②その他の評価の2つに大別され、評価点数は5段階方式とした。①図としての評価については、見やすさや情報の整理具合、体裁等の観点から学生独自の評価項目を作成した。②その他の評価については、国土交通省『都市構造の評価に関するハンドブック』⁵⁾を参照し、評価項目を設定した。

なお調査にあたっては調査担当学生4名が将来都市構造図と都市計画マスタープランの記載内容をもとにそれぞれ評価を行い、各項目の平均点を算出した上で、全体の平均値を用いて自治体ごとの将来都市構造図を定量的に比較・評価した。

4.2 調査の結果

表2に各自治体の評価結果を示す。兵庫県内では、全41の自治体のうち、養父市、稲美町、市川町、神河町、太子町、佐用町、香美町、新温泉町を除いた33自治体に本稿による分析が可能な将来都

表2. 各自治体の評価結果（出典：調査結果）

| 順位 | 自治体名 | 点数 |
|----|-------|------|
| 1 | 神戸市 | 3.88 |
| 2 | 高砂市 | 3.84 |
| 3 | 芦屋市 | 3.50 |
| 4 | 加古川市 | 3.41 |
| 5 | 加西市 | 3.41 |
| 6 | 赤穂市 | 3.31 |
| 7 | 明石市 | 3.25 |
| 8 | 姫路市 | 3.22 |
| 9 | 淡路市 | 3.19 |
| 10 | 洲本市 | 3.16 |
| 11 | 南あわじ市 | 3.16 |
| 12 | 尼崎市 | 3.06 |
| 13 | 三田市 | 3.03 |
| 14 | 宝塚市 | 2.97 |
| 15 | 朝来市 | 2.94 |
| 16 | 加東市 | 2.91 |
| 17 | 西宮市 | 2.81 |
| 18 | 播磨町 | 2.81 |
| 19 | 伊丹市 | 2.78 |
| 20 | 西脇市 | 2.78 |
| 21 | 猪名川町 | 2.78 |
| 22 | 多可町 | 2.78 |
| 23 | 丹波篠山市 | 2.75 |
| 24 | たつの市 | 2.69 |
| 25 | 上郡町 | 2.69 |
| 26 | 川西市 | 2.66 |
| 27 | 丹波市 | 2.66 |
| 28 | 福崎町 | 2.66 |
| 29 | 三木市 | 2.53 |
| 30 | 小野市 | 2.47 |
| 31 | 宍粟市 | 2.34 |
| 32 | 豊岡市 | 2.25 |
| 33 | 相生市 | 1.94 |

市構造図が作成されていることが確認された。

ループリックによる評価の結果、上位3自治体は神戸市(3.88点)、高砂市(3.84点)、芦屋市(3.50点)となり、下位3自治体は相生市(1.94点)、豊岡市(2.25点)、宍粟市(2.34点)であった。なお全体の平均点は2.93点であった。

上位に評価された自治体では、将来都市構造図の時間軸が明確に示されている点や情報量の確保と視認性への配慮を両立している点が共通して確認

された。次章では、特に高い評価を得た神戸市及び高砂市の将来都市構造図を対象として、その特徴と高評価の理由を述べる。

5. 事例調査上位2自治体の将来都市構造図

5.1 神戸市

神戸市⁶⁾では都市づくりの基本理念として「世界とふれあう市民創造都市」を掲げ、めざす都市空間として「災害に強く安全で、誰もが暮らしやすい都市空間」、「活力を創造する都市空間」、「環境と共生する都市空間」、「デザイン視点で磨かれた魅力のある都市空間」の実現を目指している。また、これらの都市空間を具体化するための都市構造の考え方として、①都市機能がコンパクトにまとまった都市構造、②神戸市の重要な産業を支える都市構造、③神戸市の魅力を創造するエリアや拠点を戦略的に配慮した都市構造、④海や山などの豊かな自然環境と共生した都市構造、⑤陸・海・空の総合的な交通ネットワークが効率よく機能する都市構造、の形成が位置付けられている。

神戸市の将来都市構造図を図2に示す。同図は、

拠点14種類、軸9種類、面6種類で構成されており、他自治体と比較して構成要素が多岐にわたる点が特徴的である。時間軸については、神戸市基本計画の「神戸づくりの指針」との整合性を加味し、2021年から2025年までの5年間を対象期間として明示している。

調査結果の項目別の点数を表3に示す。その結果、「図としての解像度が高いか」、「将来都市構造図の可視性」、「市のコンセプトとの整合性」の3項目において、いずれも4.25点と高い点数となった。

「図としての解像度が高いか」については、図そのものの画素解像度が比較的高いことに加え、拠点・軸・面の凡例が多いにも関わらず、色彩の重複が極力抑えられている点が高く評価された。「将来都市構造図の可視性」に関しては、三宮周辺など、特に情報量が集中する中心市街地は別図にて補足的に示す構成となっており、より詳細に将来的な都市構造を示している点が評価された。「市のコンセプトとの整合性」については「世界とふれあう市民創造都市」という基本理念や「産業を支える都市構造」、「コンパクトな都市構造」、「自然と共生する都市構造」といった都市構造の考え方が、拠点・軸・

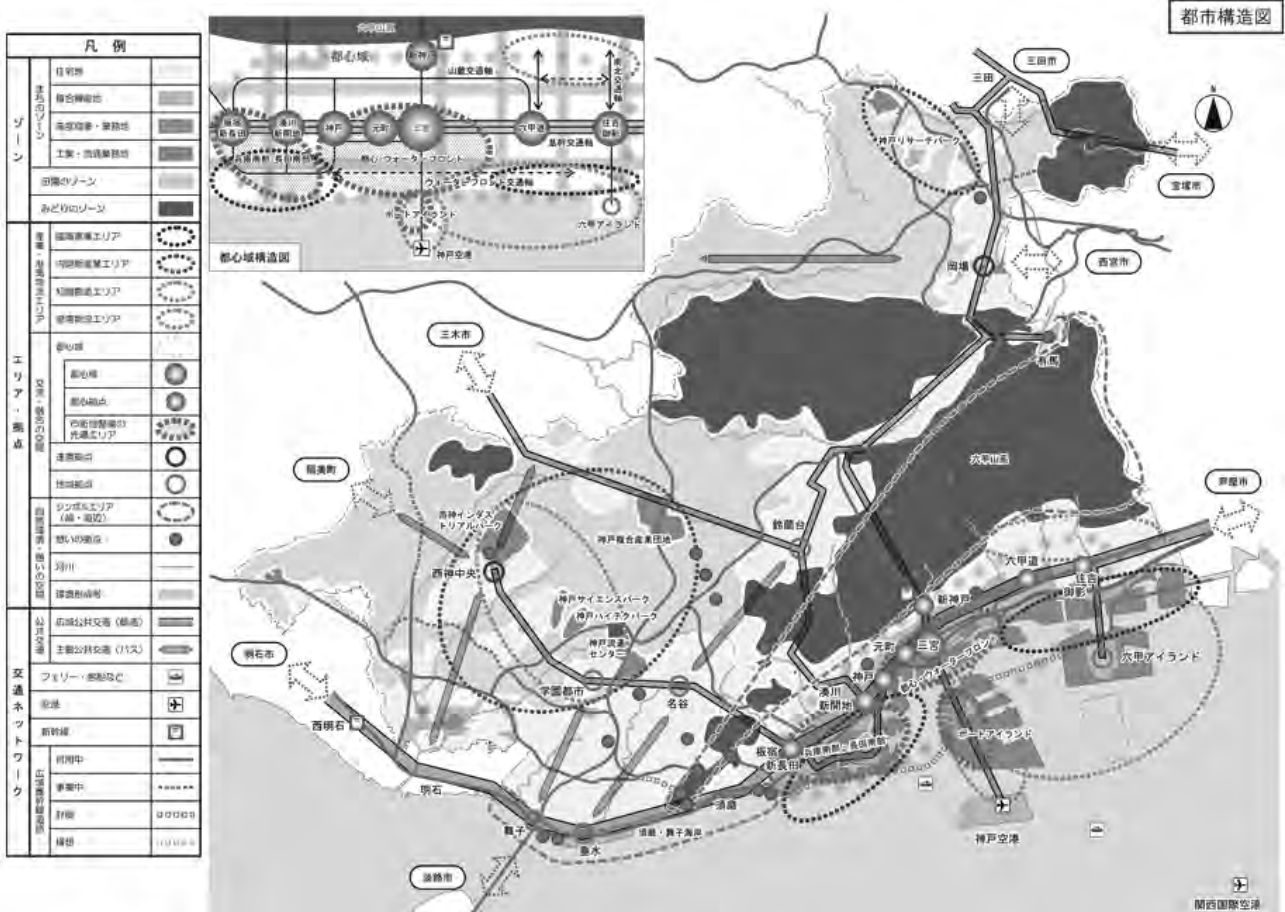


図2. 神戸市の将来都市構造図 (出典：神戸市⁷⁾)

面に具体的に表現されている点が評価された。特に、三宮を核とした都市機能の集積や、臨海部・内陸部それぞれの産業特性を踏まえた拠点配置は、市の考えと空間構造が対応関係をもって示されており、抽象的な将来像を空間に結びつけることでより具体化しているといえる。

表 3. 神戸市の項目別の点数

| 評価項目 | 点数 |
|--|-------------|
| 将来都市構造図が都市計画 MP に記載されているか | 4 |
| 縮尺や方位、凡例などの基本情報が記載されているか | 4 |
| 将来都市構造図の時間軸が分かるか(今の状況を示しているのか、将来のあるべき姿を提示しているのか) | 3.5 |
| 図としての解像度が高いか(色使い等) | 4.25 |
| 社会問題(少子高齢化社会や SDGs 等)に関する対応や解決の方向性を文章として記述しているか | 2.75 |
| 将来都市構造図の可視性 | 4.25 |
| オリジナリティがあるか | 4 |
| 市のコンセプトとの整合性 | 4.25 |
| 全体平均 | 3.88 |

(出典：調査結果)

5.2 高砂市

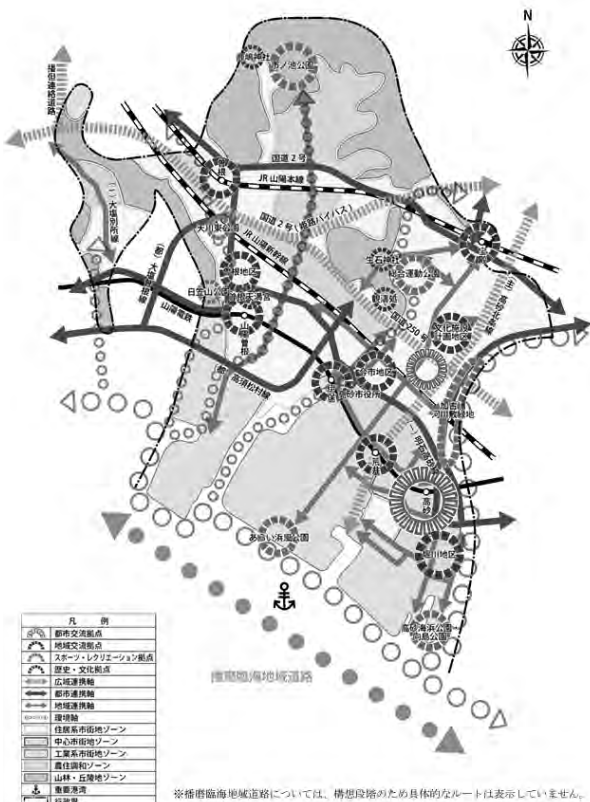


図 3. 高砂市の将来都市構造図 (出典：高砂市⁷⁾)

高砂市⁷⁾では都市づくりの理念として「人にやさしく快適に暮らせるまち」、「地域資源を活かした活力と潤いのあるまち」、「みんなで創る魅力あるまち」を掲げている。これらの理念に基づき、都市づくりのテーマとして「歴史・文化が息づく潤いのある街 高砂」を設定している。また将来の都市構造の方向性として①都市交流拠点の整備充実、②地域の拠点性の確保・強化、③地域間の連携強化、の3点を位置づけている。これらを踏まえ、現在の土地利用や道路交通網、公園・レクリエーション施設の配置状況等をもとに、各拠点間が公共交通等によって結ばれた集約型都市構造の実現を目指している。

高砂市の将来都市構造図を図3に示す。同図は拠点4種類、軸4種類、面5種類によって構成されている。なお時間軸については、都市計画マスタープラン上で2011年から2030年までのおおむね20年間を対象期間として明示している。

調査結果の項目別の点数を表4に示す。その結果、「将来都市構造図が都市計画 MP に記載されているか」、「社会問題(少子高齢化社会や SDGs 等)に関する対応や解決の方向性を文章として記述しているか」、「市のコンセプトとの整合性」の3項目において、いずれも高い評価を得た。

表 4. 高砂市の項目別の点数

| 評価項目 | 点数 |
|--|-------------|
| 将来都市構造図が都市計画 MP に記載されているか | 4.5 |
| 縮尺や方位、凡例などの基本情報が記載されているか | 4 |
| 将来都市構造図の時間軸が分かるか(今の状況を示しているのか、将来のあるべき姿を提示しているのか) | 3 |
| 図としての解像度が高いか(色使い等) | 4 |
| 社会問題(少子高齢化社会や SDGs 等)に関する対応や解決の方向性を文章として記述しているか | 4.25 |
| 将来都市構造図の可視性 | 4 |
| オリジナリティがあるか | 2.75 |
| 市のコンセプトとの整合性 | 4.25 |
| 全体平均 | 3.84 |

(出典：調査結果)

「将来都市構造図が都市計画 MP に記載されているか」に関しては、高砂市では将来都市構造図を主要資料として都市計画マスタープラン上に掲載している点に加え、その位置づけや今後の方向性まで明確に示している点が高く評価された。「社

会問題(少子高齢化社会やSDGs等)に関する対応や解決の方向性を文章として記述しているか」については、都市計画マスタープラン上で、高齢化の進行や地域コミュニティの崩壊等、市の現状と問題点を踏まえ、将来都市構造にどう反映していくかを記述している点が高評価の要因である。最後に「市のコンセプトとの整合性について」は、将来都市構造図上に「歴史・文化拠点」や「スポーツ・レクリエーション拠点」など高砂市が掲げる都市づくりの理念やテーマと合致するような構成要素が確認できたことから4.25点となった。

6. 将来都市構造図の評価結果の総括と作成上の留意点

本稿では、兵庫県内33自治体の将来都市構造図を対象に、独自に作成したルーブリックを用いて評価を行った。その結果、全体平均は2.93点となり、将来都市構造図の表現方法や情報の整理状況には自治体間で大きな差が見られた。

評価が高かった自治体では、将来都市構造図の時間軸が明確に示されていると共に、情報量を確保しながらも凡例や色使いの工夫によって視認性が担保されていた。一方、評価の低かった自治体では、将来像と現況の区別が不明瞭であることや、拠点・軸・面といった構成要素の作成意図が、本文から十分に読み取れない事例が多く見られた。

また、上位に評価された神戸市及び高砂市の将来都市構造図に着目すると、神戸市の事例では、他自治体と比較して将来都市構造図に盛り込まれている情報量が多い一方で、凡例や色使いの工夫によって視認性が確保されており、図としての完成度が高い点が評価されていた。また高砂市の事例では、都

市計画マスタープランとの高い整合性に加え、市の課題や都市づくりの方向性を文章と図の双方から示している点が高く評価されていた。

以上の内容を踏まえると、将来都市構造図を作成するにあたっては、①図自体のデザイン性を高め、多くの情報を盛り込みつつも凡例や色使いの工夫によって視認性を確保すること、②上位計画との関連性を明確にした上で、拠点や軸等の構成要素がどのような考え方に基づいて設定されているのかを示すこと、が重要であるといえる。これらを両立させることで、将来都市構造図は市の将来像を分かりやすく伝えるツールとして、より効果的に機能すると考えられる。

謝辞

本調査の実施にあたって、高砂市都市政策課の皆様には大変有益なご助言を頂戴しました。心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 国土交通省、「都市計画運用指針 第13版」
- 2) 甘粕裕明・姥浦道生・苅谷智大・小地沢将之(2018), 「立地適正化計画と都市計画マスタープランの計画内容の関係性に関する研究」, 都市計画論文集, 53(3), pp.400-407
- 3) 森本瑛士・赤星健太郎・結城勲・河内健・谷口守(2017), 「広域的視点から見る断片化された都市計画の実態—市町村マスタープラン連結図より—」, 土木学会論文集 D3, 73(5), pp. 345-354
- 4) 草津市, 「草津市都市計画マスタープラン」
- 5) 国土交通省(2014), 「都市構造の評価に関するハンドブック」
- 6) 神戸市(2011), 「神戸市都市計画マスタープラン」
- 7) 高砂市(2011), 「高砂市都市計画マスタープラン」

学生主体の PBL と教科書の利活用 -2025 年度のイーグレひめじでの活動を通して-

久保田薫葉 池本和奏 伊澤友美 樽角咲希 太田尚孝 (都市計画研究室)

キーワード：PBL, 学生主体, プロジェクト学習, 教科書, まちづくり

1. はじめに

兵庫県立大学環境人間学部都市計画研究室では、2022 年度から PBL (Project Based Learning) としてイーグレひめじ (以下、イーグレと省略) にて、学生主体の実践的まちづくり活動を実施している。本稿は、活動 4 年目となる 2025 年度の実践報告である。過去の活動と同様に、学部 3 年生の学生がプロジェクトの企画立案→実施→評価→報告までを一貫して行ったが、他方で新たな取り組みとして、常盤拓司・西山敏樹 (2019) 『大学 1 年生からのプロジェクト学習の始めかた』 慶應義塾大学出版会、をベースに活動を行った (以下、教科書と表記)。

この背景には、過去の活動での困難さと大学の研究室が行う活動ゆへの構造的問題があった。前者については、PBL は社会人基礎力の向上や大学の地域貢献の具体的な形として今や一般的な教育手段になっているとしても、そもそもプロジェクトとは何か、プロジェクトをどのように組み立て、実践していけば良いのかを必ずしも十分に理解できないままにスタートし、結果的にプロジェクトが停滞することもみられた。後者は、毎年参加学生が変わり、同じ研究室の継続的な PBL であったとしても、学生の意欲や経験値はバラつきがあるため、経験則に基づく先輩学生の活動報告書^{1) 2)} 以外の共通的事前準備が必要と考えた。

以下、本稿では 2 章で事前学習的に用いた教科書の概要を説明し、3 章で実際に行ったプロジェクト実践を紹介する。その上で、4 章にてプロジェクトの振り返りも兼ねて教科書がどのような場面で役立ったのか、あるいは役立たなかったのかを示す。最後に、PBL が今後ますます大学教育の中で重要視され、他方でより実りある活動になるために教科書は必要という立場からどのような教科書による事前学習を進めることが望ましいのか、を提言したい。なお、既往研究³⁾ のように PBL といっても様々なタイプがあるが、都市計画研究室のプロジェクトは「立ち上げ強化型」に分類される。

2. 教科書『大学 1 年生からのプロジェクト学習の始めかた』の概要

2.1 プロジェクトについて

プロジェクトは「目標に向かって実行する」ことと定義し、誰もやったことがない考えを実現することを意味する。全てのプロジェクトに当てはまることは、目標を達成するための取り組みであること、期限があることの 2 点が挙げられる。

2.2 プロジェクトの実施工程

プロジェクトの全体像として、①目標を立てる、②達成要件を定める、③タスクを設ける、④工程表を作成する、⑤実際の作業を行うの 5 つがある。①から順に進める「落とし込み」、問題が発生した際にひとつ前の内容を見直す「差し戻し」を行いプロジェクトを進める (図 1)。



図 1 プロジェクトの実施工程
出典：筆者作成

①は、プロジェクトの完了を定めることを意味し、「なぜ目標を達成しなければならないのか」という視点で考える必要がある。②は、目標を達成するために必要なことを指し、達成要件の外部依存性の高さには注意する必要がある。③は、具体的な作業について 5W1H を定めることを指し、プロジェクトの進行に伴い細分化する。④は、プロジェクトを効率的に行うため、タスクを整理することである。メンバー全員が確認できるように共有し、期限が分かるものにするのが重要である。

この 4 段階により、プロジェクトの計画が立ち、4 項目は情報共有、意識化の手段と認識であり、プロジェクトの進行に伴い見直しが発生する。

2.3 プロジェクトを進めるコツ

計画が終了すれば、プロジェクトの各作業の把握、順番や担当者の割り当てなど、プロジェクトが円滑に進む状態にする「マネジメント」が重要になる。また、進むべき方向を指し士気を鼓舞しつつ共に進む姿を指す「リーダーシップ」も重要である。

計画の実行のために必要なことはタスクの管理である。プロジェクトが進むことはタスクを減らすことを意味し、タスクは初めが最も多いと考えられ

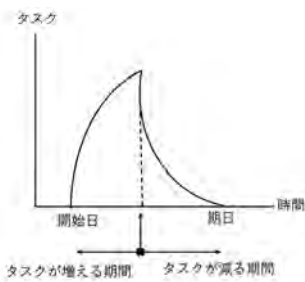


図2 理想のタスク増減
出典：筆者作成

さらに実行に向けて、タスクを書き出した要望管理表の作成が必要である。計画から実行に移る際に適切な順番を考え、作業を仕分けることで効率的にプロジェクトを進めることができる（図3）。

| 要望 | 計上日 | 重要度 (高・低) | 実施 (検討中・する・しない) | 判断理由 |
|--------------------------|---------------|--------------|--------------------|---------------------------------|
| A市の歴史を調べる | 〇〇〇〇年 〇月〇日 | 高い | する | A市の魅力を発信するうえで、歴史の中によいコンテンツがある |
| ウェブサイトA市にある特徴的なお店の宣伝を載せる | 〇〇〇〇年 〇月〇日 | 高い | 検討中 | A市の魅力の1つになるが、大学の取り組みとして良いか検討が必要 |

図3 要望管理表の例
出典：筆者作成

次に、プロジェクトを進め、タスクの取捨選択をする中で本当に必要だと判断したものを表す課題管理表を作成する（図4）。

| 項目 | 説明 | 担当者 | 計上日 | 期限 | 達成要件 | 前提となる作業 |
|--------|----|-----|---------------|------|------------|---------|
| 計画を立てる | | | 〇〇〇〇年 〇月〇日 | 〇月〇日 | 担当教員に提出される | |

図4 課題管理表の例
出典：筆者作成

2.4 プロジェクトの注意点

プロジェクトの中盤から後半にかけて様々な課題や作業項目が新たに見つかる場合などプロジェクトの期限までに目標達成が著しく困難な状況を「炎上」と言う。「炎上」が起きた際は原因を除去

する「鎮火」を行うことが重要となる。「鎮火」には①状況把握、②状況把握を踏まえた計画変更、③変更した計画による体制変更の3段階がある。これらの「鎮火」では、プロジェクトの失敗を全員でとらえることに注意する必要がある。

2.5 プロジェクトの評価

プロジェクト実施中の評価軸で分かりやすい観点では、プロジェクトの残り時間である。残り時間での判断はその時点でタスクが増える段階であるのか、減る段階にあるのかを明確にすることができ、理想と現実の違いを捉えることができる。

プロジェクトが目標を達成した時点、時間切れになった時点からの評価として、成功か失敗かが判断できる。成功とは、目標を達成したことで得られた成果がプロジェクトの背景にあるビジョンやミッションに貢献できた場合であり、失敗とは、プロジェクトの背景にあるビジョンやミッションに貢献できなかった場合を指す。どちらにも分けることが難しい中間は、期限までにプロジェクトで取り組む作業がすべて完了したが、目標は達成できなかった場合、期限までに作業が少し残ったが、ある程度目標は達成した場合などが挙げられる。

最終評価には、外部評価と内部評価がある。外部評価は、プロジェクトの成果を受け取る人がプロジェクトの期限に目標が達成できたのかを確認する作業を指し、開始時点で開示した評価の方針に基づいて行う。内部評価とは、プロジェクトメンバーが主体的に取り組みを検討し評価することであり、一般的に「振り返り」と呼ばれる。プロジェクトメンバーが取り組む過程で得た経験を相互に開示し、確認する機会である。失敗の原因を考え、共有することで真の失敗の理由を見出し、メンバーにとっての失敗の意義を生み出すことが重要である。

個人での振り返りを行う際は、①計画との差異を明らかにする、②コミュニケーションの評価、③プロジェクトの可視化、④プロジェクトの振り返りシート作成の4つがある。①は、プロジェクトの達成までに必要な作業時間の見込みの総数増減の可視化等で振り返る。②は、会議の議事録やコミュニケーション頻度などの数字や時間を測ることを指す。③は、タスクの増減や計画の見直しのタイミング、②の内容を書き入れたグラフを作成することで妥当性や理由を検討することができる。④は、できるようになった・努力したことなどから振り返り、メンバーの相互評価により、新たな理解が得られる。

3. 2025 年度の活動報告

3.1 課題分析と企画検討（2月～6月）

2025 年度のイーグレでの学生主体プロジェクトは、2 月の関係者との打ち合わせからはじまった。4 年目となる今年度はイーグレひめじ管理会社、姫路市内のデザイン会社の夕雲舎と協働する形で、イーグレ再生のための具体的提案として、屋上を活用したピクニック、体験教室を開催した（図 5）。

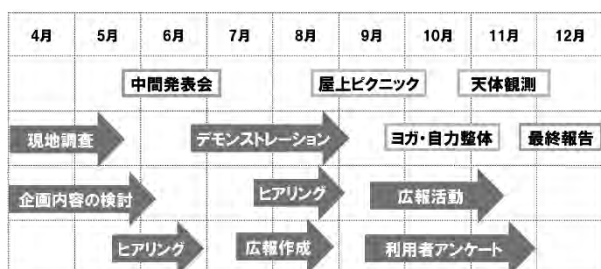


図 5 プロジェクトの全体スケジュール
出典：筆者作成

一連の活動の最初にイーグレの現状を理解するため、これまでの先輩方のプロジェクト結果や展覧を確認し、現地調査、ヒアリング調査を実施することで課題を分析した。

以上の調査から浮かび上がった 2025 年度のプロジェクトにおける課題は、イーグレ内での課題となる①人の出入りが少ないこと、②イベント企画の活力不足、研究室での課題となる③企画の持続性の欠如の 3 つであった。これらの課題解決に対する具体策と提案を検討し、活動の方向付けを行った。

①人の出入りが少ないことに対する解決方法として、これまでイーグレで体験したことのないような「非日常」の空間を創出すること、②イベント企画の活力不足に対しては、私たち大学生が楽しいと思うことを企画し、実施すること、③企画の持続性の欠如に対しては、2024 年度に先輩が実施し、好評だった「屋上ピクニック」を継続することにより、プロジェクトにおける課題を解決することとした。

具体的な企画内容は、イーグレの魅力である姫路城を眺望できる屋上を拠点に、2024 年度からの継続として「わくわく青空ピクニック」と題し、イーグレを利用している人や利用したい人を対象にピクニック用品の貸し出しを構想した。また、「非日常」の空間創出を意識した「夜空てらすピクニック」として、普段は解放されていない 18 時以降を特別開放し、天体観測、ヨガ・自力整体教室を企画した。

これらの企画の実施に向け、「わくわく青空ピクニック」は 2024 年度に同様の企画を実施していたた

め、利用者に一定の認識があると理解し、今年度のメイン企画となる「夜空てらすピクニック」とのつながりを生む企画を付け加えることが必要となった。昼と夜とのつながりは、「わくわく青空ピクニック」で蓄光ペイントを使用したアートを体験してもらい、「夜空てらすピクニック」で暗い夜の中ペイントが光る特性を活かした展示を実施することを構想した。また、「夜空てらすピクニック」では、天体観測、ヨガ・自力整体教室ともに専門性の高い内容であるため、協力していただける講師を探す必要があった。天体観測の講師は、学生プロジェクトにも理解がありイーグレで勤務されている方にプロジェクト内容の相談をする中で、イーグレの 1 階のテナントの天体観測を趣味とする社長を紹介していただいた。ヨガ教室の講師も上述した方から、イーグレでヨガをしたいと問い合わせを過去にしていた講師を紹介していただいた。その中から、直接アポイントメントを取り、協力者を確保した。また、2 日間の実施を考えていたため、イーグレの館内で紹介されていたヨガ教室のチラシに記載があった講師に直接アポイントメントを取り、自力整体での実施として協力いただけることとなった。

これらを企画提案発表会という形で、6 月 25 日（水）にイーグレひめじ管理会社、姫路市都市計画課、夕雲舎、講師の方を紹介して下さった方、ヨガ・自力整体の講師の前で報告した。

3.2 実施に向けた準備（6月～9月）

これらの企画実施において、特に「夜空てらすピクニック」は、特別開放による実施となるため、事前予約制による参加者の管理が必要であった。また、「わくわく青空ピクニック」においても 2024 年度で「また参加したい」と答えていただいた方への周知、より多くの方に参加してもらうためにも広報に力を入れることが必要となった。

2025 年度はこれまでのプロジェクトにも関わっていたデザイン会社の夕雲舎にチラシ、ポスターの作成を依頼した。企画提案発表会後すぐに、私たちがこのプロジェクトにかける思いや記載したい情報について話し合う打ち合わせやメールでのやり取りを通して、以下のようなチラシ、ポスターを作成してもらった（図 6）。

ポスターは、イーグレの地下、管理会社室前、屋上の入り口、大学での掲示を行った。チラシは、イーグレ 1 階のテナントであり、天体観測の講師が運営する施設内、大学内、プロジェクトメンバーが



図7 Instagram 投稿内容一部
出典：筆者作成

3.3 実施・評価（9月～12月）

「わくわく青空ピクニック」は、9月20日（土）、21日（日）、23日（火）に、11時～13時の時間帯で実施した。企画自体は、イーグレの屋上にて、レジャーシート、折りたたみ机を無料で貸し出し、利用者に屋上でゆっくり過ごしてもらおうという内容である。希望者には、蓄光ペイント体験を実施した。

「夜空てらすピクニック」は、9月27日（土）に、17時～19時30分で行い、「わくわく青空ピクニック」で描いてもらった蓄光ペイント展示をメインとした夜型ピクニックを開催した。10月3日（金）、4日（土）には、18時～19時30分で天体観測を実施する予定だった。企画自体は、講師の天体望遠鏡で天体を観測し、モニターを通して参加者に観察してもらおう内容である。10月10日（金）、11日（土）には、18時～19時でヨガ・自力整体教室を実施した。企画自体は、講師が考案した1時間のプログラムを体験してもらおうという内容である。10月3日（金）、4日（土）は天候不良のため、11月9日（日）、10日（月）の18時～19時30分に延期したが、天候不良により、10日（月）のみの実施となった。

実施結果は利用者アンケート、貸し出し記録用紙をもとに集計した。まず、「わくわく青空ピクニック」では3日間で29人に参加してもらうことができた。そのうち、アンケートの協力者は8人であった。満足度の質問については「非常に満足」と回答した割合が約75%であり、参加者にとって有意義な時間となったことが分かった（図8）。

次に、「夜空てらすピクニック」では4日間で28人に参加してもらうことができた。そのうち、アンケートに協力してもらえたのは17人であった。満足度の質問に対しては、「非常に満足」と回答した割合が約93%であり、2025年度の新たな取り組みとなった夜という時間帯、講師という専門家の影響



図6 チラシ・ポスター
出典：夕雲舎・筆者作成

携わる姫路駅西側で開催される旧市のきさき朝市にて配布した。

ポスターやチラシのほかに2024年度のプロジェクトメンバーである先輩から引き継いだInstagramでの告知、情報掲載を行った。屋上は天候に左右されるため、リアルタイムの屋上状況、実施可否を伝えるために活用した（図7）。また、ヨガ教室の講師には自身のInstagramでの告知、教室での告知も行っていただいた。

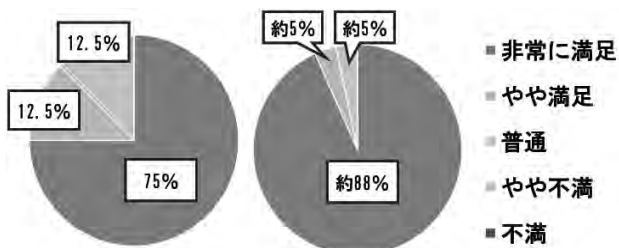


図8 アンケート結果「満足度」
 (左：わくわく青空ピクニック 右：夜空てらすピクニック)
 出典：調査結果から筆者作成



図9 アンケート結果「情報源」
 (左：わくわく青空ピクニック 右：夜空てらすピクニック)
 出典：調査結果から筆者作成

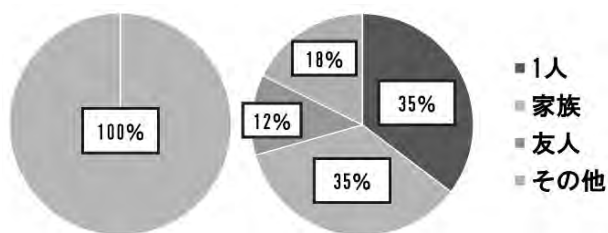


図10 アンケート結果「参加形態」
 (左：わくわく青空ピクニック 右：夜空てらすピクニック)
 出典：調査結果から筆者作成

が大きいことが考えられる (図8)。

「どこから情報を得ましたか？」という質問に対しては、「わくわく青空ピクニック」では「イーグレ館内のチラシ」と回答した人が最も多かった。この結果からは、日常的にイーグレを利用している人が立ち寄ったことが考えられた。「夜空てらすピクニック」では「家族・友人から」や「Instagram」と回答した人が多かった。予約制での実施のため、日常的にイーグレを利用している人ではなく、「夜空てらすピクニック」を目的にイーグレを訪れたことが考えられた (図9)。

「誰と参加しましたか？」という質問に対しては、「わくわく青空ピクニック」では「家族」との回答が100%であった。その理由は、重点的に広報活動を行った親子に参加してもらうことができたと考えられる。「夜空てらすピクニック」では「1人」、「家族」など回答が多様であった。講師がいる教室型の開催であったことで1人でも参加しやすい環境を整えることができたと考えられる (図10)。



写真1 環境人間学フォーラム様子
 出典：同研究室室内学生撮影 (2025年12月4日)

これらの企画実施後には、イーグレひめじ管理会社から「屋上の利活用について考える良い機会となった」とコメントをいただいた。

2025年度のプロジェクトの成果報告として、12月4日(木)に、環境人間学部の学内プレゼン大会である環境人間学フォーラムで口頭発表を行った(写真1)。イーグレの客観的情報、現在のイーグレの課題、その課題を乗り越えるために行った今年度の特徴的な企画である「夜空てらすピクニック」の概要、その結果について報告をした。

4. 教科書と実践との比較

4.1 計画段階

教科書で示された実施工程の1つ目であるプロジェクトの目標については、①イーグレの場所性を活かす、②にぎわいを創出する、③学生ならではのプロジェクトを行うという3点を定めていた。しかし、教科書の2つ目の項目である「達成要件を定めること」に進んだ際に、評価の基準が曖昧となることや自分たちが考え始めていた企画内容との整合性を取ることができていない目標であった。そのため、一度差し戻しを行い、目標を「屋上利用方法の幅を広げ、持続可能な屋上利用を促進する」とし、ビジョン、ミッション、ゴールの定義を再確認した。そして、ビジョンを「屋上の新しい活用方法を見つける」、ミッションを「夜の活用の可能性を見つける」、ゴールを「夜の活用方法を提示する」とした。

続いて、実施工程③タスクを設けること、④工程表の作成については、表の中にタスクを書き出し、プロジェクトを進めるコツで示された課題管理表のみを作成した。エクセルにて、表を作成することで初期段階のたまかなタスクから中盤段階の取捨

| 大項目 | 小項目 | 達成要件 | 作業 | 担当者 | 期間 | メモ | 状況 |
|----------|----------------|------------------|---------------------|-----------|-----------------------------|--------------------------------|---|
| 計画を立てる | ビジョン | 文書化される | | 全員 | 2025/5/2 | | 完了 (イグレに人が来る) 一層上が親子の憩いの場となる一層上の新しい活用方法を見つける |
| | ミッション | 文書化される | | 全員 | 2025/5/2 | | 完了(安心感のある=進んでいける=夜の活用可能性を見つける) |
| | 目標 | 説明できる | | 全員 | 2025/5/2 | | 完了 (イグレを拠点に総務の魅力を発信する) →ゴール: 夜の活用方法を提案する |
| | 内容作成 | | | 全員 | 2025/5/2 | | いっていいよとイグレひめじにきむいーグレ(集ま |
| | 達成要件リスト化 | | | 全員 | 2025/5/2 | | いっていいよとイグレひめじ ーいっていいよ? (今でしょ!) |
| | スケジュール作成 | 大項目を作る | | 全員 | 2025/4/30 | この表 | 仮 (進行中) |
| | 企画を固める | PowerPoint作成 | | 全員 | 2025/6/6 | | 完了 (中間発表資料) |
| | スケジュール | 表にまとめる | | 全員 | | | 仮 (進行中) |
| | 管理会社ヒアリング | 日時・場所が決まる | アホを取る | 伊澤、榎角、久保田 | 2025/5/2 | | 完了 (5/30 (金) 15:30~@) |
| | | 実施する | ヒアリングする | 全員 | 2025/6/2 | 5/30 (金) 15:30~@管理事務所 ナイトヒ | 完了 (池本、伊澤、榎角) |
| | まとめる | 共有し書き出す | 全員 | 2025/6/2 | | 完了 (6/2) | |
| | 課題の把握 | | 全員 | | | 完了 | |
| 実施に向けた準備 | 日時の確定 | 夕雲舎にアホを取る | 久保田 | 2025/4/30 | 夕雲舎 | 完了 (6/25 (水) 14:00~15:00 中間発表) | |
| | 場所の確定 | 日建字館にアホをとる | 伊澤 | 2025/5/12 | 6/25 13:00~16:00 知り合いの方にお誘い | イグレ4階セミナー室B | |
| | 中間発表資料の最終送付 | 資料作成 | 久保田 | 2025/5/9 | 夕雲舎に送る | 5/16日付 | |
| | 月夜・天体観測について深める | ヒアリングに行く | 池本、伊澤 | | | メールで完了 (6/9) 7/12に見学行 | |
| | 3カ月にわたる深める | 連絡とる | 久保田、榎角 | | | インスタメールで連絡完了 (6/) 講師の方2名 | |
| | 作業確定 | ナイトビュウで体方体制を確立する | 池本、伊澤、榎角 | | | 夕陽にきれいだった。机結構いい | |
| | | たつき調し | 全員 | 2025/6/25 | 大丈夫そう。深めるのみ | 完了 (6/12 18:50~19:30) | |
| | | 夜雲舎資料の画書送付 | 全員、久保田 | 2025/6/23 | | 進行中 | |
| 実行 | 事前準備 | 場所・日時の確定 | 榎本、自分たちで話し合い | | | 完了 | |
| | | 資料部ヒアリング | 解説ボード作成に当たって | 池本、伊澤 | 2025/7/12 | 総務学館 担当の方 | 中間発表会で大丈夫そう。3カ月の人も話せた(6/25) |
| | | 昼のデモンストレーション | 観客対策確認、ペイント確認 | 伊澤 | 2025/8/31 | 8/5 (火) 12:00~13:30 | 完了 (自撮りが大切、デモンストレーションやるべき) |
| | | 詳細決定 | 管理会社に確認 (ヒアリング) | 伊澤、久保田、榎角 | 2025/8/31 | 8/5 (火) 14:00~15:00 | 観客のみ (対策は呼びかけのみ、削られなければ時間11:00~13:00に、ペイントは後日学校で確 |
| | | ナイトビュウで体方体制を確立する | ペイントの設置方法、3カ月のライト確認 | 伊澤 | 2025/9/20 | 9/11 (日) 17:00~19:30 | 8/5回高してもらったやつの確認 |
| | | 準備物確定 | | 全員 | 2025/8/31 | プラウタイプなど | ほぼ確定 |
| | | 準備完了 | 買い物 | 全員 | 2025/9/20 | 蓄光ペン、ブルーシート、星際表、解説シート、(プラウタイプ) | |
| | | QRコード作成 | | 伊澤 | 2025/7/18 | 担当の方へ送る | |
| | | Googleフォーム作成 | | 全員 | 2025/9/19 | | 8/28完了 |
| | | 都市部ゆめ文化財団 | 例をみるが伝える | 池本、伊澤、久保田 | 8月上旬 | | 完了 (イグレも世界遺産の範囲内にあるため、世界遺産の活性化という点も再議に入れて欲しい) |
| | | 屋上の使用許可が出る | 申請書など | 池本、久保田 | 9月上旬 | | 完了 |
| | 広報 | 内容決定 | 担当の方と打ち合わせ | 全員 | 2025/7/9 | | 完了 (対面1、メール2?) |
| | | チラシ作成 | 担当の方 | 伊澤 | 8月上旬 | 完成したら送ってもらってのご確認 | 8/22完了 |
| | | 設置する | 担当の方 | 全員 | 2025/8/31 | 管理会社・イグレキッズなど | |
| | 実施後 | 3月のチラシ | アンケート取る | 全員 | 6/0日 | | |
| | | 参加者からのフィードバック | 担当の方と打ち合わせ | 伊澤 | 2025/10/31 | 3月の2人の広告になるようなもの? | |
| | 振り返り | 計画との差異 | 話し合い | 全員 | | | |
| | | コミュニケーションの頻度 | 把握する | 話し合い | 全員 | | |
| | | 計画の進化 | 把握する | 話し合い | 全員 | | |
| | | 相互評価 | 把握する | 話し合い | 全員 | | |
| | 環境人間学フォーラム | 作成 | | 全員 | 2025/11/20 | 発表登録締め切り: 11/7 (金) (仮) | |
| | | 発表 | | 池本、伊澤 | 2025/12/4 | 発表: 12/4 (木) 13:00~15:45 (仮) | |
| | EHCリサーチページ | 報告書にまとめる | 全体の振り返り | 文書化する | 久保田 | 2026/1/31 | 確認: 伊澤 |

図 11 実際に作成したタスク管理表
出典: 筆者作成

選択が終了した状態へとファイルの内容を変化させることができたため、③タスクを設けること、④工程表の作成、それに加え、プロジェクトを進めるコツで示された要望管理表、課題管理表の役割を1つのファイルで担った (図 11)。

4.2 実施段階

私たちのプロジェクトでは、6月25日(水)の企画提案発表会において2025年度のプロジェクト内容が決定したことで実践に向けて進んでいくことになった。7月中はチラシ、ポスターの作成に向けた打ち合わせや「夜空てらすピクニック」の講師とデモンストレーションを実施するために管理会社と日程調整を進めるなど、実施に向けた活動ができていた。しかし、8月中旬から夏休みに入ったことやプロジェクトに向けて行うことも必要備品の買い出しや関係者との連絡に留まり、メンバー全員での活動機会が減少した。9月20日(土)から始まるプロジェクトに向けての準備が進んでおらず、教科書でいう「炎上」の一手手前の状態となった。メンバー内でも「炎上」に近づいていることをそれぞれが認識していたため、「鎮火」に向けて行うべきことである状況把握を行った。その時点で、目標達成が困難な残りのタスク量ではなかったため、再度役割分担を行い、実施した。また、完成したチラシの配布を含めた広報活動が計画通りに進んでいなかったため、配布先を再検討し、11月10日(月)の延期日程の数日前まで広報活動を行った。

実施過程においては、夏休みに入ったことで気の

緩みが出た等の要因により、プロジェクトが停滞したが、教科書で事前に「炎上」という状態をメンバー全員が認識していたため、「炎上」に近づいていることを認識し、再確認をしてプロジェクトを進めることができた。

4.3 評価段階

まず、プロジェクト実施中の評価として挙げられていたプロジェクトの残り時間とタスクの関係については、7月末時点で図12のように認識していた。

前半の急なタスクの増加が響いたが、メンバー間での話し合い、役割分担を通してタスクの増減に問題が生じるほどの状態ではなかった。

次に、目標を達成した時点での評価として、私たちのプロジェクトは成功であったと考える。ビジョンである「屋上の新しい活用方法を見つける」、ミッションである「夜の活用可能性を見つける」、ゴールである「夜の活用方法を提示する」という3点について、アンケート結果からも満足度が高かったこと、イグレひめじ管理会社から「屋上の利活用について考える良い機会となった」という声から、プロジェクトのビジョン、ミッション、ゴールに貢献することができたと考えられる。

外部評価についても、上記の評価と同様にプロジェクトの成果を受け取るイグレひめじ管理会社による声や環境人間学フォーラムでの「非日常的な空間を上手く創出できたと感じた」等のコメントをもらったことから、プロジェクトとして成功であっ

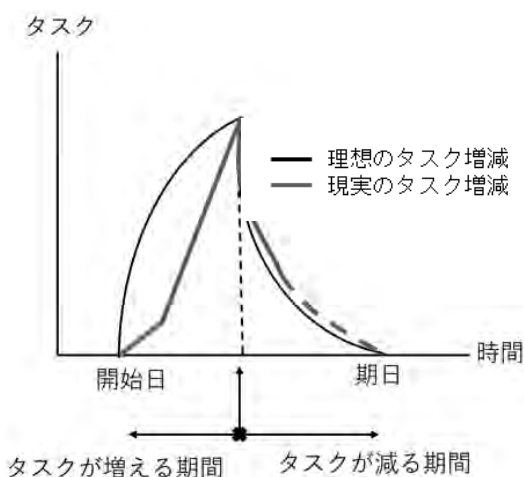


図 12 タスクの増減の理想と現実
出典：筆者作成

たと評価されたと考える。

内部評価に関する①から④について 1 つずつ評価する。まず、①計画との差異を明らかにすることでは、図 12 で示したタスク増減の理想と現実を可視化したグラフから分かるように、「炎上」という状態について理解したうえで早めの見直しを行ったことにより、大幅な作業の遅れは起こらなかった。②コミュニケーションについて評価することでは、会議の開催やコミュニケーションの頻度は週 2~3 日、4~8 時間であった。実施工程②達成要件を定めることから①目標を立てることへの差し戻しを行った時期、タスクが増加した時期は週 4 日、10 時間程度で会議やコミュニケーションを取っていた。③プロジェクトの可視化を行うことでは、タスクの増減や計画の見直しのタイミング、コミュニケーションの頻度を表したグラフは図 13 のようになった。計画の見直しは初期段階の 1 度のみでタスクの増加に伴い、メンバー間でのコミュニケーション頻度が高くなる傾向にあった。④プロジェクトの振り返りシートを作成することでは、できるようになったこととして、関係者との連絡の取り方やメンバーとのコミュニケーションを定期的に取りることなどが多く挙げられた。努力したこととしては、メンバーとのコミュニケーションを取る時間を多くすること、効率よく会議を行えるように会議が煮詰まった際には時間を置いたり指導教員に相談したりするなど主観的な視点のみにならないようにしたことなどが挙げられた。メンバーとのコミュニケーションにおいて、オンラインで実施したこともあったが、有意義な話し合いができなかったことから、基本的には対面でコミュニケーションを取るようにした。メ

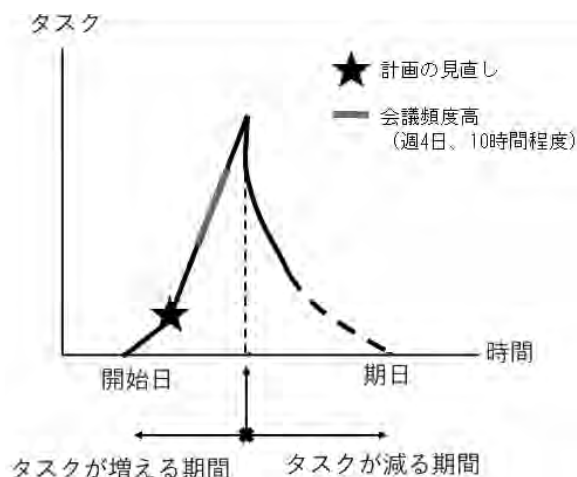


図 13 プロジェクトのタスクの可視化
出典：筆者作成

ンバー間の相互評価としては、計画段階においては客観的に現状を把握できるメンバーがリーダーシップを取って会議を進んでいた点が良かったという意見があった。実践段階においては、役割を分担し、屋上での受付を行うメンバー、1 階で誘導を行うメンバーなど臨機応変に対応できていた点が良かったという意見があった。全体を通して、それぞれの生活環境やスタイルによってプロジェクトの関与度に差が出てしまう時期が発生したことや同様の熱量を持って活動することの難しさについて言及するメンバーもいた。

5. まとめ

5.1 プロジェクト活動を通じた学び

2025 年度のプロジェクトを通して得た学びは、大きく 2 つある。

まず、メンバー間での情報共有の重要性である。これはプロジェクトの進捗状況、タスクの現状などメンバーそれぞれが状況を把握し、プロジェクトを進めていく必要性を痛感したからである。会議に参加できないメンバーがいた場合、情報共有を疎かにすると次の会議で手戻りが発生し、限られた時間を有効的に使用することができず、時間のみが経ち、プロジェクトが進まない状態になっていた。長期間のプロジェクトであるほど、常にメンバー全員で会議を行ったりタスクに取り組んだりすることは困難となる。しかし、プロジェクトは当然、1 人で取り組むことはできないものであり、メンバー全員が同様の目標、熱量を持ち、時には役割分担を行いながら進める時間が必要となる。そのため、プロジェ

クトに関わることができたメンバーは情報を共有し、関わることができなかつたメンバーは共有された情報を確認することでメンバー全員が同様の情報量を持ってプロジェクトを進めることができる。情報共有を意識的に積極的に行うようになったことにより、効率的にタスクに取り組むことができるようになった。

次に、プロジェクト開始前にプロジェクトについて理解を深めておく必要性についてである。大学生1年生向きの教科書に基づいてプロジェクトを実施したことにより、全体の流れや方法、注意点をあらかじめ認識することができていた。特に、プロジェクトに関わるメンバー全員が「炎上」についての理解があったため、「炎上」の一步手前で状況把握を行い、役割分担をすることができた。このことから、初めてプロジェクトを実施する際には、メンバー全員でプロジェクトの全体像を理解したうえで進めることが重要である。この意味でプロジェクトがどのようなものかや、プロジェクト実施中に起こりうる問題、評価の重要性等を教えてくれる教科書があり、事前学習をしたことは有意義であった。

以上より、2025年度のプロジェクトを通して、メンバー間での情報共有を疎かにしないこと、メンバー全員がプロジェクトについて同様の理解を得ておくことがPBL実施には重要な要素だといえる。

5.2 必要とされる教科書の提案

一方で、教科書の記載とは異なる作業を行った点もある。それは、プロジェクトの実施工程にあるタスクを書き出した要望管理表を作成し、その後実際に必要だと判断した課題管理表を作成する工程であった。私たちは、上述のようにエクセルにて要望管理表を作成したことにより、作業が進むにつれて内容が要望管理表から課題管理表に遷移していった。そのため、タスク管理表として編集、共有しておくことが実践において効率的であると実感した。

また、教科書には「目標」、「ビジョン」、「ミッション」を設定することの重要性が述べられていたが、それぞれの違いや定義の仕方が理解できず、何度も差し戻しが発生した。そのため、教科書においてそ

れぞれの違いや定め方が明記されていると分かりやすいと感じた。私たちは、今後の施設の在り方や理想像についてKJ法を用いてメンバー間で協議した。それにより、プロジェクトの根幹となるものを見つけることやプロジェクトの見通しを立てることができ、「目標」の設定などに至った。このことから、教科書において定義を示すことも重要だが、方法論について具体例があるとPBL初心者には分かりやすいものになると考えた。

これらのことから、メンバー全員がプロジェクトを進める方法、注意点を理解しておく必要があると言える。この場合、教科書による共通理解を持ってプロジェクトに取り組むだけでなく、大学の講義による学習時間の確保など、どのような手段であれ、メンバー全員がプロジェクトについて同様の理解を得ることができる環境が必要である。

いずれにしても、PBLは大学だけではなく、高校段階でも重視されるようになっていく中で、教科書の存在は教員にも学生にも価値があることは明らかである。本稿が、より実りのある教科書づくりの一助になれば幸いである。

謝辞・付記

プロジェクトの実施にあたり、多くの方々にご協力をいただきました。あらためて感謝申し上げます。また、教科書の著者の先生方にも具体的かつ多くの学びを与えていただいたことに感謝申し上げます。

参考文献

- 1)北梨緒乃・藤原颯太・永井結季子・山鳥実咲・河原美羽・太田尚孝(2025)「イーグレひめじにおける学生主体のPBL型の社会実験の実施と心得：兵庫県立大学都市計画研究室の2024年度の活動報告」兵庫地理, 70, 137-146
- 2)河原美羽・細見佳乃子・大前亜喜・雫石千代乃・筒井勇翔・土肥真由香・藤原志帆・前田菜緒・太田尚孝(2024)「学生主体のイーグレひめじの活性化にむけたプロジェクト実践：兵庫県立大学都市計画研究室の2022年度・2023年度の活動報告」兵庫地理, 69, 157-165.
- 3)井関崇博・太田尚孝・内平隆之・佐々木樹・尾分達也(2025)「大学教育のPBLにおける学生プロジェクトの支援戦略」兵庫県立大学環境人間学部研究報告, 27, 45-64.

ため池の利活用に向けた計画づくり

- 地域と学生の連携プログラム「ため池アクション」を通して -

柴崎浩平（環境デザイン系）、佐々木太一（神戸大学大学院農学研究科博士前期課程2年）

キーワード：大学連携プログラム、ため池、計画づくり、コーディネート

1. はじめに

エコ・ヒューマン地域連携センターでは、特別フィールドワーク「ため池アクション（以下、連携プログラム）」を2023年度より実施してきた。

「ため池アクション」は、ため池・農業・農村の課題に地域と協働で取り組む学生向けプログラムである。学生が3人程のチームを組み、地域住民、コーディネーターと共に6ヶ月間で1つのテーマに取り組む。学生は、2～3のテーマから興味のあるテーマを選んで申込み、選考に通った学生がプログラムに参加している。参加学生は、本学学生の他、神戸大学など他大学の学生もみられ、対象学年は主に1～2年生である。

「ため池アクション」ではこれまで、兵庫県加古川市志方町西地区・東地区、稲美町草谷地区の3つの地域で活動を展開してきた。本稿では、加古川市志方町西地区で取り組んできた「ため池の利活用に向けた計画づくり」に着目する。そのうえで、「ため池アクション」がもたらした成果を整理するとともにその要因について考察する。

2. 「ため池アクション」の概要

2.1 「ため池アクション」の目的と実施体制

地域住民から寄せられる「学生と一緒に活動したい、学生を連れてきて欲しい」という声を形にしたのが「ため池アクション」である。学生を受け入れるにあたって、地域住民と「なんのために学生と共に活動をするのか」という点について対話を重ねた。その結果、連携プログラム全体の狙いを大きく2つ設定した。

1つ目は、地域と学生の関係性の構築である。「ため池アクション」は、学生が地域で活動していくにあたっての「入り口」と位置づけた。実施期間中の活動成果そのものよりも、実施終了後においても学生が継続的に地域を訪れ、主体的に関与し続ける関係性を構築することを第一の目的とした。

2つ目は、「多様なアクションが生起するムードの醸成」である。地域課題の多くは一朝一夕に解決することが難しい。そのなかでも、「新しいこと」や「楽しいこと」を生み出していくためには、まずは自分たちでやっていこうという前向きなムードが重要である。そういったムードは、特定の誰かが作り出すものではなく、多様な主体が関与する実践の積み重ねのなかで徐々に醸成されるものと考えられる。「新しい」「楽しい」といった価値を志向する雰囲気共有されることにより、小規模であっても具体的な行動が誘発され、それがさらなる取り組みへと波及する正の循環が生まれる可能性がある。

なお、「ため池アクション」の主催は、「(一社)ため池みらい研究所」であり、共催として兵庫県立大学環境人間学部エコ・ヒューマン地域連携センター、神戸大学大学院農学研究科地域連携センターが位置づく^{注1)}。

2.2 「ため池アクション」の流れ

「ため池アクション」の大まかな流れを図1にまとめた。フェーズは、プロジェクト案作成フェーズと実行フェーズに分けられる。プロジェクト案作成フェーズは、開校式（5月実施）から中間発表（7月実施）までの期間である。開校式は、学生や受け入れ側の地域住民、コーディネーター、行政職員など本プログラムに関わるメンバーの顔合わせの場である。その後、2回のフィールドワークを実施し、中間発表をおこなう。中間発表では、学生が成果発表までに実行するプロジェクトの目的や内容を発

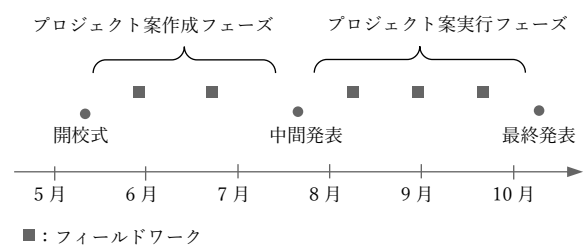


図1「ため池アクション」のプロセス

表する。実行フェーズに移り、3回のフィールドワークをおこない、最終発表（10月実施）を迎える。最終発表では、活動を通して得られたアウトプットや成果を関係者の前で発表する。なお、フィールドワークの回数は便宜上設定した回数であり、実態とは異なる部分もある。

2.3 加古川市志方町西地区の概要

続いて実践フィールドである志方町西地区の概要を紹介する。志方町は、兵庫県南西部の東播磨地域、加古川市に位置する。市域の中央には兵庫県最大の河川である「加古川」が貫流し、その下流には大きな三角州が形成されている。東には「いなみ野台地」が広がり、北西には「高御位山」をはじめとする丘陵が連なっており、古代から播磨地域の中心地として発展してきた。気候は温暖小雨の瀬戸内気候に属し、水資源に乏しいことから、古くからため池を利用した灌漑システムが確立されてきた歴史を有する。

加古川市沿岸部は、神戸市や姫路市のベッドタウンとしても栄えるなど市街化が進んでおり、加古川市全体の人口は微増傾向にある。2015年の総人口は267,435人と、5年前に比較する0.2%増加している（国勢調査より）。一方、内陸部は農村風景が広がっており、人口は減少傾向にある。志方町西地区も内陸部に位置し、山岳信仰の名残が残る高御位山（別名、播磨富士）の麓に形成された集落である。また、高御位山は信仰の対象としてだけでなく、農業にも密接にかかわっており、ため池の集水域となっている。

志方町西地区は、旧西志方村を構成する山中、西牧、永室、原、成井、横大路、西山の7つの集落からなる^{注2)}。志方町西地区の人口は2020年段階で2913人であり、集落ごとに見ると、最も少ない西山は113人、最も多い横大路で849人、集落ごとの平均人口は416人である（加古川市住民基本台帳より）。人口は減少傾向にあり、2010年は3,289人であったが2030年には2,823人まで減少する予測がなされている。なお、地区内には加古川市立志方西小学校があり、児童数は91名（2025年9月時点）となっている。

当該地域では、農業用水は雨水に依存しており、外部水源からの取水は行われていない。また、農業用水パイプラインは整備されておらず、開水路を用いた灌漑方式が維持されている。志方西地区には、約40のため池が存在し、なかでも、灌漑上最も重



写真1 大池での神事の様子

要な位置づけを占めるのが「大池」である。大池は、江戸時代に造成され、今日に至るまで5ヶ村で共同管理がなされてきた。また、1940年代に堤防の大改修がおこなわれた際には、水田面積に応じて公平に分水するための施設（直径約4メートルの円筒分水工）が造成された。大池ならびに円筒分水工は、地域のシンボルの1つになっており、毎年初夏には「樋抜きの儀」といわれる、穀物の豊作と水利の無事を祈る神事が執り行われている（写真1）。

3 ため池の利活用に向けた計画の内容と作成過程

3.1 連携体制と連携プログラム

当該地域では、従来からため池（特に、大池）を活用した様々な活動が展開されてきたが、老朽化に伴う大規模改修工事の必要性が顕在化したことを契機として、今後の活用の方向性（ソフト）や必要となるハード整備を検討する計画づくりが進められている。活用の方向性については、「志方西未来づくりプラン（以下、ため池活用プラン）」としてまとめられている。

「ため池アクション」は、同プランの作成や実施に大きく関連している。図2は、プランの作成および「ため池アクション」の実施時期および関係性を整理したものである。

プランづくりのコアとなる組織は「大池利活用協議会」である。同協議会発足後、運営委員会が月1回程度の頻度で開催され、2024年3月にプランが完成された。完成に至るまでには、運営委員会のメンバーだけでなく、多様な意見を反映するためのワークショップ（以下、計画づくりWS）が計4回開催された。これらの運営委員会や計画づくりWSに学生も参画する形で活動が進められた。

連携プログラム（ため池アクション）は、2023、2024年度に実施され、計7名の学生が参加した。プログ

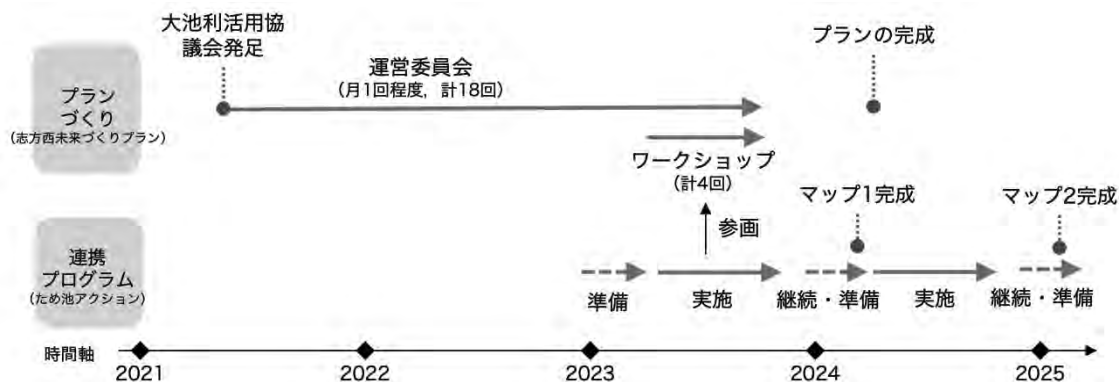


図2 ため池活用プランの策定・実施のプロセス

ラムの実施期間は、両年ともに5～10月であるが、その前後期間において、プログラムの目的や活動内容の調整などの実施に向けた準備、期間終了後には学生のフォローなどがなされている。

連携プログラムの主なアウトプットとしては、地域の魅力を整理したウォーキングマップなどがある（以下、詳述）。マップは、掲載地区が異なる2タイプが各年度に作られており、プログラム期間終了後も学生が継続的に関わる形で作成されている。また、これらのマップづくりは、策定されたため池活用プランの実現に向けた、具体的な取り組みの一つと位置づけられる。なお、2023年度のプログラムでは、先述した計画づくりWSにも参画し、利活用に向けたアイデア・意見を交わした。

3.2 ため池活用プランの作成過程

本節では、ため池活用プランの作成過程を詳しくみていく。大きく、大池利活用協議会発足の経緯、プラン策定にあたっての協議会の活動内容、プラン策定にむけたワークショップの内容、作成されたプランの内容に分けて説明を加えていく。

①大池利活用協議会発足の経緯

当該地区では、ため池活用プラン作成以前から、大池を活用した取り組みがおこなわれていた。例えば、小学生を対象とした教育プログラムの実施やカヌーの体験イベントが挙げられる。

前者は、志方西小学校と連携した授業として実施されてきた（兵庫県東播磨県民局「ため池ふるさと教育プログラムモデル支援事業」として2019年度から実施）。同プログラムでは、志方西小学校の児童（対象：全学年）がため池群や水路網の役割や地域農業、歴史、文化、豊かな自然環境について学習や体験を通じてふるさと意識を醸成することを目



写真2 大池でのカヌー体験イベントの様子

的としている。具体的には、サツマイモやイチジク、米作り体験、選出した「樋抜きの儀」への参列やカヌー体験イベントなどをおこなってきた。

カヌーの体験イベントは、ため池での遊びを通じて自然環境の素晴らしさと水難事故対策を地域の子供達に伝えるため、2020年度から毎年度1回実施されてきた（写真2）。運営は、町内会連合会会長を委員長とする実行委員会が組織され、志方西地区の町内会や水利組合、ため池協議会^{注3)}が参画している。なお、実施にあたっては、姫路カヌー協会の指導協力を得ている。

本プラン策定の直接的な契機は、原大池の老朽化に伴う耐震改修工事計画であった。この改修は、防災という行政的な要請から始まったが、地域住民はこれを単なるインフラ整備に終わらせず、「管理がしやすく、住民に喜ばれるため池にする」という、より積極的な地域活性化の機会にするため、「原大池利活用協議会」を発足させた（2021年度）。発足にあたっては、原地区が声がけする形で検討が重ねられ、志方西地区7集落を巻き込む広域的な協議体へと発展した。

②大池利活用協議会の活動

同協議会の運営委員会は、2021年度から毎月開催され、2023年4月までに18回開催されている。同協議会では、大池の利活用の方向性を検討するため、先進地の視察や地域住民へのアンケート調査をおこなってきた。

先進地の視察先は、「寺田池(加古川市)」である。当該ため池では、水利関係者である農家だけでなく、自治会などの非農家と連携しながら親水空間づくりがおこなわれてきた。視察では、非農家が担う役割や役割を担うようになったプロセスなどについて話をうかがった。アンケート調査(2021年11月実施)は、志方西在住者を対象としたアンケート調査や(有効回答数300部ほど)。質問項目としては、活用の方向性に関する項目などがあり、回答結果は後述するプラン策定のなかで検討材料として活用された。

また、大池ならびに大池周辺を親水空間として活用する新たな取り組みにも着手した。具体的には、大池周辺を親水空間として活用するため、ウォーキングコースを取りまとめた。協議会メンバーで志方西地区を2回に分け踏査し、ウォーキングコースの検討をおこない、「志方西花とため池ハイキング」マップとしてとりまとめた。このマップは、大学生と協働で作成した、後述するマップ(写真4)のプロトタイプという位置づけである。

③プラン作成に向けたワークショップ

ワークショップは、2023年5月から9月にかけて計4回開催された(写真3)。

ワークショップでは、ため池活用プランを作成するために、地域の魅力や課題、目指す将来像などについて話し合った。参加者は、地域住民(各町内会長や民生委員など)、志方西小学校教員、学生、行



写真3 プラン作成ワークショップの様子

政職員、ため池みらい研究所のメンバーなど、多様な主体が参加する形でおこなわれた。1回あたりの参加人数は、30名ほどであった。

話し合いにあたっては、外部の専門家がファシリテーターを務め、グループワーク形式で意見交換がなされ、学生はテーブル単位でのファシリテーターを担うなどした。話し合いの結果、目指す将来像はキャッチフレーズとしてまとめられ、計3案が提示された。そして、2023年10月28日におこなった「志方西未来づくりプラン報告会」において、参加住民の投票によってキャッチフレーズが決定された(以下、詳述)。

④作成されたため池活用プランの内容

上記の活動を通して作成されたプラン(2024年3月完成)には、目指す将来像やその実現に向けた取り組みとその推進体制などが記されており、計23ページに及ぶ。

プランに記載された地域の将来像は「こどもの声が聞こえる自然豊かなふるさと志方西」である。このキャッチフレーズは、単なる人口増加を目指すのではなく、次世代が定住し、子育てをしたいと思えるような持続可能で魅力あるコミュニティを創造するという、地域の価値観と願いを示している。これは、プロジェクトのあらゆる活動の方向性を定める基本理念として機能している。

上記の将来像を実現するための具体的なプロジェクトとして、以下の2つが取り組まれている。1つ目は、「原大池利活用拠点構想プロジェクト(ハード事業)」である。水辺に近づける施設を整備・保全するために、原大池周辺の親水空間や散策路の整備など、地域の「拠点」となる物理的な環境整備を目指すプロジェクトである。2つ目は、「志方西ウォーキングプロジェクト(ソフト事業)」である。地域外の人達が当該地域に関わりたくなる魅力やきっかけをつくるために、地域の歴史・文化・自然といった「見えざる資産」を掘り起こし、マップ作成やウォーキングイベントを通じてその魅力を内外に発信するプロジェクトである。

また、これらの推進体制として、志方西地区町内会連合会、大池5ヶ村ため池協議会、原地域づくり協議会、西牧ため池協議会、成井ため池協議会、山中ため池協議会、横大路ため池協議会、西山ため池協議会、志方西小学校、有志・ボランティアが挙げられており、事務局として原大池利活用協議会が位置づくると明記されている。

3.3 「ため池アクション」の内容と影響

3.3.1 実施概要

本節では、「ため池アクション」として実施した内容を紹介していく。

大きくおこなった内容は、「ため池活用プラン作成に向けたワークショップへの参画」、「大池周辺を親水空間として活用するためのツールの作成およびイベントの実施」である^{注4)}。

先述した「ため池活用プラン作成に向けたワークショップ」において、学生らは、活動を通して感じた地域の魅力や課題について発言する他、グループ内のファシリテーターを務めるなどした。

「大池周辺を親水空間として活用するためのツール」としては、ウォーキングマップの作成に取り組んだ(写真4)。このマップは、大池活用協議会で作成したプロトタイプ版を、より地域外の人々に魅力が伝わるようにするため、学生の視点を取り入れている。協議会メンバーは、学生の感性を活かすことで、地域の魅力を新たな形で発信できると期待していた。ウォーキングマップは、掲載地区が異なる3タイプが各年度に作られており、それぞれ2024・2025・2026年初旬に完成されている。マップ



写真4 作成されたウォーキングマップ

内には、散策ポイントとなる風景を学生の視点でとりまとめ・記載するようにした。具体的には、「トトロの散歩道」など8つのポイントを紹介した。その他、マップはSNSでの「映え」を意識した「八景」というコンセプト、ターゲット(ファミリー層)に合わせた写真やQRコードを用いて八景の場所に看板を設置した。マップ作成に関する地域住民の反応としては、「自分たちでは気づかない視点だ」といった好意的な反応が得られた。また、「トトロの散歩道」は、個人の家と家との間の用水路を表したものであったが、その家の住民が厚意で、トトロの紙人形を自作し、飾るという風に地域住民側からもウォーキングプロジェクトを盛り上げるための動きが見られた。

親水空間として活用するためのイベントとして、散策イベント(「小さい春見つけたイベント」)がある。地域の方々(主に協議会のメンバーや集落住民)がガイドを担い、参加者に地域を紹介する形で、これまで2回実施した(2024年3月、2025年4月実施)。参加者は、各回とも50名ほどであった。

本イベントの実施にあたっては、2023年度・2024年度にため池アクションに参加した学生が継続して参加しており、企画・運営に携わっている。学生は企画立案、広報、当日の受付や参加者対応など、運営全般を主体的に担った。その結果、参加者アンケートでは満足度が高く、2026年度に計画されている散策イベントにもリピーターとなる申込が3組見られている。

その他の親水イベントとしては、生まれ故郷である原地域を「ふる里」として記憶してもらうよう、地域の小学生を対象とした新たな自然環境学習プログラムやイベントの企画・実施を学生が主体となっておこなった。具体的には、「小さい秋見つけたイベント」と題し、フォトコンテストの期間開催や笹舟流し、微生物観察会、さつまいもスティック作りなどを実施した。

3.3.2 「ため池アクション」の影響

「ため池アクション」が地域に与えた影響を探るため、K氏にインタビューをおこなった(2025年4月実施)。K氏は、地域づくり協議会(多面的機能支払交付金活動組織)の会長を務める他、農業委員会委員なども務めており、過去には町内会長も務めてきた。また、「大池」の大規模な改修に伴う地域内外の主体との調整役を担っており、地域のリーダー的存在である。K氏へのインタビュー調査の結果、

以下の3つの点が導かれた。

①地域住民の姿勢のポジティブな変化

K氏は「地域住民の姿勢も前向き・積極的になっていると感じる」と振り返っていた。集落に年配者が多くなり閉塞感を感じていたが、集落に積極的に関与する学生を見て、自身(K氏)だけでなく地域住民も前向きになったと述べていた。

②学生と地域の個人間のネットワーク構築

K氏は「学生を勧誘する住民が増えている」と振り返っていた。これまでK氏が集落側の窓口を担っており、学生とのコミュニケーションもK氏が中心となっていた。しかし、地域住民と学生の間で個人間のネットワークが構築され、K氏だけでなく様々な住民が学生を活動に誘うようになっていた。例えば、「来年はみこしの担ぎ手になってな」「とんど見にきいや」「蓮根掘りイベントあるからどう？」など、の声かけがあるという。実際、数名の学生はそういった勧誘をきっかけに当該地域を訪れるなど、個人間のネットワークが構築されつつある。

③新たな役割を担う原動力の獲得

K氏は「地域内外の調整役を担うことを躊躇していたが、今後も地域内外の調整に貢献したいと思うようになった」と振り返っていた。K氏は「これまでは自身が調整役を担っていたが、体力的な面が心配であるため辞退したいと思っていた。が、自分がしないとこれまでの活動が水の泡になってしまう」と述べていた。体力的な問題もあり、K氏は自身が担っていた調整役を後任者に託そうとしていたが、後任者が思うように調整役を果たせそうにない状況を垣間みていた。そのため、後任者が調整役を担うようになると、これまでの活動が無駄になってしまう危機感を覚えていた。そのため、継続して調整役を担うようにした。

4 考察

4.1 ため池アクションの狙いと成果

以上の結果をもとに、ため池アクションが地域にもたらした成果を整理する。

冒頭でも述べたように、ため池アクションの狙いは大きく2ある。1つ目は、授業期間終了後も学生が地域活動に関わるなど、学生との関係性を構築することである。この点に関しては、マップ作成やウ

オーキングイベントの実施などに学生が継続して関わりるとともに、地域住民と学生間で個人間のネットワークが構築されるなど、その狙いを達成できたと考える。2つ目は、前向きなムードの創出であった。この点については、K氏が「地域住民の姿勢も前向き・積極的になっていると感じる」と振り返っていたことから、達成できたと考える。

その他、学生の継続的な関与は、地域リーダーが「新たな役割を担う原動力」にもつながっていることがわかった。以上のことから、ため池アクションの狙いは、概ね達成できたと考える。

4.2 課題-コーディネートについて-

本節では、なぜ上記の狙いを達成できたのか、という点について今後の課題も含めて整理する。

大学と地域の連携をめぐることは、これまで多様な問題や課題が指摘されてきた。とりわけ一般的な論点として、主体ごとに期待や評価の基準が異なる点である。中塚・小田切(2016)はこの構図を「地域の不満・大学の不安」と表現している。すなわち、地域側には「大学が具体的な解決策を提示しない」という不満が生じる一方、大学側には「過度な期待や要請により対応が過重となる」という不安が生じる。このような緊張関係が各地で一般化していること、そして両者の期待を調整するコーディネート機能の重要性が指摘されている。

本プログラムでは、地域住民が学生に対して抱く期待の調整に相当の時間を割いてきた。冒頭で述べたように「ため池アクション」は学生が地域との関係構築における「入り口」であることを、対話を通じて共有してきた。このように学生の役割を限定的かつ段階的なものとして位置づけた点が、双方の過度な期待を抑制し、円滑な連携を可能にした一因といえる。

コーディネートの重要性自体は従来から指摘されてきたものの、コーディネーターの役割や機能、さらには必要とされる技能や規範について体系的な整理が十分になされている訳ではない。その結果、コーディネート能力の向上に向けた実践は各現場で試行錯誤的に展開されているのが実情である。他方、「コーディネーター」という概念は一種の buzzword として広まっており、各主体・人が考えるコーディネーターの役割もさることながら、「優秀なコーディネーター像」も異なる。そのため、コーディネーターにはありとあらゆる相談・無理難題が寄せられ、なかには深刻な心理的負担を抱える者もい

るのが現状であろう。

そもそも「コーディネート (coordinate)」とは、辞書的な意味では「調整」を意味する。菅野 (2021) は、コーディネートを、複数の人物や組織によって越境的協働を成立させるために、複数の人物や組織が協働する際の資源・知識動員にかかわる取引費用 (コース 1992) を低減させる行為であるとしている。大学・地域連携活動という取引費用としては、大学と地域が連携活動を実施できる状態を作るためのコストがある。例えば、どの地域、どの大学・先生・学生と連携活動をおこなうのか、そして連携活動を行なう目的や方法の調整などが挙げられる。

大学・地域連携の文脈では、上記の調整だけでなく、連携活動の実施そのものもコーディネーターの役割として位置付けた研究もみられる。例えば、澤田 (2015) は、産学連携におけるコーディネーターをリエゾン型とプロデューサー型に類型化している。また、谷口・平岡 (2025) は、大学・地域連携のコーディネーターをリエゾン型(連絡窓口)とコ・デザイン型に類型化している。ここでいうリエゾン型とは調整の意味合いが強いが、プロデュースやコ・デザインは、調整の範疇を越える。

実際、本連携プログラムにおいても、コーディネーターは調整役以上の役割を担っており、様々な戸惑いもみられた。例えば、プロジェクト内容やゴールの決定に関する点である。地域は「学生の自由な発想」から出てくるプロジェクトを期待している一方で、地域側にも展開されているプロジェクトがある。「学生が勝手にしている」とならないように、地域と協働するためにはどうすればよいか、といった点にコーディネーターは戸惑っていた。

今後、コーディネーターないしコーディネート力を養成していくにあたっての基礎的な研究蓄積が望まれる。その際、特定の「コーディネーター」と称される者のみがコーディネートをおこなっているのではなく、地域や大学、行政など各主体内・間

をコーディネートする人材が存在することに注意する必要がある。本事例でもみられたように、例えば K 氏は、自身で役割を見出し、自ら調整役を担うようになっており、学生が活動する環境整備に多大な尽力をいただいた。その意味で、連携事業は、特定の役職者であるコーディネーターだけでなく、各主体内・間をコーディネート・調整する人材がいて成り立っている部分がある。そのため、連携事業に関わる各種主体のコーディネート力を底上げしていく、という視点も重要であると考えられる。

注釈

- 注 1) 「(一社) ため池みらい研究所」は、2021 年に兵庫県加古川市に設立された市民研究所である。理事には研究者・大学教員や地域リーダー、行政職員 OB、エンジニアなど 9 名が参画している。なお、本稿で紹介する K 氏も理事の 1 人として位置づく。
- 注 2) 旧西志方村は、1889 年 (明治 22 年) に下原村・永室村・西牧村・山中新村・成井村・西山新村・横大路村が合併・発足した。その後、1954 年に近隣の志方村、東志方村と合併し (志方町の発足)、1979 年 (昭和 54 年)、加古川市に編入され消滅した。
- 注 3) ため池協議会の詳細は、柴崎 (2019) を参照されたい。
- 注 4) これらの取り組みは、「ため池アクション」の実施期間中に開催したものもあるが、多くは実施期間終了後に学生が継続的に関わる形で作成・実施された。

引用文献

- 1) 澤田芳郎 (2015) 「産学連携の分化とコーディネータ」『商学討究』66(1), 351-369.
- 2) 柴崎浩平 (2019) 「ため池管理における市民参加の限界と展望-東播磨フィールドステーションの取り組みを事例として-」『農村計画学会誌』38(3), 341-344.
- 3) 菅野拓 (2021) 「職業としてのコーディネーター-越境的協働を促すメカニズムの体現者-」『国際開発研究』30(2), 11-24.
- 4) 谷口嘉之・平岡俊一 (2025) 「経験知に基づく大学の地域連携プロセスモデルの提案-地域連携コーディネーターの志向と行動様式に関する調査からの展望-」『日本地域政策研究』(34)80-88.
- 5) 中塚雅也・小田切徳美 (2016) 「大学地域連携の実態と課題」『農村計画学会誌』35(1), 6-11.

エコ・ヒューマン地域連携センター活動・研究報告集2025（通巻9号）

令和8年（2026年）3月31日

発行 兵庫県立大学環境人間学部
エコ・ヒューマン地域連携センター

〒670-0092 兵庫県姫路市新在家本町1-1-12
姫路環境人間キャンパス内
いちよう南館P104

TEL 079-292-9372
Mail ecohuman@shse.u-hyogo.ac.jp
<https://www.u-hyogo.ac.jp/shse/ehc/index.html>

Annual Report 2025
